
神剣、慟哭する ～現代滝口譚 2～

世木維生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神剣、慟哭する　〈現代滝口譚2〉

【Nコード】

N7546A

【作者名】

世木維生

【あらすじ】

〈現代滝口譚2〉この世ならざる『魔』を狩る滝口・渡辺詩緒。名刀『童子切安綱』を振るう剣士・源蒼司。因縁の鎖に繋がれた二人の剣士の戦いが始まった。

第巻話・雨（前書き）

この物語はフィクションです。作品に登場する人物、団体、事件、『刀』等は実在のものとは一切関係ありません。

第巻話：雨

霧雨に濡れる世界。

その片隅に在る、和服姿の青年が見つめる植物は、紫の小振りな花々をそば濡らせ、艶やかに色付いていた。

それはモノトーンな世界に唯一、色を持つモノかのように、その存在を強く誇示する。

否、青年の感性が、そう感じるさせるだけなのかも知れない。

梅雨空の下の紫陽花^{あじさい}。

その風景に青年は目を細めた。そして、長い黒髪をうなじの辺りで一つに括ると、その感受性のままに、素材を筆でキャンバスに描き出す。あたかも水墨画を描くかの如く、下書きもなしに水彩画は瞬く間に完成して行く。

筆が速いのは、すでに作品のイメージが完全に出来上がっていたからかも知れない。この大きな社にある広場の一角は、青年にとって原風景であった。幼い頃の様々な想いの詰まった場所なのだ。

雨避けのある休憩所で、青年の創作活動は続く。

「……ほう。見事なものですなあ」

青年の背後で声が出た。

その声を、下衆^{げす}で纏わりつく様な嫌な声だ、と青年は思った。

唐突に声をかけられたことには驚きはしない。何者かが、背後に近寄ってきた事は察していたからだ。

「何か？」

その人物に視線を遣らずに無感情な声で、筆を止めずに青年は訊ねた。

「失礼。先生がこちらにいらっしやると聞きました」

『先生』と相手を敬う言葉を用いながらも、その口調は、相手を

侮蔑しているように感じさせる。やはり勘に触る、と思うと同時に、ある種の滑稽さを男に覚え、青年は薄すらと嘲笑した。

「先生？」

僅かな沈黙も待てずに、男は再び口を開いた。自分を中心に世界が回っているとも思っているようだ。どうやら滑稽を通り過ぎ、愚かなのだろう。自分の思い通りに事が運ばないのが我慢出来ない質らしい。例えそれが、どんなに短い時間であっても。

「私は『先生』などと敬われるには、ほど遠い人間ですが？ 失礼だが、どなたかと勘違いされてはいませんか？」

くだらない時間の浪費は御免被りたい。そういう意識が言葉の端々に感じとれる様、青年は故意にそう発した。

「ご冗談を。私は絵心の解る人間です。その筆の運び具合、色彩の見事さ……貴方は撰津一会先生に相違ないでしょう？」

しかし、男は動じない。面の皮まで厚いのか、それとも無神経なのか。

「確かに私は『撰津』と雅号を名乗っていますが……『一会』とは？ やはりご用向きの人間とは、別人のようですね」

明かにうんざりと青年は答えた。

「いえいえ！ 先生の事です。失礼。『一会』は俗称でしたな。

……先生の作品を求めるバイヤーが、二目とお逢い出来ないと嘆いて、貴方に付けたんです。一会と」

男は厭らしく笑ったのだが、背を向けた青年は当然それを目にしてはいない。それは幸いな事であろう。

「ほう」

青年 撰津はその言葉に、妙に納得して口元を緩めた。確かに自分は特定の売り手を持ってはいない。旅から旅へ、日本各地を転々としながら絵を描き、路金を得るために、その土地その土地の適当な画廊に売るだけだ。

画家として、そこそこ名が売れてきたことは知っていたが、その様な名まで命名されているとは、些か驚きであった。

「先生？ お気を悪くさせましたかな？」

気を損ねさせたのは端からの事であるのに、悪びれた様子なく男は言った。

「いや。一期一会の一会とは、悪くない」

摂津は、目を瞑り微笑んだ。作品を金として見る輩やかいがつけた割には、悪い名ではない。摂津は素直にそう思った。

「申し遅れました。私は河原剛三かわはらこうぞうと申します」

気を許した、そう察してか男は間髪いれずに自己紹介を済ませた。

「河原？」

摂津はそこで初めて話しかけて来た相手を見た。

小太りで背の低い初老の男。身に付けたスーツ、装飾品はあからさまに高級感を感じさせ、鬱陶しく映る。そして、見るからに横柄そつな態度が、さらに男が話す口調通りに慥に触った。

その背後には屈強そつな、体格の良い黒い背広姿のサングラスをかけた男がいる。恐らくは護衛の人間だろう。

「……あと一人、いないが……別口か？……」

摂津は、ぽつりと独りごつ。彼が先ほど自分の背後に感じた人の気配は、三つあったのだ。

「何か？」

その摂津の独り言は、河原の耳には届かなかったようだ。

「……いえ。それで代議士先生が、私に何のご用で？」
整った顔にある涼しげな目を、改めて摂津は河原に向けた。

河原剛三。何かと黒い噂の絶えない国会議員である。そういう背景を含め、現職議員ではかなり知名度の高い男だ。

「ここは私の地元ですから。その地で、先生が名画を描かれた。

……芸術を愛する人間が、それを欲するのは当然の感情でしょう？」
河原は再び、厭らしく笑う。

「名画？ この絵の事ですか？」

その言葉に、摂津は訝いぶかしげに問い返した。

「はい」

川原は大袈裟おおげさに頷いてみせる。

「しかし、まだ完成もしていない絵ですが？」

「いえいえ。十分に見事な作品です」

そう言うなり河原は、オイ、と小声で背後の男を呼ぶ。

サンングラスの男は、背広の内ポケットから紙切れを一枚取り出し、二人に歩み寄る。そして、仰々（ぎょうぎょう）しく撰津にお辞儀するとそれを差し出した。

それは金額欄が無記入の小切手だった。

「いかがですか？」

河原は、満足げに顔を歪める。

撰津は男の手から小切手を取ると、微笑んだ。

それを見た河原の顔が、さらに醜く崩れる。

しかし、それは刹那、驚愕の表情に変わった。

「なっ！ 貴様っ！」

次の瞬間、撰津はその紙を二つに裂いたのだ。

「……どうやら貴方は私の知ってる噂通り、本当に下衆だったようだ」

冷ややかに蔑さげすみ、青年画家は嗤う。

「貴様！ 儂を愚弄くろそうするか！」

河原の怒鳴り声と共に、護衛の男が身構える。だが、それ以上は動けずにいた。

撰津という青年画家に気圧されたのだ。

「貴方は芸術を金でしか見れない貧しい人間だ。お引取りを」

静かに、しかし、威圧的な何かを目の前の二人の男に突きつけ、

撰津は言い放った。

「くっ！ 覚えておれ、若僧！ 儂を怒らせた事を死ぬほど後悔させてやる！」

川原は喚き、踵かかとを返してその場を離れた。煮えきらない怒りが、その背中に窺える。護衛の男も暫しの後に、そそくさと河原に続いた。

「来たか……」

去り行く男たちとすれ違いに、傘も差さずに一人の少年がこちらに向かつて来るのを、その視界に確認すると撰津は呟いた。

彼の察知した、もう一人の気配である。

その少年が先ほどまで川原の居た場所に立った。黒衣の少年。彼は黒一色の服装に身を包んでいた。

「……いつかこの地に現れると思っていた」

創り物、そう見紛うほどに美しい顔立ちのその少年が口を開く。

「生憎と人物画は描かぬのだが……モデルにでもなりに来たか、少年？」

撰津とて十分に美形とされる容姿をしているのだが、この少年の前にそれは霞む。

「……源蒼司だな？」

黒衣の少年は撰津の発言を無視し、無表情に訊ねた。左手には竹刀袋を持ち、その手首に小さい銀色の鈴が在った。

撰津一会 源蒼司には見覚えのある鈴だった。その鈴は無二の

親友が宝物としていた物だ。

「……枉希の弟か……」

青年が、かつてのその親友の名を小さく溢す。その名の人物は、すでに他界していた。

「仇を討ちに来たのか？」

言いながら蒼司は立ち上がる。そして、キャンバスに立て掛けてあった、黒衣の少年の手にある物と良く似た細長い包みに手を伸ばした。

かの人物の直接的な死因、その発端に蒼司は深く関与していた。仇敵として目されるに十分な心的外傷を、故人に与えたのだ。

言葉の文でなく、事実、その心的外傷こそが枉希という人物を殺したのだから。

「……関係ない。俺はお前を『魔』を殺しに来ただけだ」

少年は竹刀袋の紐を解きながら、それを否定した。

竹刀袋の中から放たれたものは、その名が示す物ではない。この国の産み出した、芸術品の域にまで達した武器、刀だ。

「なるほど……私情を捨て、ただ滝口の役目を全うする、と言つことか……強いな、柁希の弟」

蒼司も同じく、その手にある包みから刀を引き抜く。

「……だが、お前に私を止められる力はあるのか？」

小切先。小乱れながら、直刃の刃文。蒼司の手にする刀は古雅な作風の見事すぎる業物であった。

「童子切安綱。お前の無名の刀では役不足だぞ」

冷やかな光を放つ刃と同じ類の眼光を、少年に「魔」と呼ばれた青年画家は湛える。

「……止めるさ。だから、俺は滝口を継いでいる」

屈強な男の動作を封じた蒼司の鋭い氣に怯まずに、少年は殺気の籠った真っ直ぐな視線を送りながら呟いた。

ゆっくりと二人の剣士は身構える。

「ほう……では手並みを拝見しよう」

蒼司は口元を歪めた。

雨は未だ、辺りを濡らし続けている。

「渡辺詩緒。お前を殺す人間の名だ」

黒衣の少年は静かに凜と告げ、そして、地を蹴った。

第貳話：琴音

武道場は熱気に包まれていた。
高校総体出場への予選を兼ねたこの大会に、新しいヒロインが誕生したからだ。

剣道女子個人戦。

競技名は知られているものの、マイナー感のあるこの競技に新たに産まれたヒロインは、大会初参加のルーキーであった。

スポーツでは無名に等しい学校の彼女が、次々と強豪校の猛者たちを打ち負かし、遂には決勝の舞台へと駒を進めたのだ。

会場にいるのは、ほぼ関係者のみである。

しかし、彼女の試合の度に、会場に人だかりが出来るのには訳があった。

会場にいる大会参加の男子生徒のほとんどが、彼女の追っかけと化しているのだ。

大一番。決勝戦の舞台を前に座す少女。

幼さの残る可憐なその少女は、ゆっくりと面を被った。

「白！ 源琴音！」

主審が少女の名前を呼ぶ。その新たなヒロインは立ち上がると、決戦の場を構成する境界線の前に立つ。そして、その足元の白線を跨ぐと反対側、真正面に立つ対戦相手に向かい、一礼した。

「琴音〜！」

不意に、アイドルの親衛隊の発するような低い濁声だみこえが起る。

その声を聞き、琴音は面の下の顔を真っ赤に染めて頭を垂れた。

「もっ……」

ぼつりと呟く。しかし、頭を振って、大きく深呼吸を一つ吐くと、

「集中、集中……」

と小声で自分に言い聞かせ、平常心を取り戻した。

一步一步、ゆっくりと開始線へと足を運ぶ。三歩目、竹刀を抜き

ながら開始線へと至る。

対戦相手は琴音よりも二つ年上。つまりは三年生の生徒であった。昨年おとこの高校総体の覇者。今大会でも大本命とされる選手。神谷直かみや子。圧倒的な強さで、高校剣道界の女王の名を欲しいままにする剣士であった。

中心点を挟み、三メートル弱の位置にいる神谷は琴音よりも頭二つは上背があつた。それは年齢から来るものだけではない。神谷が女性では大柄な体格をしていることもあるのだが、加えて、琴音が小柄なのだ。これは対戦した相手ほとんどに言えたことなのだが、彼女は身長差という大きなハンデを払い除け、この最終戦の舞台に立ったのである。

二人は蹲踞そんきょの姿勢へと、静かに移行する。

琴音はもう一度、大きく息を吸い込み、そして、吐いた。

試合開始の宣告を待つ。

神谷の目をじっと見ながら、琴音は心地よい緊張感の中にいた。

心臓の鼓動が聞こえる。

外野の声は、もう、届かない。

「始め！」

主審の声が響いた。互い、立ち上がる。

一閃。

開始された瞬間に、試合は動いた。

甲高い裏声を発しながら、神谷は流れるような小手面を放つた。昨年の総体においても、ほとんどかわされることなく彼女に勝利をもたらした連携技。相手の小手に対する打ち込みに合わせ、小手を打ち攻撃を防ぐと、すぐさま面を放つ。神谷のこの連続攻撃は見事な完成度を誇っていた。

必殺技。そう呼べる領域にまで昇華すべく、彼女が何千、何万と毎日、反復して練習を行なった成果であった。

二人の副審が白旗を斜め上方に上げる。続けて主審も白旗を上げる。

「胴あり！ 一本！」

そして、高らかに宣言した。

しかし、決まったのは神谷の小手面ではなく、琴音の抜き胴だったのだ。

琴音が初手に放った小手は、神谷の小手面を誘う罠だったのである。続けて振り下ろされた上段からの攻撃を、琴音は前方へ駆け抜け、避けると共に神谷の胴を薙ぎ払ったのだ。

神谷の小手面が必殺技と呼ばれるものであったのなら、琴音の体裁きは神技であった。

「バロンドールと、日本の小学生くらいの差はあるでしょうね」

湧き上がる歓声の中、琴音の試合を二階席から見ていた長い髪の少女は独り、二人の戦力差をそう評した。色素が薄いのか、色白の透き通るような肌と茶色の髪を持つその美少女は、もう勝負は決したと言わんばかりに席を立つ。

「さて……なんて声をかけようかな？」

歩きながら、呟く。

その背後で、二度目の歓声が起こった。

「完敗よ。よく私の小手面をかわせたわね」

試合後に、神谷は琴音にそう話しかけてきた。女生徒に控室として解放された、柔道場でのことである。

「え？ あ、はい！ ……準決勝で神谷先輩の試合、見させてもらいましたので……」

照れながら琴音は答えた。

「え？ あのー試合で？」

神谷は驚きを隠せずにいた。確かに、その試合で神谷は小手面を放ちはした。しかし、一度だけである。

「はい……って、何かおかしいですか？」

開いたままの口。ぽかんとした表情の神谷を見て、琴音は恐る恐る訊ねた。

「……あ、あなた中学の公式戦には出ていないわよね？」

「はい……」

不自然な発言をしてしまったのかな、と琴音は不安げに答える。

「……わ、私の小手面がそれほど稚拙な技だと言いたい訳！？ 一度見ただけで見切れるとでも言いたいのか！？」

神谷は突如、怒鳴り散らした。琴音には理解出来ないことであつただろうが、それは彼女の剣道に賭けた、これまでの人生を侮辱するとも取れる言葉だつたのだ。

「え、いえ、ち、違います！」

琴音は慌てて、取り繕うとするが、上手く言葉を紡げなかった。

「彼女は天才なんですよ」

不意に横から声がした。二人の少女剣士がそちらを振り向く。

そこに立つのは、先ほど二階席で観戦していた少女だつた。

「はあ！？」

「瑞穂！？」

神谷が素つ頓狂な声を上げ、琴音はどうしてここにいるの、と続かんばかりに彼女の名前を口にする。

「初めまして。私、鳳翔高校の賀茂瑞穂と言います」

瑞穂はそう自己紹介をすると、深々と神谷に頭を下げた。

「神谷先輩。加納一二三かのう ひふみ はんし範士をご存じですか？」

そして、上体を起こすと、瑞穂は神谷に語りかけた。

「え？ ええ……」

範士とは、現代剣道界における最高位の称号のことである。突然に出たお偉いさんの名前に、神谷は目を丸くした。

「彼女は先生の秘蔵っ子なんですよ。幼い頃から先生の厳しい指導を受け、ついに許しを得て、今日、デビューしたんです……」

出任せ話。根も葉もない話。事実無根の話である。

「ちよつと……瑞穂？」

何か言いたげな琴音を、瑞穂は目で制し、続ける。

「……彼女は行く行くは、国民栄誉賞を受賞とる少女なんですよ！
それが加納範士と彼女の目標なんです！」

瑞穂は神谷に力説した。

「……どこの柔道漫画の話よ？」

琴音はその説明の一部始終を聞くと、ため息を吐き、右手で額を押さえながら呟いた。

誰が、そんな話を信じるんだろう。琴音は心底そう思う。

「なるほど。琴音さん……貴方も私と同じ、剣道に青春を賭けた人だったのね……！」

目を輝かせながら、神谷は瑞穂から琴音へと視線を動かした。信じる者はいたのだ。彼女の目の前に。

「は、はあ……」

どう反応していいのか解らずに、あやふやな返事を琴音は返した。

「私たちはこれから永遠のライバルよ。いつか、もっと大きな大会の決勝で戦いましょうー！」

神谷は右手を差し出した。

「は、はあ……」

とりあえず、琴音も右手を差し出し、神谷と握手を交した。

しばらくの談笑の後に神谷は、後輩を待たせているから、と告げると二人を残して立ち去った。

「単純……もとい、爽やかな人ね」

琴音の冷やかな視線を感じ、彼女の背中を見送っていた瑞穂は呟いた。

「……どういつつもりよ、瑞穂？」

げんなりと、琴音は瑞穂に訊ねた。

「あれ？ ナイスフォローだったと思ったんだけど？」

「……どこをどう解釈すれば、そうなるの？」

「結果かな？」

瑞穂が満面の笑みで答えた。

「もう、いい……」

その笑顔に何も言えず、琴音はもう一度、ため息を吐いた。

遠くで歓声が聞こえる。プログラムに大きな狂いがなければ、琴音と神谷が戦った舞台上、男子個人の決勝が行なわれているはずである。

「で、どうして突然、大会に参加したの？ ……やっぱり、お兄さん？」

短い沈黙の後、先ほどと打って変わって真剣な眼差しで瑞穂は話を切り出した。

「……うん」

ぼつり溢して、琴音は小さく頷く。

「……私の名前が、どんなメディアにでもいいから、出ることがあったら、連絡、くれるかな？ ……って……」

続けて、淋しそうに呟いた。琴音の兄、蒼司は数年前に家を出たきり、行方知れずになっているのだ。

「そう……」

瑞穂にはそう返すことしか出来なかった。琴音は世界の裏を知らないのだ。滝口のこと、瑞穂のもうひとつの顔、陰陽師のこと、

そして、『魔』のことも。

『魔』とは、この世ならざる悪しき存在。この世ならざる力を使い、人の世に害を成す者たち。

滝口という退魔武士が、陰陽師という退魔術士が討つべき敵である。

探し続ける兄が、その『魔』であることを琴音は知らない。

瑞穂がこの場所を訪れたのは、幼馴染である彼女の試合を見に来たからだけではない。蒼司が妹の前に現れる可能性を考慮してのことであった。

相方である滝口は、今頃、彼が幼い頃に修行をした場所にいるはずである。いや、正確には彼らが修行した、と表現すべきであろう。琴音が高校剣道レベルで桁外れに強いのは、彼女が裏の世界を知らないだけで、滝口としての修練を兄と積んでいたからなのだ。

「……近くにいるのよ……」

ぼつり、瑞穂は小さく呟く。

「え？」

琴音が聞き直す。

「ん？ 近くにいたらいいね、って言ったのよ」

偽りの笑顔を見せる。その言葉は瑞穂の本心ではなかった。近くにいたら、接触してしまえば、瑞穂は蒼司と戦わねばならないのだから。

「うん」

琴音が微笑み、頷いた。瑞穂は彼女の気持ちを知っているから、その笑顔に、心が痛んだ。

第貳話・琴音（後書き）

<サッカー用語解説>

バロンドール：欧州年間最優秀選手に贈られる賞。そのシーズン中に世界で一番サッカーが上手かった人、と解釈してもらっても良いかと。

第参話：童子切

童子切安綱。

伯耆国大原安綱（ほうきのくに おおはら やすつな）という平安時代の刀工が平安中期に打った太刀である。

この刀は安綱の最高傑作であり、『天下五剣』 最も優れた五本の日本刀、の一つに数えられる、言わば名刀中の名刀であった。そして、この名刀は退魔の刀でもある。

源氏の英雄の一人、源頼光が、かつて大江山に住んだとされる鬼の王の一人『酒吞童子』の首を刎ねた刀なのだ。故に、この名刀は『童子切』の号を冠するのである。

童子切安綱は滝口たちが代々、宝具とし保管し、そして、封印してきた刀であった。

『魔』を斬った刀には、その『魔』の穢れが残る。通常はその穢れを祓い浄化させるのだが、ときにその残滓が祓いきれず、強力な呪として刀に残ることがあるのだ。

呪の残った刀は、あるものは所有者に仇なし、あるものは新たな『魔』を呼ぶ、産む。

災いをもたらす刀、妖刀へと変じるのである。

封印されてきた童子切安綱という名刀。

鬼の王の呪いは祓いきれるものではなく、その名刀を妖刀へと変じさせたのだ。

「……どうしても行くのかい？」

線の細い、いつもは優しいが今は鋭い表情が浮かんでいる。今、鋭い表情が浮かんでいる。

その少年こそ、稀代の滝口と謳われる渡辺柁希であった。

問いかけた一言に、柁希の思いが、これまでの共に死線を潜り抜けて来た絆が籠められていた。

その言葉を受けて、蒼司は少しだけ微笑んだ。

「……ああ。後戻りは出来ない」

だが、そう返答し、戦友であり親友の呼び掛けを拒絶する。

「考え直せ！ 蒼！ お前の考えは解らんこともない！ しかし、その考えを貫けば、お前は『魔』になっちまうんだぞ！？」

蒼司の前に立ちほだかる、もう一人の男、巨漢の青年が叫ぶ。

「覚悟の上だ」

「……それじゃあ、妹はどうなる？……飛鳥はお前を待ってるんだぞ！？」

巨漢の青年は、目から涙を零した。鋭い顔に似合わず、この男は三人のなかで一番に情に厚く、涙もろい。直情型の人間なのだ。

その筋骨隆々とした肉体が戦慄していた。

「……もう遅い……私はすでに、お前たちの言う『魔』に堕ちている……」

目を伏せて蒼司は言った。そして、手にした刀を抜き放つ。その鍔元に桃の木で彫られた、小さな桃の花が飾りのように吊られている。

その桃の花こそ、封印の証であった。

「……柁希、剛……四天王としての役目を果たせ……棟梁としての最後の命令だ……」

「っ！ その刀っ！？ 獅子王じゃねえ！？ 蒼！ てめえ！」

巨漢の青年 剛が吠える。

「童子切！？……蒼司、君は……」

柁希には、封印されていた童子切安綱を奪うという暴挙に、彼の真意が理解出来た気がした。

緑の映える紫陽花の葉。溜った雫がその表面を流れた。

雨は未だ止まず。

水を含んだ砂利を蹴る音が静かな境内に響く。

そこを殺陣の舞台とする二人の剣士。その少年の黒衣も、青年の和服も、霧雨にしっとり濡れていた。

「その程度か？ 柁希の弟？」

蒼司は童子切の切っ先を突き出しながら、相對する黒衣の少年を嘲笑う。繰り出されたその突きは、稲妻の如く鋭く激しい一撃であった。

「くっ！」

詩緒は、バランスを取ることを捨て、背面から地面に倒れることでその一撃を寸前のところでかわした。

背が地に着くや転がり、追撃を回避するべく逃げる。

「……あの程度を楽に回避出来ぬのならば、私には勝てんぞ？」
追撃をかけずに詩緒が立ち上がるのを待つと、蒼司は口元を歪めた。

「余裕だな……なるほど。先代の棟梁だけのことはある……」

詩緒が呟く。自身にも余力のあるような発言。しかし、その実、少年にそれはない。

棟梁とは、日本各地に散る滝口たちを統べる者のことである。『

滝口』渡辺詩緒が狙うのは、『元滝口』源蒼司。それもその頂点に君臨した者であったのだ。

「……お前がまだ未熟なだけだ。柁希ならば弾き、返し手を放つていたぞ」

その話には触れさせぬ。そういう意志が働いたのか、蒼司は言葉を放ちながら仕掛けた。

渡辺詩緒という滝口は、現役の滝口の中ではトップクラスの戦闘能力を有する少年である。突出した状況把握、反射、反応能力により、敵の動きを察知し、その動きに対応して最善のリアクションを起こす。後の先の戦い方を得意とする剣士である。

しかし、その彼をしても、蒼司の動きに対応することは困難であった。

雨に生じる音さえも巧みにフェイントに使い、虚へ虚へと動くその体捌きもさることながら、攻撃の動作を読むのもっとも適した気配 殺気がほとんど発生しないのだ。

攻撃の刹那だけに僅かに感じ取れるその気配を頼りに、ぎりぎりのところで詩緒は回避動作に移る。

滝口の少年は上体を後方に反らし、薙がれた凶刃を避けた。

「……もっとも、それが叶うのも、童子切と切り結べる刀あつてのことだが……故に聞こう」

薄っすらと余裕の笑みを湛えたまま、蒼司は言葉を続けた。

そう。詩緒は一度も童子切とは切り結んではいなかったのだ。

切り結べば、あるいは反撃の一手を放てるのかも知れない。それこそ彼の得意とするスタイルなのだから。

日本刀は折れず、曲がらず非常に優れていると評される。しかし、それは刀剣というカテゴリーでの評価にすぎない。武器全般で見ると、日本刀は決して耐久力に優れた武器ではないのだ。刀身同士で打ち合えば、刃こぼれなどは当然のように起こる。実際に、古来、この国の合戦に於いて、刀は補助武器でしかない。主武器としては些か耐久性に欠けるのである。

詩緒はその最悪のケースを想定しているのだ。

童子切安綱という名刀は、妖刀となり、さらにその切味を異常なレベルにまでに高めている。そして、それを振るうのは滝口の頂点にかつてあり、柁希と双壁を成した達人である。

「明らかな力量の差があれば。」

この二つにかかれれば、詩緒の刀は切り結んだ瞬間に、折られる可能性が高いのだ。

事実、過去にこの男が刀ごと切り捨てた滝口は数人いる。詩緒の使う刀は彼らと同じ、滝口付きの刀工の打ったものに過ぎない。

「枉希の愛刀をなぜ使わない？」

問いながら振られる刃は、一撃必殺の業わざである。おおよその相手に、それと共に問いかけたところで、答えを聞けるものではない。

果たして何人の剣士がその刃をかわし、受け止め、返答を遣ることが叶うだろうか。

「お前は何故、獅子王を捨てた？」

獅子王とは滝口の棟梁がその証として受け継ぐ名刀である。袈裟に振られた童子切を避け、返答を送る資格を得ながらも詩緒は自らの疑問を聞く。

「マイペースな男だな」

まるで平時のように、蒼司は呆れた口調で呟いた。

「答える、蒼司。お前はなぜ滝口を捨てた？」

詩緒が無名の刀を振るう。金属の刃同士ぶつかり合う音が響いた。蒼司はそれを童子切で受け止めたのである。

二人の剣士が、力を込め、鏢つはせ迫り合いを演じる。間近に顔を付き合わせる。

「……今の貴様に返す答えなぞない……それに訊ねているのは私だ！」

力は蒼司が勝る。徐々に童子切の美しい刃文が詩緒の顔に迫り来る。

「兄の愛刀あはれは俺の扱いきれるものじゃない！」

突如、詩緒が身を引く。力を込めて詩緒を押している蒼司は、勢い余り、前のめりに体勢を崩すはずであった。

「認可が必要か？」

しかし、蒼司はその詩緒の行動を読んでた。多少、重心を崩し

ながらも冷静に呟き、刃を流れるように走らせる。

「ちい！」

詩緒が呻く。

「ならば、私はその認可をくだそう！」

蒼司が吠える。童子切は詩緒を真つ二つに割るべく、縦に振られる。勢い良く刃風はかせが生じる。

「どの口がほざく！」

過去、詩緒は兄に全てにおいて勝ったことはない。剣術に至っては、その差をまざまざと感じるばかりであった。この敵のそれは、兄と互角、あるいは時間が許した分、上を行くかも知れない。

しかし、詩緒は覚悟を決した。己の力量を信じ、童子切を受け止めるべく反応する。防御に動く太刀筋を完全に看破されなければ、折られることはないはずである。

詩緒は刀を童子切に向けて走らせる。果たして。

刃音はおとが木霊した。

詩緒の無名の刀は折られることなく、童子切をその刀身で止めていた。

「…… 柩希の呪縛を抜えたか？」

目前で我が刃を止める親友であった男の弟に、微笑みながら、ぽつりと蒼司は言った。

「何!？」

詩緒が驚きの声を漏らす。

次の瞬間、和服姿の剣士は、黒衣の少年に膝を見舞った。

「ぐっ！」

詩緒の鳩尾みぞおちに蒼司の膝がのめり込む。

「…… 油断をするな」

蒼司は諭すように言い、続け様に童子切で空を裂く。

閃く白刃。

追って、響く金属音。

詩緒は童子切の刃を、再びその手の無名の刀で受け止めていた。

「……なるほど。やはりそれが、お前の実力のようだな……」
満足そうに笑いながら蒼司は呟いた。

「お前は……!?!」

詩緒は敵である、『魔』であるはずの、その男を見る。
雨は止んでいた。

剣劇もその瞬間に、不意に終わりを迎えていた。

「……鬼切おにぎりを手にしろ。詩緒」

蒼司は静かに、そう告げた。

第参話：童子切（後書き）

<刀解説>

童子切安綱：国宝。実在する刀です。実物は東京国立博物館が所有。
歴史上、数々の有名な人物（秀吉、家康等）が所有していますが、作
中の設定ではこちらはダミーってことにしています。また『妖刀』
類の設定は当然、僕の妄想の産物ですので本気にしないで下さい…。
獅子王：源頼政が鶴退治をした際に褒美として賜った名刀。

第四話：遭遇

昼過ぎまで降っていた雨は上がり、雨雲なき空が広がっていた。降り続いた雨のため、数日ぶりに姿を見せた陽は、しかし、すでに暮れかかっている。

「待つてくれなくても良かったのに」
本当に申し訳なさそうに、琴音が言う。

高校総体の予選を兼ねた大会の行われた武道館。その入り口から伸びる大階段を、琴音と瑞穂は並んで下りていた。

「いいのよ。この後の約束まで時間あったし。それに琴音の国民栄誉賞への第一歩を、最後まで見たかったから」

そう冗談めかしながらも、瑞穂は伸びをして、欠伸を噛み殺す。彼女のその言葉には、嘘が半分含まれていた。

待ち人は結局、現れなかったわけであるが、妹の晴舞台を見に来るかも知れない敵を、瑞穂は最後の一瞬まで待つていたのである。表彰式、閉会式は確かに彼女にとっては退屈なものであったが、役目でもあったのだ。

当然、幼馴染みとして祝福したい気がないわけではなかったのだが、琴音の優勝という結果は当たり前前のこととして予想していただけに、それに対するテンションが明らかに任務に比べて劣っていたのは事実であった。

「そう。それなら良かった」

しかし、瑞穂の言葉を国民栄誉賞の件はさておき、額面どおりに受け取った琴音は安堵の表情を浮かべて微笑んだ。

「……本当に今回は嫌な役回りね……」

そんな彼女の横顔を見て、うんざりと瑞穂は小さく呟く。
しかし、同時に適任であることも理解していた。

他の滝口や陰陽師に任せてしまっただけ、恐らく琴音は悲しむだけの結末を迎える可能性が高いのだ。

事情を、琴音の気持ちを知る自分ならば、彼女を傷つけないよう配慮して動くことが出来るかも知れない。この陰陽師の少女は、そう考えてわざわざこの仕事を引き受けたのだから。

「俺一人で十分だ」

それにそう語った、どこその無鉄砲で無愛想な身のほど知らずのお目付け役という側面もある。

ほんの数年前のことである。

伝承される四つの退魔の武器を扱う高位の滝口『四天王』に空位が一つあったものの、その一角を担う稀代の滝口と謳われた詩緒の兄、証希を始めとして、現在の棟梁である平井万葉等、当時の滝口は過去に例を見ない精鋭ぞろいであった。

その頂点に君臨していた人物こそ、今回の標的でもある源蒼司なのだ。

今回の任務を一人で遂行しようなどと、自殺行為に過ぎないと瑞穂は思う。

「……あのバカ……死んでなきゃいいんだけど……」

ぼつりと待ち合わせをしている少年に愚痴る。

その少年は、滝口としての任務に対し引き際というものを知らない。例えどの様な状態に陥ろうとも、死ぬまで戦い続けるだろう。

当然、相方である滝口『あのバカ』とその標的の死闘が、上がった雨と共に終わりを迎えたことを瑞穂は関知していない。

「で、誰と待ち合わせてるの？ もしかして、彼氏とか？」

呟いていた瑞穂に、琴音が興味深げに訊ねる。

「じよ、冗談！ なんでアイツなんかが！」

間髪入れずに瑞穂は即答した。

「ふうん、そうなんだ」

瑞穂の反応を見て、意味深長に琴音は笑う。

「ち、違うわよ！ 本当にそんなんじゃないってば！」

「ふうん」

琴音の疑いの眼差しが瑞穂に刺さる。

「な、何よ!？」

眼差しに耐え切れず、瑞穂は視線を琴音から外す。

「瑞穂」

琴音はそのことについて瑞穂に追求を開始するつもりだったのだが、それは叶わなかった。

「琴音!」

背後から不意に、彼女を呼び止める男の声がしたからだった。

突然の声に瑞穂は気持ち、身構えて振り返える。

声の主は男である。標的である可能性があるのだ。

だが、その声が記憶の片隅にある蒼司のものとは一致せず、また、一瞥で標的の人物でないことを判別すると、陰陽師の少女は胸を撫で下ろした。

もしこれが仮に蒼司であったのなら、自分がここに現れた大半の意味を失ってしまう。

そこに立つのは細身で長身の少年だった。

メンズ雑誌のモデルが、そのまま抜け出したような優男。

その優男が、下心が窺えるような笑顔で、やあ、と言わんばかりに左手の平を胸の高さで開いていた。

彼の背後には、無愛想面をした少年が一人。

この優男について歩くのが不満だと、明らかに態度に現れている。

癖の強い黒髪、黒一色の服装。

瑞穂の気を引いたのは、むしろこの少年だった。

佇まいや、格好が相方の少年に酷似しているのだ。

だから、直感で理解した。

この少年は『こちらの世界』の人間だと。

「河原くん」

黒衣の少年に気を取られる瑞穂をよそに、琴音が優男の方に声をかけた。

「今日の大会、大活躍だったね。応援してたよ」

二人の少女に歩み寄りながら、優男がウインクして微笑む。

「応援してくれてたんだ。ありがとう」

琴音は笑顔を作ると、素直に礼を述べた。

「礼なんていらさないさ。僕が琴音を応援したかっただけだからさ。

それよりも、決勝の相手はチャンピオンだったんだろ？ 本当に凄

いよ！ おめでとう」

いかにも感心したような口調で感想を述べると、次に優男は琴音の隣に並ぶ瑞穂に視線を送った。

瑞穂は警戒するように黒衣の少年を見ていたのだが、その視線を感じ、優男へと注意を移した。その視線に強い情欲を察知したのだ。

瑞穂はこういう勘が鋭い少女である。否、瑞穂はこういう感情を感じ取れる鋭い陰陽師である、と表現する方が正確であろう。

人の感情というものも陰陽道の思想、陰陽五行に配されるのだ。

瑞穂は五行の力を通常の状態で感じ、行使できる有能な陰陽師なのである。よって、人の感情を五行として感知することがままある。

特にこういう類の邪な感情は感知し易いのだ。

「君は？ 琴音の友達？ スタイルも抜群だし、凄くカワイイね」

瑞穂を足元から順に全身を見て、優男は言う。

「どうも……」

褒め言葉なのだろうが、しかし、隠された感情を知る瑞穂はそれだけしか返さなかった。

「……誰？ このキモいの？」

琴音の耳元に顔をやり、小声で瑞穂は訊ねる。

「はは。照れちゃって。本当にかわいいよ。君、シャイなんだね。

僕、かわはら河原潤一。かじゅんいち琴音のクラスメイト。よろしく」

琴音の答えを待つことなく優男は自ら名乗ると、瑞穂に右手を差し出す。

しかし、瑞穂は握手を求めた潤一の右手を無視した。彼の内にある欲情を知れば、当然といえば当然の行為である。

琴音は非礼にあたるその行為にうろたえた。だが、それを見なかったことにすると、瑞穂は後方に控えるように存在する少年について訊ねた。

「それより、後ろのあの人は、貴方のご友人かしら？」

「え！？ アイツ！？」

やり場のないままの右手を宙に置いたまま、潤一は驚きの声を上げた。

自分よりも連れ合いに瑞穂の気が向けられていたのが余程、衝撃が強かったのか、潤一の表情が強張る。

「あ。そうね！ 紹介し合わないとね！ 彼女は私の幼馴染みで、賀茂瑞穂さん。そちらの方は、河原くんのお友達？」

場を取り繕い、空気を変えるように、極めて明るく琴音は瑞穂を紹介した。

「あ、ああ。オイ、お前」

琴音の発言を受けて、偉そうに潤一は後半に控える黒衣の少年を呼んだ。

「何？」

気だるそうに少年は返事をする、階段を数段下りて三人に近づく。

「お前に紹介な」

見下すように潤一はその少年に言う。

「こちらが源琴音さん」

「はじめまして。よろしくね」

潤一が琴音を紹介し、琴音が挨拶と共に頭を下げるも、少年は無反応だった。呆然と琴音を見るだけだ。

「で、こちらが賀茂瑞穂さん」

しかし、瑞穂の名前を聞いた瞬間、少年はぴくりと眉を動かした。瑞穂はそれを見逃さなかった。

「どうも……どこかで逢ったことがあったかしら？」

出会いの挨拶にしては冷淡な物言いで、含みを持たせて瑞穂は微

笑んだ。

「いや。初見だよ……『賀茂』さん」

少年は瑞穂の名字を妙に強調し、彼女の言葉を否定する。

「俺、辰巳当麻……」

そして、ぶっきらぼうに自己紹介をした。

「『辰巳』くんね……」

瑞穂は当麻がしたように、彼の名字を強調し復唱する。

名前を聞いても心当たりはない人物であった。しかし、この辰巳当麻と名乗った少年は自分の名前に反応したのだ。

瑞穂は現代日本で五指に入る陰陽師である。

この少年はその自分を知っているのだ。この少年が同じ世界に生きる人間であるという瑞穂の考えは、確信に変わった。

「そうだ！ 瑞穂も当麻が気になってるみたいだしさ、四人でどこか遊びに行こうか？」

二人の間の不穏な空気をどう読んでの提案かは解らないが、潤一はそう言いながら、琴音と瑞穂の肩を抱いた。

「ごめんなさい。今日は疲れてるから」

「この後、待ち合わせてるから」

琴音はさりげなく、その手から逃げ、瑞穂は嫌悪を示し、その手を払い除ける。

「ちえ」

潤一はつまらなさそうに舌打ちをした。

「あ！ いけない！ もうこんな時間だよ！？」

ちらりと琴音は時計に目をやると、少し大袈裟に焦りながら瑞穂に話しかけた。

「待ち合わせまで、もう余裕ないよ？」

そして、続ける。どうやら琴音もこの場を早々に逃れる口実を作りたいようだ。

「あ！ 本当！」

正直なところ瑞穂は、いい加減、この潤一という男にキレてやる

うと思いはじめたところだったのだが、琴音の今後の学校生活のこと
も考え、その言葉に乗った。

「ごめん、河原くん。じゃあ、また学校でね」

琴音が潤一に、別れの挨拶を切り出す。

「残念だけど、予定があるならしょうがないね。じゃあ、気をつけ
て」

引き際は心得てはいるらしい。潤一は意外にあっさりと言う
と二人に手を振った。

しつこく食い下がることを予想していた瑞穂は、肩透かしを食ら
うも、一礼をして、早々に階段を下り始める。

「うん。今日はありがとう。河原くんも気をつけて」

琴音はひらひらと手を振り返す。そして、瑞穂を追った。

「お前のせいだぞ。今日こそは琴音を落とす予定だったのに……」
手を振り琴音と瑞穂を見送っていた潤一は、二人の姿が遠のくと
当麻をきつい口調で責めた。

どこをどう解釈すればそのような結論に至るのかは解らないが、
彼の理論ではそうなるらしい。

父親に似て、唯我独尊なところがありありと窺える。

「朝まで一緒にいた女がいるだろ？　なんでわざわざ別の女に手を
出す必要があるんだよ？」

当麻は潤一の友人ではない。彼の父親の雇った人間である。今は
ボディガードとしての潤一についているだけなのだ。

「くだらないこと聞くなよ……アイツは用済み。一度、股を開いた
女なんて、もう性処理道具でしかないさ」

潤一は口端を歪める。

「それに琴音は間違いなく処女だぜ。遊び甲斐があるだろ？　なん
なら俺がヤツた後に回してやろうか？　調教する面白さを教えてや
るぜ？」

そして、その言葉を続けると下品に笑った。

「……くだらね」

冷やかに当麻は呟く。

「あ！ 瑞穂だっけ？ アイツのが好みか？」

「……『賀茂』？ いや、興味があるだけだよ……」

ぼつりと当麻は口にした。

「じゃ、俺の依頼も受けないか？ 報酬はあの女で

にやけ面で潤一が提案する。

「……君の親に頼んで、部下のヤクザ者にでも拉致らせるつもり？」

「馬鹿だな…… あんな女、俺の魅力で楽に口説けるさ」

根拠のない自信を、潤一は見せて嗤った。

「……今夜は剛三さんからの仕事があるんだよね」

河原剛三。その国会議員こそ、当麻のクライアントであった。

「明日でいいさ…… 作戦があるんだよ。名付けて『白馬の王子様』

作戦さ」

ネーミングからして、さぞ底の知れたお粗末な作戦なのだろう。

当麻はそう思って、それを顔に出すが、潤一は理解しない。ようよ

うと作戦について語り出す。

「式神しきがみ、だっけ？ お前の使う化け物。あれでさ、琴音を襲うんだ

よ」

「それを君が助ける、って？」

作戦の概要を当麻が引き継ぎ言う。やはり底の浅い陳腐な作戦だ、

と当麻は鼻で笑った。

「わかってるじゃん！ よろしく頼むぜ『八卦衆はっけしゅう』の辰巳さんよ」

当麻の背中を二、三回叩きながら仰々しくのたま宣う潤一の言葉は、む

しろ、人を小馬鹿にする様にしか聞こえない。

八卦衆という世界の裏の顔を持つ少年は、このクライアントの愚

息に呆れ笑いを送った。

第五話：辰巳

剛は手にしていた巨大な鉞まさかりを肩に担いだ。

「枉希……手え出すんじゃねえぞ……」

そして、並び立っている少年剣士に呟くと、一步前へと歩み出る。「俺とこの得物が手加減出来ないことは知ってんな!? その上で喧嘩、売ったんだよなア!? 蒼!」

剛が凄む。厳つい顔が更に威圧的に変形し、相手に殺気の籠った視線を遣る。

剛は目の前の敵を、単なる友人とは認識してはいない。

『魔』に堕ちたと宣言したその男は、剛の溺愛する妹の恋人なのだ。義弟として接してきた相手なのだ。

だから、尚、この青年の怒りは大きかった。

蒼司は何の相談もなしに行動に移したのだ。

それが自分を敵に回し、妹を捨てるという結果を招くことを理解していたにも関わらずである。

滝口の頂点にあったということ、彼の苦悩はさらに強かったのだろう。だからこそ、自分に打ち明けて欲しかった。そうすれば、少しは彼の支えになれたのではないか。

「剛……それはこちらも同じだ。……童子切の試し相手になってもらう」

剛の迫るような迫力に臆することなく、童子切を構え、淡々と蒼司は語った。

「そんな封印されていただけの骨董品が、四天王おれらに通用するかよ!」
巨漢の青年が吼えつつ、駆ける。隆々とした肉体が躍動する。

「四天王、坂田剛さかた たけし! 行くぜ!」
豪腕から繰り出される重々しい一撃。蒼司は半身捻ってその重刃を避ける。

振り下ろされた鉞は地面にめり込む。地が震える。

並みの男が相手であるのならば、この瞬間に剣士の勝利は確定していたであろう。

深々と埋まった鉞を引き抜く前に、その刀で斬り捨ててしまえばいいだけだ。

しかし、その斬撃を放つことなく、蒼司は後方へとその身を逃がす。地面を抉りながら剛の鉞は追の一撃を放つ。土砂を撒き散らし、うねりを上げ、閃く。

「蒼！ どうした！？ 童子切を試すんじゃないのかよ！？」

まるで苦にすることなく、その重い得物を軽々と扱い剛は蒼司を追った。

「力任せの戦闘はいつか身を滅ぼす、そう言ったな？」

予想されていた剛の動き。蒼司は余裕を持って語りかける。

「ほざけよ！ そのナマクラで受けきれぬモンならなア！」

獣が咆哮を上げるように叫び、力任せに鉞を薙ぐ。

「……良からう」

ぽつりと呟くと、蒼司はその刀の鍔元にある飾り 木製の桃の

花をその手に拵んだ。

「蒼司！」

その動作を見た柁希が叫ぶ。

桃の木は呪術的には、聖なる木として知られる。

理想郷を指す言葉『桃源郷』や、中国の仙道で儀式に使われる『

桃剣』、さらには鬼退治の英雄譚『桃太郎』など、桃の神聖さから来る言葉や逸話は数多い。

その桃の木で浄化、封印するのに適した対象に刀剣類が挙げられる。

刀剣類がもたらす災いを『刀禍』と呼称するからだ。

そして、桃の花も『桃華』なのだ。

言霊ことだまという呪的思想がある。

言葉には霊的な力が宿り、その言自体が事を成すという考え方である。

万物の名称、呼称という言葉は個を縛るもつとも短い呪しゅであり、祝詞のりことなのだ。『とうか』という呪を、『とうか』という同音の祝詞で浄化する。

よって、桃の花にて、この『童子切安綱』という妖刀は封じられていたのである。

制止するような柃希の声を他所に、蒼司は躊躇することなく桃華を引き千切った。

童子切の刀身から、禍々しいまでの邪気が開放される。目覚める刀禍とは、果たして。

指定暴力団の組事務所。その入り口付近の路地の角に隠れ、そこを張り込む男が一人。

一眼レフの使い込まれたカメラを大事に抱え、その男は武者震いを抑えていた。

「危ない橋を渡るのも、これが最後だ……」
一人ごちる。

ジャーナリストを目指し、上京し早十年。男は夢と現実のギャップに苦しみながらも、どうにかカメラマンとして生計を立てる間際まで漕ぎ着けることが叶った。

お守り代わりに首から下げたロケットを開く。

かつては彼の両親の、その馴れ初めに大きな役割を果たした古ぼけた銀のロケット。その中には、愛らしいと男が思う女性の笑顔が閉じ込められていた。

「雅子……」

この仕事が成功すれば、大手雑誌社の専属カメラマンとしての道が開けるのだ。

それが現実のものとなれば、彼女に求婚することが出来る。

「良い夜だね」

不意に背後から少年の声がして、男は驚き、振り返った。

強い癖毛の黒尽くめの服装をした少年が、そこに一人。両手は後ろに組まれているのか、正面からは窺えない。

「な、何だよ……」

男は安堵の息を吐いた。

「何をしているのかな？」

屈託なく少年は語りかける。

「……お前には関係ないだろ？ 子どもはさっさと家に帰って、勉強でもしてろ」

建物の中にいる被写体に出て来られては困る。入ってかれこれ一時間余り。そろそろ会合も終わり、ターゲットは姿を現すはずである。人生のターニングポイントを男は迎えようとしているのだ。

それを邪魔されてはこれまでの苦労が水泡に帰す。男は早々と会話を打ち切るべく、あからさまに少年を邪険に扱った。

「関係あるんだよね……俺、アンタの様な蠅を払うのが仕事だから言葉とは裏腹に、少年は笑う。そして、背後にあった両手を体の側面に動かした。

その手にあるのは日本刀。

「ひい！」

男は小さく悲鳴を上げた。

「誰に殺されるのか、興味あるよね？」

変わらない表情で少年は告げる。

「俺、滝口、八卦衆の一人、って、あ！」

男はその台詞を最後まで待たずに、背を向けて逃げ出していた。

「……せつかく、決めようと思っただのに……」

その背中を見ながら少年はぼやき、刀身を引き抜く。

「……風よ、裂け……」

そして、続けて呟くと、その刀を袈裟に振った。

その刃に、風切り音と共に、鎌鼬かまいたちが生じる。

少年から一区画先にあった男の体が血飛沫を上げる。

断末魔の叫びはない。男は即死だったのである。

少年はゆっくりと男の亡骸に歩み寄った。

足元、血の池の広がるアスファルト。肩から斜めに切断され、二つに切り分けられた死体が、そこに転がる。

「……話を最後まで聞こうよ？ 俺、辰巳当麻」

しゃがみ込み、人間だった肉塊に黒衣の少年は名乗った。

久方ぶりの月夜。

もう一人の滝口の少年は、そのままの姿勢で、それを見上げる。

「さて……彼女は餌に食いついてくれるかな？」

目を細め、当麻はまた笑った。

深夜近い駅前の大通り、スクランブル交差点。そこに面したファッションビル。

営業自体は終了しているものの、その壁面に設置された大きな看板は煌々と照らされていた。看板を飾るのは、今が旬のカリスマモデル。

その下。

看板でポーズを決めるモデルに劣らない美貌とスタイルを持つ少女は、不意に自然界にありえない氣の流れを感じた。

「……木行の氣の流れ？」

少女が僅かに感じたその氣の流れは、彼女ら陰陽師が扱う秘術、五行のものに酷似していた。

「……まさか……辰巳？」

この街に存在する、世界の闇を知る者。相方の少年と、標的の蒼司は単に剣士である。五行の類は使えない。残るは彼女が知る唯一の不確定人物。

「……可能性、高いわね……」

瑞穂は呟いた。

万物の根源たる『太極』。

太極は『陰』と『陽』の二元を生ずる。

二元は、五行内の『土行』を除く、『水行』『金行』『木行』『火行』、即ち、太陰、少陰、少陽、太陽の四象を産み出す。

陰陽師が使う五行の秘術は、このそれぞれの分野に働きかけ変化を起こすものだ。

しかし、その四象は、さらに八つに細分化できるのである。

それが『八卦』と呼ばれるものなのだ。

「……辰巳は卦名で巽……方位は東南、対応する事象は『風』……」
風は五行では、木行が司る自然界の力である。それは彼女が感じた氣に、まさしく一致している。

「……私を誘ってるのかしら？」

そう言うと、瑞穂は時計を見た。

「……あのバカ……本当に死んでるんじゃないでしょうね……」
どう見ても、約束の時間はとうに過ぎている。

「……！ 木行の行使者が辰巳だとして、相手は誰よ?!」

今のところ瑞穂に考えることのできる対戦カードは二通り。辰巳対詩緒、もしくは蒼司である。

どちらにしても、当たり前、だ。

「世話の焼ける！」

瑞穂の中では、詩緒がその相手だと想定されたい。

言つや陰陽師の少女は、氣の流れ来た方向へと駆け出した。

「……遊撃の滝口として、役目を全うするだけのお前には、まだ感じられない変化かも知れんが……」

遊撃とは特定の守護地域を持たず、各地を転々としながら『魔』を狩ることを任務とする滝口のことである。

蒼司は証希の愛刀を使うように詩緒に言つと、その言葉を続けた。
「平井万葉という女は、滝口という組織を私物化しようとしている」
平井万葉。この源蒼司が棟梁であったとき、四天王の一角を担った人物。そして、現棟梁の女性滝口。

「戯言を」

詩緒は無表情に呟いた。

「……信じる、信じないはお前が好きに判断すればいいだけ……しかし、私は滝口を敵とは認識していない。だからこそ、事実を語っている」

そう言つと、蒼司は詩緒の刀と切り結ばれていた童子切から力を抜き、その刀身を鞘へと納めた。

「……俺から見ればお前は敵だ」

自らに背を向けた蒼司に詩緒は、そう放ちながらも斬りかかりはしない。

「……だろうな。しかし、お前はまだ私の敵ではない」

「らしいな。だが、いずれお前を脅かす敵になる」

「……その時は、降りかかる火の粉を払わせてもらおう」
顔だけで背後を振り返り、蒼司は薄く笑った。

「……そのためにも柎希の刀を持って、詩緒。力量を見れば、お前は十分に鬼切あれを帯刀する権利はある。それに、平井に悪用されれば柎希も浮かばれまい」

四天王の扱う武器は世襲制ではない。その時代、その時代の優れた滝口たちが継承していくものである。

通例として、後継者が見つかるまでは、形見として遺族が保管している。詩緒の手元にあるのだ。

その言葉をかけると、蒼司は再び顔を正面に向けた。

「……なにより、私を止めるには必要な力だ」

そして、『魔』である青年はぼつりと呟いた。

詩緒は独り、蒼司と刀を交えた境内に残っていた。敵として戦った青年画家の姿はすでない。

彼の人物が座っていた、円柱状の石の椅子に腰を下ろし、滝口の少年は時間の経過を忘れて思索していた。

左手首にある小さな銀色の鈴を、ただ眺め続けながら。

柎希はこれを『笑顔のカタチ』と言った。

それは詩緒にとって、兄の形見であり、決意の凝り固まったものであり、人としての絆を紡ぐものである。

夜風が優しく、その鈴を鳴らした。

まるで少年に何かを語りかけるように、微かに奏でる。

風が走り去った。

静寂が辺りを包む。

「……解った」

詩緒は小さく呟いた。

そして、鈴の剣士は立ち上がると、その場に背を向けた。

第六話：八卦衆

路地をいくつか過ぎれば、ありふれた夜の街があるはずだ。

その証拠に、ここにもその喧騒は届いている。

しかし、この場所にあるのは非日常の景色。

不可視の刃によって一撃で斬殺された男の血の匂いが、ここには立ち込める。

その刃を生んだ少年は、殺害した男の骸むくろの横で空を見上げた。

「さて……彼女は餌に食いついてくれるかな？」

数夜ぶりに姿を見せた月を見て、少年　辰巳当麻は笑い、呟く。

その背後に、近寄る足音が一つ。

「ずいぶんと派手にされたようですね……無駄に」

少年に近づいた者、声をかけたのは眼鏡をかけた少女であった。

街灯に照らされ、その髪の赤が映える。

少女は転がる男の死体には何の反応も示さずにいた。ただ、しゃがみ込んだ当麻に声をかけただけである。

「……無駄に、とか一言多いよ、麗華れいかは……」

少女もまた、八卦衆の一員なのだ。

「……それに、無駄、じゃないよ」

当麻は立ち上がると、少女の言葉を否定した。

「……ただかだか一般の人間を一人殺すのに、八卦の力を行使した事のどこが無駄ではないと？　ぜひ説明して頂きたいものですね」

麗華は眼鏡のフレームを親指と人差し指で挟んだ。そして、その位置を修正しながら、淡々と事務的な口調で訊ねる。

「……あの風は招待状なんだよ」

当麻はそう言つと、含みを持たせ、微笑んだ。

「……招待状、ですか？」

その笑みを見て、訝しげに麗華は反芻する。

「そ。招待状……そうだ。麗華にも手伝って欲しいんだけど。いい

かな？」

「手伝い？ 何の事かは理解しかねますが……それにはまず、平井様に許可を頂いて頂かないと」

少女は告げた。この少女は通常、いつもこんな堅苦しい口調である。

当麻は大きく溜息を吐いた。

「ほんと、今の君の相手は疲れるよ……」

軽く頭を振りながら、小さく愚痴を零す。

「棟梁、まだ中なの？」

しかし、間を置かずには黒衣の少年は気を取り直すと、親指でその建物を指して赤髪の少女に聞いた。

「はい」

「それじゃ、聞いてくるよ」

極めて端的に返答する麗華に当麻は返すと、先ほど自分が殺したカメラマンが見張っていた、その建物の入り口へと足を進めた。

「あ。そうだ。麗華、死体始末それとして欲しいんだけど」

赤髪の少女とすれ違い、数歩進んだところで振り返ると、当麻は思い出したように口を開く。

「……その為に私はここに来たのです」

麗華はさも当然のように答えた。

活気に溢れる場所ほど、暗く静まり返った時の不気味さは強いものだ。

それは多くの人間が存在する日常に対して、その場所がその時に強く非現実さを演出してしまうからだろう。

今、少女が閉鎖された正門を越え、立ち入った場所もその一例だ。学校、である。

昼間は若い学生たちの生气に溢れる場所。しかし、夜は無人の闇を多く含んだ空間。

ほとんどの学校に『怪談』と呼ばれる類の話が伝わるのは、こうした『暗く静まり返ったときの不気味さ』が、『非現実』の世界を産み出すからではないだろうか。

もっとも、その場に存在する彼女こそ、その世界の住人に他ならない。少女は魔道と称される力の行使者、陰陽師と呼ばれる退魔術者なのだ。

夜の校庭には、人影が一つあった。

その人物こそが、彼女をこの場所へと誘った者である。

強い癖を持った黒髪、黒一色の服装に身を纏った少年。

彼は木行の氣を発生させては、移動を繰り返し、彼女をここへと誘導したのだ。

「あちこちに移動したみたいだけど……何か意図があつてのことかしら？」

彼女を誘った人物に、少女は警戒しながらも近づき、訊ねた。

「いや、ここらの地理には疎くてね。……邪魔者が入らない場所を探しながら移動したんだよ」

校舎に設置された時計は、すでに日付が変わったことを伝えている。少女が最初に木行の氣を感じた場所から、どれほど移動しただろうか。

「……ここら辺の人間じゃない、ってことね」

少女は適当な距離を作るように立ち止まると、ジャケットの内ポケットから数枚の紙片を取り出した。

その紙片は『呪符』とよばれる魔術道具である。

呪符には『急急如律令』の呪文と共に、陰陽道の秘術が籠められているのだ。後はキーとなる言葉と僅かな魔力で、その籠められた力を発動できる。

「お互い様にね。賀茂瑞穂さん」

少女の名前を言いながら、そう返す少年の手には刀が握られている

た。

「で？ 邪魔者が入らない場所で何の用かしら？ 辰巳当麻くん」
彼女なりの臨戦態勢を取ると、瑞穂は当麻に再び訊ねる。

「誤解しないで欲しいな……俺はね、話をしたかったんだよ。君と」
慌てる素振りを見せず、当麻は笑った。

「話？」

「そう。話、さ。頼み事……っていった方がいいのかな？」

そう語る当麻に対し、瑞穂はしかし、緊張は解かずじっといた。それを彼女の直感が許さないのだ。

だが、当麻はそれに構わず言葉を続ける。

「俺、滝口なんだよ。……滝口、八卦衆の一人。辰巳当麻」

「滝口？」

瑞穂の顔にありありと疑問が窺える。

まず、彼女は知らないのだ。『八卦衆』という組織の存在を。

滝口と陰陽師は、この国を協力しながら『魔』から守ってきた存在である。滝口のことと彼女が知らぬことなどなかったはずである。

「八卦衆なんて集団、私は知らないわよ？」

彼女の疑問は言葉に変わっていた。

「だろうね。発足したばかりの組織だから。八卦衆は、棟梁である

平井万葉が集めた、棟梁直属の部隊だよ」

当麻は笑顔を絶やさずに、瑞穂の疑問に答える。

「八卦、ね……」

「そう。君なら解るだろ？ 僕らは八卦の力が使える。滝口でありながら五行の力の一部が使える、言うなればエリートさ」

瑞穂が感じた疑問がもう一つ、そこにあった。

確かに五行の力を使える滝口がいたところで、不思議ではない。才能があつて修練を積みさえすれば、そういう滝口も存在し得るだろう。

そして、そういう人材が集められて部隊を結成する。これもあり得ない話ではない。そういう才能を持った人間を集められる可能性

の問題は、度外視しての話ではあるのだが。

しかし、滝口なのだ。

滝口は『魔』を狩る武士もののふである。

先ほど、この少年が『木行の氣』を発した時に、『魔』の気配を瑞穂は感じていないのだ。

彼女たちは『魔』の気配を感知することが出来る。ではあの時、彼は何に対してその力を行使したのだろうか。

「……アンタ、さつき木行……おそらくは風の力を行使したわよね？ 何に使ったのよ？」

自身を誘うための空行使から。その可能性もある。だが、瑞穂は、その行使対象を自分の知る少年であると推測していた。

「……いやだな。『魔』に決まってるじゃないか」
当たり前だろ、と当麻の表情も語っていた。

「……でも『魔』って何だろうね？ 君の定義する『魔』と、俺の定義する『魔』。……果たして同一のものなのかな？」

一変、黒衣の少年は冷酷な笑みを浮かべる。

「本題に入るよ？ ……君に僕らの仲間になってもらいたいんだ」
冷淡な口調。むしろこの表情、この口調の方が、この少年にしっくりすると、瑞穂は思う。

「お断りよ」

だから、彼女は笑顔で即答した。

「……どうして？ 陰陽師は滝口と協力しあうモンでしょ？」

言いながら、当麻はその手にある刀を抜く。

「信用できない相手とは、協力できないものでしょ？ ……アンタ、腹黒そうだし。そういう意味じゃ、あの優男の方が安全でしょうね」
瑞穂は呪符をいつでも放てる様に構え直した。

「……残念だな……」

そう零しながらも、少しも交渉の決裂を遺憾に感じさせる素振り
は少年にはない。

「……あ。そうだ。俺の『魔』の定義なんだけどさ。『邪魔者』っ

て意味なんだよね……」

そして、淡々と言葉を紡ぐ。

「賀茂さん。君、俺の『魔』だよ」

言葉を終わると共に、生じた殺気。直後、当麻は動いた。

黒衣の少年は駆ける。一足で少女との距離を詰める。瑞穂は冷静に動きを察し、その身を逃がした。

僅かな遅れで、滝口の少年の刃は陰陽師の少女がいた空間を走る。

「上等よ！ 私にとってもアンタは『魔』だわ！」

瑞穂は宣言しながら呪符を一つ、地面に落とした。

「発！」

発動のキーとなる言葉を発する。

その札が、着地するか否かの地点で爆ぜた。

グラウンドが突如として隆起し、土壁が生じる。それは土行の秘術の封じられた呪符であったのだ。

それをスクリーンに使い、瑞穂は次の一手を放っていた。

「舞え！ 隼よ！」

上空に投げた呪符に言葉と共に、魔力を送る。

宙に舞う紙片は、その魔力を受けて、一羽の隼へと変じた。それが賀茂瑞穂という陰陽師の式神である。

生まれ出た猛禽は、瑞穂の意思を忠実に反映する勇ましい兵士。

式神である隼は、上空から真っ直ぐと敵に向かい降下する。

「白兵戦もこなすのかい？ 君、噂以上だよ！」

当麻は笑いながら、襲来した隼の鋭い爪をかわした。

「言ってなさいな！」

その間も、瑞穂の動きは止まらない。すでに追の一手へと動いているのだ。

彼女は幼少の頃から、陰陽師として修練を積んでいた。その実戦訓練の相手は、これしきの連続攻撃では止められないのだ。少なくとも後二、三手繰り出さないと、隙さえ生じさせることが出来ない。遮蔽物となっっている、彼女の生み出した壁。その左に向け、呪符

を放つ。

その札には火行の力が封じられていた。この札で爆風を起こし、敵の行動を限定する。

後は敵の少ない選択肢に備え、攻撃力の高い五行秘術カウンターマジックを迎撃魔術として直接行使して仕留めるだけだ。

瑞穂の頭の中で、戦闘のシナリオは完結していた。

「爆！」

魔力を籠めながら、起動の言葉を陰陽師は呟く。

爆風が発生する。

「何！？」

次の瞬間、瑞穂は予想しなかった敵の行動に驚愕していた。当麻は爆風を物ともせず、巻き上がる炎の中から現れる。

「……違う！？」

爆風は生じながらも、その力が封殺されていたのだ。

当麻の背後にもう一つの人影。

スクリーンプレイを、相手も同様に実行していたのである。

「くだらない攻撃だねえ！」

凶相の少女が、当麻の背後から跳躍した。

赤い髪を燃え動く炎のように振り乱し、その手の刀を振り翳すかざ。

「八卦衆、南麗華みなみれいか！ アンタを消し炭にしてやるよ！」

少女は甲高い声を響かせる。その刀身には炎が生み出されていた。

彼女は火を司る八卦の剣士。その卦名は離リ、対応する方角は南。

麗華が瑞穂の発動させた火行の力を無力化させたのだ。

火の粉を撒き散らしながら、赤髪の少女の炎の刃は振り下ろされる。

「くっ！？」

呻き、瑞穂は地を蹴った。

「しまっ！？」

直後、後悔が口から漏れる。突然に襲撃して来た、麗華の炎の刃を避けることだけに一杯であった瑞穂には、彼の動きを考慮するこ

とが出来なかつたのである。

目の前。陰陽師の少女に迫る黒衣の滝口。風を司る八卦の剣士。

「……強すぎる力を持つ者は、危険なんだよね」

殺気をありありと放ちながら、当麻は刃を閃かせる。

「さよなら。賀茂さん」

風の力を乗せた刃は、強烈な太刀風を作り出す。

風が悲鳴を上げた。

瑞穂を斬り裂くべく放たれた一撃は、その風によっても、そして刀身によっても彼女を傷つけることはなかった。

「……詩緒？」

当麻の前に立ちはだかり、その凶刃を防いだ男の背中が、瑞穂の眼前にあつたのだ。

「……悪いが……柁希の弟ではないな」

背を向けたまま、その男は言った。長い黒髪が腰の辺りまで伸びている。和服姿の剣士がそこに立つ。

「……貴方……」

信じ難い人物の登場に、瑞穂はそれ以上の言葉を失った。

「お前、誰だよ！？　なんで風が『斬れる』んだよ！？」

風という無形のもので出来た刃を斬ることで無力化させた男。当麻は鏢迫り合いをしている、その相手を睨んだ。力の限り当麻は刀を押しのだが、男は涼しげな目でそれを悠々と御する。

「知りたくば、貴様の命で教えてやろう」

男は薄っすらと笑みを浮かべた。

直後、禍々しいまでの邪気が生じる。

「ひいっ！？」

当麻は恐れ慄き、身を逃がすように距離を作った。

彼よりも感知能力の優れた瑞穂は、その邪気に当てられ、一瞬、身動きを封じられていたことを知った。

「……知りたいのではなかったか？」

余裕の表情で男は、逃げるように離れた少年に訊ねた。

そこには僅かな邪気も存在しない。

「……妖刀アレを使いこなしてる、って言うの……」

陰陽師の少女は呟いた。金縛りを起こさせるような強烈な邪気を生んだのは、男の持つ刀なのだ。

「……まさか童子切だっつてのかい!？」

それに気付いた人物は、もう一人いた。赤髪の滝口である。

八卦衆の二人に向かい、男はゆっくりと歩み寄る。

「お前たちは私の『魔』のようだな……」

童子切安綱。その刀を振るう剣士、源蒼司。

その流浪の魔剣士は標的を見据え、呟いた。

第六話：八卦衆（後書き）

＜用語解説＞

急急如律令きんきんりつれいじょう：「急ぎ、律令の如くすべし」の意。陰陽道で常用されるの呪文の一句。

式神しきがみ：陰陽師の使役する鬼神。作中、瑞穂が使役しているものも、外見は『隼』ではあるものの霊鳥の一種です。

第七話：童子切（弑）

「……っ!？」

蒼司は呻く。

桃華を引き千切り、解放させた刀禍。その災いの声を彼は聞いた。地獄の底から届いてくるような、憎悪の言葉。呪詛の言葉。直接、頭に響く狂いの声。

「ぐっ!？」

蒼司はその声に心を乱し、侵され、苦痛に身悶えた。

「蒼司!？」

「蒼!」

二人の親しい滝口が、それぞれ封印を破った少年を呼ぶ。

これまで幾多の『魔』と死闘を繰り広げてきた彼らでさえも、出会ったことのない強大で、凶悪な邪気をその刀身から童子切は産み続ける。

あり得ないまでのその禍々しい邪気は、終には可視するまでに至った。それは彼らの常識においても、非常識な出来事である。

どす黒い霧と化したそれは、蒼司の姿を隠すかのように立ち込める。

それは闇の意思そのものだった。それは童子切に討ち滅ぼされた鬼の王の怨念なのだ。

「う……ぐうっ!？」

すでに四天王の二人からは見えなくなった暗闇の中で、蒼司はその思念に喰われようとしていた。

「蒼!」

彼の命を奪うべく巨大な鉞を振り回していた剛は、しかし、その手から獲物を捨てて、闇へと跳躍する。

「剛!」

その動きを制止すべく、柺希は声を張り上げる。同時に駆け出そ

うとしたのだが、それは叶わなかった。

足元のバランス感覚を失い、体勢を崩したのだ。

一瞬、制御を失った体をどうにか立て直し、柁希は踏み止まる。彼には見えていた。

刹那、闇に瞬く光が。

その光は生を奪うべく構えられた刃が、放った冷たい輝き。

次の瞬間に、闇は収縮し、生まれ出でた童子切安綱という妖刀に還る。

妖刀は空を裂き、閃く。

闇を呑み込みつつ、命をも呑み込む。

立ち込めていた黒い霧は完全に消え、それがあつた空間に残るは二人の『元滝口』。

一人は血の滴る妖刀を携え、表情のない顔にある双眸が虚ろに虚空を映す。

一人はその体を深々と袈裟に裂かれ、その命を終える間際であった。

「剛！」

駆けつけた柁希は、崩れ行く巨漢の青年の体を支え叫んだ。

「そ……う……」

肩から脇腹にかけ無残な裂傷を負いながら、柁希に支えられた剛は、それでも尚、蒼司へと手を差し述べる。

消え入るような声に、しかし、虚空を眺めていた瞳が反応し、ぎろり、と剛と柁希を映す。

にたり。

二人の人間を感知した蒼司の姿をしたそれは、不気味に嗤った。そして、その手の童子切を構える。ゆっくりと振り上げる。

「蒼司！ 止めるんだ！」

「アヒヤヒヤヒヤハッツ！」

その動きに気付いた柁希の絶叫を、狂った笑い声でそれは掻き消す。

直前に控える死。

「……お、前の……意、思で……行……」

だが、僅かに唇を動かし、そこから微かな声を漏らすと、剛は笑った。

凶刃は、無常にも振り下ろされた。

剛の頭と胸が切り離される。

ごろり。と、微笑んだままの剛の生首が柁希の前に転がる。

「剛……」

柁希はただ呆然と、零した。

返り血を受け、赤い斑を顔に描いた妖刀を手にした者は、うち震えていた。

「……剛……」

そして、己が殺めた友人の名を呟く。

虚だった瞳に色が戻っている。

散り行く友の声は、散った友の想いは、闇に喰われたはずの彼の心に再び光を戻していた。

蒼司は童子切をゆつくりと構えた。

「……平井の手の者が、陰陽師を手にかげようとする、か」
自分の『魔』だと判別した二人の滝口に、青年は呟く。

まるで無人の野を行くかのように、悠々と童子切の剣士は歩を進める。

気圧されて、八卦衆の二人はじりじりと後退していく。

「逃げるのか？ それは最良の策かも知れんが……」

蒼司は嘲る。

その言葉に反応して、当麻の眉がぴくりと動いた。

「なめるなよ！」

当麻は自らを奮い立たせるかの如く吼えたと、刀を振るい、風を走らせる。

唸りを上げ、生じた真空の刃は蒼司を襲う。

青年はその不可視の刃を感覚だけで見切り、回避した。

「当麻！ 気をつけな！ コイツ、手強いぞ！」

麗華は叫ぶ。手にした刀の刀身に炎を生み出し袈裟に薙ぐ。

火炎放射機の噴射口から噴出される炎のように。刀の軌道に沿って、彼女の切っ先から蒼司へとそれは流れる。

「コイツ、何者なんだよ!？」

疑問を怒鳴りながらも、当麻はその火炎流と共に敵に躍り掛かっていた。

立て続けに刀を走らせ、幾つもの鎌鼬を敵に見舞う。

「避けきれないだろ！ 死ねよ！」

当麻は風の刃に続き、止めを刺すべく自らも斬りかかる。

侮蔑するように、蒼司は薄く晒った。再び発生する強烈な邪気。

その邪気に、炎は、風は無力化される。掻き消される。

「何!？」

駆け込んだ当麻を迎えた闇の気配。さらに迎撃に動くは妖刀、童子切安綱。

「くそっ！」

蒼司のその一撃は神速の一手。当麻はそれに対応出来ずにいた。少年に死を覚悟する暇も与えない。

耳を劈く金属音が響いた。

二つに折られた刀が、宙を舞う。
折れたのは少女の刀。当麻の後方から連携に動いていた麗華のも
のだった。

炎を司る八卦衆の剣士は、その刀で童子切の太刀行きを逸らし、
風を司る剣士の命を撃いだのだ。

「ほう」

感心したように蒼司は呟く。

「この距離なら無力化できねえだろ？」

敵を見据えながら、彼女は勝ち誇った様に口を歪めた。

「炎よ！ 敵を焼き尽くせ！」

折れた刀を構えたまま、麗華は言葉と共に、魔力をそれに籠める。
空气中に存在している火気が、赤く熱を帯び、刀身に収束する。

直後、それを中心として爆風が発生した。

「水行を以って火行を剋す！ 散！」

火行の力が爆ぜた瞬間に、後方に待機していた陰陽師の秘術は完
成する。

力あるその言葉に、炎の力は殺がれ、消滅した。

「ちくつツ！」

麗華は呻き、瑞穂を睨んだ。

陰陽道。その五行の力は相生と相剋により深く影響し合う。

木生火、火生土、土生金、金生水、水生木。（もくしょうか、か
しょうど、どしょうごん、ごんしょうすい、すいしょうもく）

木は火を生み、火は土を生む。土は金を生み、金は水を生む。そ
して、水は木を生む。五行相生とは、自然はめぐり生まれるという
循環の理。

木剋土、土剋水、水剋火、火剋金、金剋木。（もつこくど、どこ

くすい、すいこくか、かこくごん、ごんこくもく)

木は土から養分を吸い取り、土は水の流れを止め、水は火を消し、火は金を溶かし、金は木を切る。五行相剋とは、自然の闘争関係の理。

陰陽師の少女はその相剋の法則に則り、大気の水行の力に働きかけ、火を司る少女の一撃を封じたのだ。

さらに瑞穂の行動は、それだけでは終わっていなかった。

続けざまに、次に行使する五行の秘術の詠唱を開始していたのだ。

「木行、雷気を以って敵を撃つ！ 電撃よ、走れ！」

彼女の指先。その指し示す方向に、大気の電気は収束され閃く。

瑞穂を睨んだ麗華の凶相が、驚愕に変わる。

「つぐうつ！」

回避運動を許さずに、魔力で強制的に生じた放電現象は彼女を撃った。

激しい衝撃に、麗華の意識が飛ぶ。その身を揺らめかせ、炎を司る八卦衆の剣士は地面へと倒れ行く。

敵の攻撃に負傷した味方。

当麻はそれすら利用し、敵を討つべく動いていた。

少女の体を影に、体勢を整える。

赤髪の少女の体が地面に横たわると、それを飛び越えつつ、和服姿の青年に鋭い突きを放つ。

しかし、蒼司はそれを察知していた。

当麻の虚を突いたはずの一撃を難なく避けると同時に、剣光を閃かせる。

「ぐつっ！」

当麻の口から苦痛が漏れた。その手から刀が地面に落ちると、乾いた音が響く。

少年の右手首は斬られ、そこから血が流れ落ちていた。

「状況を利用した攻撃は褒めよう。……しかし、相手が悪かったな」
童子切の切っ先を当麻の喉元に突きつけると、蒼司は静かに評した。

「……まだ続けるか？」

そして、続けて言い放つ。しかし、それは無力化された二人の剣士に向けられた言葉ではない。

その視線は、彼ら後方へと向けられていた。

「いや。辞めておこう」

青年の視線の先。そこに居た人物がその問いに答える。

剣戟けんげきが、一応の終焉を迎えた深夜の校庭。

「……久しいな、蒼司……」

その夜闇の中を、こちらに向かい歩いてくる無数の人影。

「……七人？ ……面倒いことにならなきゃいいけど……」

瑞穂は残った呪符を準備しながら、その頭数を確認する。

その中央に立つ声を発した妖艶な美女は、艶やかに赤く塗られた唇に薄っすらと笑みを浮かべた。

「……平井万葉……」

月が照らしたその女性の顔を確認すると、瑞穂は彼女の名前を口にしていった。

驚きを隠せずに、呆然とする。

その美女こそが現滝口棟梁、平井万葉なのだ。

万葉は瑞穂と目が合うと、徐おもむきに口を開いた。

「お前が賀茂瑞穂か？ 部下が悪いことをしたな……」

その態度に、口調に、頂点に立つ者の風格を感じさせる。

「え？ ……ええ」

瑞穂は状況が把握出来ずにいた。

当麻は確かに自分を滝口と言った。しかし、陰陽師である自分と敵対行動を取るなど、本当に滝口であったのならありえないことだ。

だから、瑞穂はその言葉を虚偽だと判断していた。だから、彼らを『魔』だと認識して迎撃した。

だが、その棟梁である女性は確かに滝口であると証明したのだ。
「……この者たちが、誤った認識でそちらを『魔』だと誤解したよ
うだ……」

戸惑う彼女を他所に、万葉は憂いを帯た表情で言葉を続ける。

「部下に代わり、お詫びしよう。すまぬ」

そして、潔く謝罪の言葉を口にした。

「え？ ……ええ」

呟くも、理解出来ない。

『誤った認識』とは？ 盟友であるはずの陰陽師を『魔』だと認
識した理由とは？ 自分を『邪魔者』だと排除しようとした八卦衆
の目的とは？

瑞穂の脳裏に浮かぶ様々な疑問。しかし、明確な答えを見つけれ
ない。

言葉を失う。

「……どうい風風の吹き回しだ？」

状況を静観していた蒼司が口を挟んだ。

「……ずいぶん言い草だな、蒼司。……部下の尻拭いをする
のが、そんなに珍しい事か？」

万葉は瑞穂から蒼司へと向き直った。

「……しかし、達者そうだなによりだ」

源蒼司は『魔』。それも滝口が封印してきた妖刀を奪った者。そ
して平井万葉は『魔』を狩る『滝口』。それもその頂点にある者。

敵対関係は明白でありながら、万葉にその意思を感じることは出
来ない。

「くだらぬ前置きはいい。お前は何をしに来たのだ？」

童子切を納めることなく、その担い手は冷たい視線を彼女に遣る。

「お前を迎えに来た……と、でも言わせたいか？」

その言葉は本意か、戯言か。

「……尤も、この様な言葉をかけたところで、お前が戻るなどは
露ほども思わぬが……」

言葉を続けると、万葉は嘲笑した。

「」明察だ」

短く返答を告げると、蒼司は童子切をやや引き気味に構え直す。その動作に万葉を取り巻く人間が殺気立つ。一斉に刀を引き抜く。瑞穂も身構えた。敵の頭数は七人。万葉を除外すれば六人。それに当麻と麗華の二人を合わせれば、八人である。

陰陽師の少女は、おそらくは彼らが八卦衆の残りの構成員だと判断していた。

万葉は謝罪したが、八卦衆は間違いなく自分の命を狙った存在だ。万葉の預かり知らぬところで、違う思惑を孕んでいるのかも知れない。彼らを味方だと確定するには不安要素の方が大きかった。

否、瑞穂は万葉にも警戒している。これは勘に過ぎないのだが。今、この場で信用できるのが、『魔』であるはずの青年だけとは皮肉なものだと瑞穂は思う。

不穏な空気が辺りを支配する。

しかし、万葉は帯刀するその刀、獅子王を抜きはしなかった。

「抜かんのか？」

蒼司が口を開く。

「……義理、だ。ここにお前が現れなければ、取り返しの付かない事態に陥ったやも知れん。その礼だ。今日のところは見逃そう……退け、蒼司」

配下の滝口、八卦衆と思われる者達を諫めるように冷静に万葉は言った。

「……良かるう」

反論することなく、蒼司は童子切を納刀する。

「……ただし、次はないと思え。お前は『魔』、なのだから……」
その納刀の動作を眺めながら腕を組むと、滝口の棟梁は魔剣士へ
と言い放った。

「貴様もな……彼女に感謝するんだな。この場を収める名目を作ってくれたのだから……」

「……相変わらず、大した自信家だな。蒼司……」
現棟梁と元棟梁。鋭い視線が交差する。二人は互いを嘲笑うように口を歪めた。

蒼司は踵を返す。

「……瑞穂。私に用があるのだろうか？」

そして、そこに控えていた少女に優しく語りかける。

この男は寝首を掻くような男ではない。それにこの男は自分の身を考慮して、この場を退いたのだ。

それを理解していたから、瑞穂は頷くと、彼に続いてその場を後にした。

第八話：告白

「アレが八卦衆おれたちの一番の障害となる存在……源蒼司……」
去り行く自分に手傷を負わせた敵の背中を睨み付けながら、当麻は独りごつ。

その横に一人の女性が立つと、無言で負傷した腕を差し出すように少年を促した。

「……悪い」

呟くと、風を司る剣士はその右腕を女性に預ける。

「……棟梁……何故、逃がしたんです？ 源蒼司、賀茂瑞穂と二人の邪魔者を消す、絶好の機会だったと思うんですが……」

負傷した傷口の治療を受けながら、当麻は不満を露にしていた。

「……今はその時ではないのさ……」

妖しく笑い、万葉は答える。

「……賀茂瑞穂は『陰陽寮おんみょうじょう』の切札だ……アレをここで消せば、安倍は黙ってはいまい。アレは、既に私に不信感を抱いている……最近、滝口という組織でなく、一人の遊撃にのみ手引きをしている様だしな……」

陰陽寮とは、陰陽師たちがかつて所属していた政府機関の名前である。設立は天武天皇てんむが治世四年目、西暦六七六年に行なったと言われ、歴史は滝口に比べて古い。明治初頭に廃止された中務省なかつかきしょうの一つであるが、実際は未だ、その名は存在していた。

その役目は過去のものと、なんら変化はない。

そこに属する陰陽師は、天文、暦数を始めとした占術により、天変地異や様々な事件、事象の予兆を読み取るのだ。予測された天変地異や事件は、必要に応じて、政府へと対策を講じるように働きかける。そして、人の世ならざる力にて、災いをもたらす存在『魔』の気配を察知すると退魔術師の派遣、もしくは滝口に通達、討伐を依頼するのである。

賀茂瑞穂という少女は、その陰陽寮に属する退魔陰陽師の一人なのだ。

「……いくら力があるっていつても、安倍（あの女）は籠の中の鳥でしょ！？ 何を躊躇するんですか！？ 対して数もない陰陽師なんて、陰陽寮ごと消せばいいじゃないですか！？」

苛立ちをそのまま変換し、当麻は不平を口にしていた。

「……私に指図するか？ 辰巳」

静かな物言いだ、冷たく殺気を孕ませた視線を遣りながら、万葉は風を司る剣士を蔑む。

「……いいえ」

当麻は脅えを瞳に浮かべ、それ以上は口を嗣ぐんだ。

「……しかし、蒼司が現れたとなると、あの男との関係も潮時だな……」

さして考える素振りなく、淡々と。万葉は、不要なものは切り捨てるべきだな、と言わんばかりに呟いた。

「……十分に資金の調達は出来たかと……すでに、あの男は利用価値が希薄と思われま……」

そこには眼鏡をかけた麗華が立っていた。彼女は眼鏡のブリッジを中指で動かし、その位置を調節しながら財政報告をしつつ、意見を述べる。

それが普段の彼女の人格であった。

彼女は二つの人格を持っている。眼鏡をかけた彼女は理知的で有能な秘書として、常に万葉の傍らで働き、眼鏡を外した彼女は気性の荒い勇敢な、炎を行使し敵を焼き尽くす剣士なのだ。

麗華の言葉に、ふむ、と万葉は満足げに頷く。

そのやり取りを静観しながら、戦慄していた当麻の顔を、治療に当たっていた八卦、天を司る女性は窺った。

少年は怒りに震えていた。下唇からは血が滲む。

それは力及ばなかった自らを激しく責めているのか。それとも、彼らを統べる万葉の前で、醜態を晒す事態を招いた男に対する復讐

の感情から来るものなのか。

そんな当麻に、しかし、天の剣士は無表情のまま、何も聞きはしない。

梅雨空に久しく浮かぶ月は、その一団を妖しく照らしていた。

琴音の姿は公園にあった。

高校総体の予選を兼ねた大会の翌日でありながら、普段と変わらぬ練習を行なった後のことである。

大会明けのために、基本的に部活動は休日に設定されていた。だから、放課後の武道場には、彼女以外の部員の姿はなかった。

しかし、琴音にとって修練は生活の一部となっていることである。むしろ、これを行なわないほうが、体調を崩しそうださえ彼女は思っている。

幸い、琴音一人でも練習には差し障りはない。元々、彼女のトレーニングプログラムは、彼女専用のものなのだ。琴音以外の部員たちは、その内容のハードさにそれに付いて行くことが出来ないのである。

瑞穂は琴音のことを、幼い頃から英才教育を受けて来た人間と評したが、それは嘘ではない。

彼女の語った加納一二三なる範士が師ではないのだが、確かに琴音は幼い頃から厳しい指導を受け、修行を続けて来たのだ。

一人、黙々と汗を流し、日課をこなし終わると、琴音はシャワーを浴びる。そして、急ぎこの場所へと向かうため、学校を後にした。携帯のメールで呼び出されていたのである。

朝から曇り始めた空には厚い灰色の雲が広がっていた。

陽を遮られていることもあり、辺りはすでに夜を迎えている。

都心部からこの街に延びた私鉄路線。延長工事が完了したのは、
琴音が産まれるほんの少し前のことである。

彼女の歩んできた人生は、この街の発展の歴史でもあった。

自然と都市の融合。それをスローガンに都市開発を推進し、発展
してきたこの街。

琴音のいるこの公園は、その象徴であった。

発展の中心地となった駅前に在りながら、広大な敷地に緑が栄え
る。

憩いの場としても、人気のあるスポットだった。

園内で遊ぶ親子連れや、ひとときの休息を取る近隣のオフィス街
のサラリーマン、ウォーキングやジョギング、サイクリングに利用
する者。様々な目的でここを利用する人を、あちらこちらで見かけ
ることが出来る。

もつとも、この時間のこの辺りとなると人影は疎らであった。

西の端から東の端に突き抜けた、公園のメインストリートは通勤
通学にも利用されていて人通りも多いが、琴音の歩くこの道の先には
大きな池に面した小ぢんまりとした広場しかない。

桜の季節には一番に人気のある場所なのだが、疾うに時期は過ぎ
ている。

その畔の広場には大きな桜の老木があるのだ。江戸彼岸の一種で
あり、神代桜よりも見事だと称える者も存在するほどの桜である。

その桜の老木の下で、告白をして結ばれた者は幸福になる。そう
いう伝説が何時かあるのだが、琴音は知りしなかった。

そこに彼女を呼び出した人物は、それを踏まえてロマンチックな
演出をしたつもりだったのだろうか、お生憎様だったわけである。

「待ってたよ、琴音」

琴音が広場に到着するや、その話題の樹の下で声をかける少年が
一人。

河原潤一であった。

「河原くん……」

彼の姿を確認するや、琴音の顔に申し訳なさそうな表情が浮かんだ。

待たせてしまったことを憂いているわけではない。琴音は、この場所に呼び出された理由を理解しているのだ。

潤一は愛の告白をしようとしているのだと。

だから、である。琴音は潤一の告白を断ることが申し訳なかったのだ。端から彼女は、彼の想いを受け入れる気持ちを微塵も持ち合わせていないのだから。

琴音が潤一から告白されたことは、一度や二度ではなかった。

しかし、それでもその告白に再び付き合う辺りが、それでも断ることを申し訳なく思う辺りが、彼女の性格かも知れない。

もともと、そんな琴音の性格を理解した上で、潤一は彼女をここに呼び出していたのだ。

この場所をチョイスしたことは、彼の言った『白馬の王子様』作戦の一環でもあった。

ここならば、邪魔は入らないと予測しているのだ。例え、いつも通りに琴音が潤一の告白を拒絶しても、その後に登場する『化け物』を他人に見られる心配はないはずだと。

「……この樹に伝わる伝説を知っているよね？」

ムードを意識して、潤一は琴音の瞳を真っ直ぐと見つめると甘く呟いた。

「え？ ……ごめんなさい。知らないの……」

上目使いで、ぼつりと琴音が返す。

「え？」

呆気に取られ、潤一は固まった。伝説といったところで、それは一部の若者に伝わる都市伝説に過ぎない。流行ズレしている、とは言えるかもしれないが異常なことではない。事実、それに纏わる伝説は、古くからここらに伝わって来ているわけではないのだ。

「ここの樹の下で結ばれた二人は、永遠に幸せになれる……そう
いう伝説を」

気を取り直すように片手で前髪を掻き揚げながら、潤一は精一杯のシリアスな顔を作ると語りかけた。

「……琴音、僕は」

「ごめんなさい！」

「早っ！」

告白を始め、今まで女をたらし込んだ潤一の最高のテクニク瞬間的に瞳を潤ませ愛を囁く、が発動する前に琴音は大きく頭を下げて断りの言葉を口にしていった。

「……そ、そうか……でもさ、琴音は好きな人がいるのかな？もし、いないなら、とりあえずでもいいんだ……。僕と付き合ってみないかい？ 付き合っていく内に、相手を好きになっっていくってこともあると思うんだ」

「え？ ええつと……本当にごめんなさい……好きな人がいるわけじゃないんだけど……やっぱり、そういうのって、私には出来ないと思うの……」

懲りずに交際を求めた潤一を、再び琴音は玉砕させた。

沈黙が訪れる。

じつと少女を見つめる潤一。

少年の視線から逃れ、俯く琴音。

沈黙を破ったのは少年だった。

「……そうか、それなら『仕方ない』」

変に語尾の声を大きく発音して、潤一は微笑んだ。

その一言が潤一が当麻と決めていた、ミッシヨンスターットの合図だった。

この言葉を潤一が発した直後、琴音の後方の茂みから当麻の使役する『式神』が登場する 予定であった。

「……おっ、おい!？」

しかし、状況は彼が書いたシナリオ通りに進まず、潤一は驚きを口にしていった。

「何?」

琴音は潤一に起こった異変に気づき、彼の視線を追う。

二人の視線の先、広場の入り口に立つ少年。

そこに居た少年は、昨日、琴音が出会った人物であった。

「……潤一に聞いたんだけどさ。君、お兄さんいるの？」

少年は、にこやかに声をかける。

「……え？」

「……ねえ？ 本当？」

戸惑う琴音に屈託のない笑顔で、その少年は再度訊ねた。

昨日とは違う態度。そこに気だるさをただ醸し出していた少年の姿はない。

辰巳当麻。

その笑顔で細められた目に、爛々と宿る何かを感じて、自然と琴音は警戒し身構えていた。

それは知らずながらも滝口としての修練を積んできた、彼女の本能がそうさせたのかも知れない。

第八話：告白（後書き）

<用語解説>

江戸エドヒガン彼岸：野生種の桜の一種。桜の中では最も長寿な品種の一つである。桜の代名詞となっている染井ソメイヨシノ吉野はこのエドヒガンとオオシマザクラの交配で生まれた園芸品種である。

神代じんたいざくばら桜：天然記念物。山梨県北杜市武川町の実相寺内にある樹齡二千年ともいわれるサクラの老木。日本三大桜の一つと称される。

第九話：降魔

広場を風が抜けた。

その中心にそびえる葉桜となつた江戸彼岸を、ざわざわと揺らす。現れた時から変わらぬ姿勢。両腕を背中に回し、琴音の答えを待つ当麻。

口を開いたのは、会話から外されていた潤一だった。

「当麻！ お前！」

自分はクライアントだと自負しているのだ。怒りを露に潤一は怒鳴る。今夜こそ琴音をモノにしようとして意気込んでいた分、それは大きい。

しかし、それを涼しげな顔で受け止めると当麻は呟いた。

「煩いな……気づかないかな？ お前はもう用済み。『邪魔』なんだよ……」

邪魔。そう言った途端、鋭い視線を潤一に遣る。

滝口の少年は端から彼の依頼を遂行するために、この場に足を運んだわけではない。潤一が陥れようとした少女、琴音にこそ、当麻自身にも用があつたに過ぎない。つまりは、彼の告白に便乗しただけだ。

「っ！？」

その眼力に、潤一は怯んだ。

その視線の含むものを、彼はよく知っている。それは彼の父親の取り巻きに在るならず者たちが、よく見せる目だ。そいつらが脅迫に使うものと同じ類の目だった。

父の思い通りにならない者を、無理やりに従わせる時に彼らは動く。かくいう潤一も、同じように彼らを使い、靡かなかつた女性を手籠めにしたこともある。

いいや、違う。

当麻のそれは彼らのものより強烈な意思を孕んでいることを、潤

一は感じた。彼らと当麻とでは、大きな相違があることを思い出す。ならず者たちは、ビジネスでそれをやっているに過ぎないのだ。最終的な手段に訴えることはない。事が大きくなり、発覚の後、逮捕されることを恐れているからだ。

だが、当麻は違う。父の政敵、スキャンダルを握った者。彼は事実として、幾人かの父の邪魔者を殺害しているのだ。

だから、潤一は気がつく、怒りを消失させ、震えていた。

「……兄を知っているんですか？……」

臆病風に吹かれ、口を噤んだ潤一を背に、しかし、警戒はしながらも、琴音は当麻の目を見ながら物怖じすることなく返す。

「……なるほど、ね……あの人の妹さんらしい度胸だね……」

当麻は一人、妙に納得して見せると笑った。

その笑顔は先ほど見せた笑顔とは異質のものだ。

「君のお兄さんの名前は、源蒼司……そうだよね？」

「！ 兄を本当に知っているんですね！？」

当麻が口にした名前に、琴音は反応する。それは至極、当然な反応であった。探し続けて見つからなかった、大切な肉親を知る人物がそこに現れたのだ。

「知っているよ。昨日、出会ったんだ……」

「昨日！？」

やはり、兄は自分の試合を見に来ていたのだろうか、驚きながらも喜びが琴音の顔に窺えた。

「そう。昨日。……それでね、とてもお世話になっちゃってね……」

お礼をしたかったんだ……」

そう言うのと、当麻は含み笑いを漏らす。

「どこで会ったんですか？！」

少女は詰め寄る。喜びの余り、その警戒が薄れる。

「……案内してあげるよ……それ、最高の『お礼』になるでしょ？」

まずは君から……その後、お兄さんも俺が送ってあげるよ……」

「本当ですか！？」

琴音の顔がぱあつと明るく輝く。

「本当さ……」

独り言のように当麻は呟いた。自らに言い聞かせるように、決意を新たにするように。

「あの世にね！」

突如、叫ぶと、八卦の剣士は後ろ手にあつた両腕を動かした。そこに握られていたのは彼の愛刀。鯉口に添えた左手を引き、右手で鞘から刀身を走らせる、薙ぐ。

鋭く空を裂いた抜き身の刃。

琴音はその抜刀術を避けていた。刹那、発した当麻の殺気を感じたのだ。

「……流石、源蒼司の妹……やるね」

襲撃者は、素直に驚いて見せる。

「っ！ 何！？ 貴方、誰なの?!……」

しかし、その斬撃に裂かれた制服の上着。琴音は両手で裂かれた胸元を隠しながら訊ねた。警戒は再び、そして、露骨になる。

「滝口、さ……滝口、八卦衆の一人。辰巳当麻」

防御に適した体制を取りながら自分を見据える少女に、当麻は名乗り直し、不敵に晒う。

「滝口？」

当麻の返答に、琴音は訝しげに聞き返していた。

「……あれ？ 知らないのかい？ 先代の滝口棟梁の妹ともあろう人が……」

歪んだ復讐に囚われた剣士は、さも意外そうな表情を見せる。

「……この世には君の知らない世界があるんだ。信じられないかも知れないけど、魔法みたいな力や、鬼みみたいな化け物が実在するんだよ……」

琴音の身のこなしに、対応能力に驚きはしたものの、相手は武器も持たない一般人である。そう思ってたか、当麻は悠々と語り始めた。それが手向け、そう言わんばかりに。

「……この世ならざる存在、その力。それを用いて、この世に仇なすモノ。即ちは『魔』。……それを打倒するために平安の世に生まれた組織、退魔の武士……それが滝口さ……」

「……お兄ちゃんか？……」

どこか疑いながら呟く琴音に、当麻は迫っていた。

「元、ね。彼は、その滝口である俺に危害を加えたんだ。その償い、君にしてもらうよ」

残酷な笑みを浮かべ、当麻は真剣を振るう。

「っ！？」

琴音は制服のスカートを靡かせ、それを回避した。

「うわあアツ！」

直後、潤一の叫び声が起こる。二人の隙を見て、声の主は駆け出していた。

琴音を守るためではない。それは我が身を守るための行動だ。潤一は一目散に広場の出口を目指していた。逃走を図ったのだ。

「潤一！ 逃げるなよ！ 彼女を犯したいんだろ！？」

その行為を襲撃者は許しはしない。その様を嘲笑い、当麻は刀を走らせる。それに生じるのは風の刃。

斬間きしまから遠く離れた先。

「うぎゃあっツ！」

そこで悲鳴が上がる。生まれた鎌鼬に足首を裂かれた潤一は苦痛を上げ、縫もつれ、地面に突っ伏した。

「河原くん！」

琴音の悲痛な声が、静かな湖畔に響く。同時に彼女は動いていた。しかし、倒れた友人に駆け寄ろうとする琴音に、容赦なく当麻の凶刃は閃く。形振り構わずに琴音は地面に転がることで、それを避けた。

「ははっ！ 二人とも最高だよ！ 狩りは少しくらい、抵抗があった方が楽しいからね！」

愉快そうに醜く顔を歪め、当麻は刀を次々と琴音に振るう。少女

は地面を転がりながら攻撃をかわす、体制を整えると跳躍し立ち上がる。だが、そこにも追撃は迫っていた。その刃をどうにか避けながら、琴音は異変に気づいていた。完全に避け切ったはずの攻撃に、次々とその衣服を裂かれているのである。

「……なぜ？」

不可解な当麻の剣撃が不意に止むと、彼女はぼろぼろに裂かれた制服から覗く肌を懸命に隠しながら呟いていた。それが友人の足を切り裂いた力だとは理解している。しかし、それは彼女の知る常識では、解明出来ないことなのだ。

「おい、潤一。見ろよ。興奮するだろ？」

足元に転がった潤一に、襲撃者が話しかける。

琴音は攻撃を避けながらも、傷ついた友人にどうにか近づこうとしていた。当麻は悪意を持ってそれを阻止すると、自らがその横に立っていたのだ。

「見なよ、色男！」

下品に笑うと、当麻は足元に蹲る潤一を蹴飛ばす。

「ぐうっっ！」

傷の開いた踵を押さえ、呻いていた潤一はその蹴りをもろに受けて、再び苦痛の声を上げる。

呻く優男を、優越感に浸り晒う当麻。

「……お前、いいのかよ!? 俺にこんなことしてっ!?!」

痛みを必死に我慢しながら、潤一はその少年を見上げ睨み付ける。当麻は悠然と、その視線を受け止めた。

「……パパにでも言いつけるのかい？」

そして、蔑視する。

言わんとした台詞を言われ、潤一はただ金魚のように口をぱくぱくとさせた。

その様を心底、馬鹿にした表情で当麻は一瞥すると、突然にしゃがみ込んだ。

「ひいっ！」

潤一が喚く。身を隠すものがないので、体を丸めて固まる。しかし、当麻は潤一の髪をひっぱると、その上半身を無理やりに引き起こした。

「……お前のパパもさ、用済みなんだよ。俺に命令する権利は、もうないんだ……それにワケも無く偉そうに振舞うお前には、前から頭に来てたんだ」

怯える少年にそう囁くと、目線を動かさず。そして、琴音を睨む。

「動くなよ？ 妹さん……」

そして、その刀を潤一の喉下にゆつくりと動かした。

「ひっ、ひいつッ！」

潤一の顔が恐怖に引き攣る。

「……この意味、二人とも解るよね？」

その顔を横目に見ながら、当麻は満足げに晒う。

「……俺さ、これでも八卦衆の中でもエリートなんだよね……まだ、俺しかいないんだ。八卦の力以外を使えるのはさ……」

「……八卦？」

琴音が反芻する。友人を負傷させ、自分の衣服を裂いたその力こそ、彼の司る八卦の力によるものであることを、当然、彼女は知らない。

「……ああ。君らは知らないからね、そんな知識………そうだ」

何かを思いつくと、当麻は殊更、妖しく微笑んだ。

「妹さんはお兄さんのいる世界を知りたいよね？ ……潤一は妹さんを犯したくて仕方ない………そうだろ？」

「……お兄ちゃんの世界？」

琴音は当麻の言葉尻をあえて聞き流し、呟く。

「……『魔』だの、この世ならざる力だの言われてもさ、ピンと来ないでしょ？ 実際に見せてあげるよ。ついでに潤一の望みを叶えて、さ」

そう言つと、当麻は潤一の髪を解放する。

「まずは………そうだね………『言霊』から見せようかな？ 言葉にね、

力が宿っているんだよ。その言葉自体が存在を縛り付ける呪
いであり、祝詞なんだ」

ゆらりと立ち上がりながら、突然に始まった襲撃者の講義。その
声に琴音は聞き入っていた。それが兄の世界のことだと思つと、そ
こに彼を追うヒントが在る様に思えてならなかったのだ。自分の操
に、生命に危機が迫っていると知りながらも。

改めて、当麻は潤一に視線を送る。

「……潤一。君は鬼畜だ……つまりは『鬼』だ。何人も何人も女を
誑かし、騙し、犯し、悲しませた『鬼』だ……そうだろ？」

そして、眼下で蹲る優男に言葉を遣る。

それは呪であつた。彼の魔力の籠もつた言葉だつた。

当麻は潤一に言葉による呪いをかけようとしているのだ。

反応を見せない潤一。

それは目の前の、当麻の言つた他の女性と同じ様に、これから毒
牙にかけようとしていた、幼さの残る可憐な少女の手前であるから
なのか。それとも、痛みがそれを聞かせなかつたのか。

「……正直に答えるよ。潤一！」

当麻は再び、潤一を蹴る。彼の口から、涙交じりの呻きが漏れる。

「素直に答えてよ？ そうしないとすぐに死んじゃうよ？」

子供に言い聞かせるようにやさしく囁く声。自分が手にかける。

そういう意味合いの言葉を含みながらも、さらりと言い放つ。

「……君は鬼畜だ。『鬼』だ。そうだろ？」

続いた同じ投げかけに、潤一は涙目で必死に何度も頷いた。

「……彼は『鬼』だそうだ」

納得の行く返事を受け、琴音に視線を遣ると当麻は微笑む。

「次は『式神』……式神っていうのは、主に人形や呪符に霊体や聖
獣、鬼なんかを憑依させて使役する呪術なんだけど……」

当麻は言いながら、左手の人差し指を潤一に向ける。

「応用次第じゃ、こんな事も出来る。人にね、降ろすんだ。そいつ
らを」

琴音は呆然とその動作を見ていた。彼女の常識では、この後の惨劇を予測し得なかったからだ。

当麻が式神を降ろすべく、力を籠める。

人は強い欲望や、負の感情に囚われると『魔』へと堕ちる。

それに狂い、自分を失い、理性を破壊し、人としての枠を自ら崩壊させてしまうのだ。

その成れの果て、『魔』の具体的な姿。その一つが鬼だ。

潤一はそれに堕ちた訳ではない。

お前は鬼だという、言霊。ただそれに縛られているだけである。

それが強力な呪であったのなら、その場で彼は鬼へと変じていただろう。だが、当麻はそれだけの術者ではない。

だが、だからこそ、当麻は潤一に呪をかけたのだ。

その言霊で、彼を鬼を降ろす器に作り変えたのだ。潤一は人の姿でありながら、言霊により『鬼』にされているのだ。

その人の形をした『鬼』に、式神としての『鬼』を降ろす。潤一には抵抗は出来ない。何故なら『彼自身が自分を鬼だと認めた』からだ。つまりは、術者と依代よしろは共に、潤一という人間を人ではなく、鬼だと認識しているのだ。

鬼を受け入れることは言霊の指す、在るべき姿に帰るだけに過ぎない。それこそが自然なのだ。言霊という概念。言自体が事ことを成すという、その呪術に支配された今は『潤一が人間であること』の方が『異常』なのだ。

潤一の中で、内なる鬼と降ろされた鬼とが重なり、強烈な自我を確立する。目覚める。

そして、『河原潤一』という名前、言霊に縛られていた『人間』を終には壊す。

姿形さえも、新たな自分に、在るべき自分に変えるために。

「あ、ぐ、あつ、あつ、グっ……」

潤一が泡を吹きながら、のたうち回る。

その体が有り得ない方へと歪み、折れる。その肉がそれ自体、意思を有するように蠢く。

「河原くん!？」

異変に気付いた琴音は駆け付けた。当麻は最早、邪魔をしない。大声で一頻り笑う。

駆け寄った少女を潤一は力任せに腕で弾いた。その腕は、先程までの細いものではない。丸太のように異様に太く隆起している。

「あうっ!？」

殴打された琴音の、その華奢な体が舞う。

「ウゴオオオオッ!」

潤一は吼えた。否、それはすでに河原潤一という少年ではない。

ざんばら髪を振り乱し、野太い咆哮を上げる。

頭部に角を持った、筋骨隆々の異形。

一匹の鬼だ。

八卦衆、風を司る剣士の式神なのだ。

「犯れよ、潤一! 気の済むまで犯れ! 飽きたら喰らえ!」

それを使役する者は、腹部を押さえ、潤一の変わりに新たに地面に横たわった少女を見下しながら、命令を下した。

第九話：降魔（後書き）

<解説・刀用語>

鯉こいぐち口：刀を納める鞘の口。

斬間きりま：刀の刃が届く範囲。

第拾話：白馬の王子

「犯れよ、潤一！ 気の済むまで犯れ！ 飽きたら喰らえ！」

当麻は生み出した式神に命令を下す。

「ウゴオオオオツ！」

式神。潤一であつた鬼は返事のように吼えたと、しかし、使役しているはずの当麻に強襲をかけていた。

「うおい！？」

驚き、当麻は身を躍らせる。反応出来ないレベルではないものの、彼の予想よりも遙かに上回る脚力で鬼は迫ると、先ほどまで当麻の存在した場所に豪腕を勢い良く振るつた。

「お前！ 本当に使えないな！」

当麻は空中で愚痴ると、刀を構えて着地する。滝口と鬼の間合いは再び開いた。

その鬼は式神として降ろしたものだ。本来ならば、術者の命令に忠実に従うはずである。

「潤一、お前は死んでもバカが直らなかつたのかよ……」

自らを襲撃した鬼に辟易し、降魔術者は呟いた。

威嚇するように低く哮ると、鬼はそもそもは主従関係の存在するはずの少年を見据える。

「ちつ……式神にも成れやしないか……」

舌打ちをして、当麻はまたも愚痴る。

その鬼を式神として使役するのに失敗した原因は、彼の行った術式のためなのは明らかである。

言霊による縛りと降魔。

通常はありえない強引な論理ロジックで行使された術式を、完璧なものにするには些か彼では力量不足であつたのだ。

しかし、その原因を八卦衆の剣士は依代に押し付けていた。吐き付ける言葉がそれを如実にしている。

お前を襲うのだ。そう宣言するかのように、当麻に鬼は吼えた。恐らくはこの知能のない魔獣でしかない鬼は、餌たる存在を彼だけだと認識しているのだろう。

そう思い、当麻は鬼の視界を確認しながら、じりじりと移動を開始する。

倒れた琴音に気付かせるために。結果としてそれで望んだ展開を迎えることが出来るはずだと、当麻は踏んでいた。

鬼には産まれながらの純血な鬼と、人を始め後天的に別の存在から変じた鬼との二種が存在する。当然、この鬼は後者である。

変じて堕ちた鬼の能力は個体により大きく異なるのだが、河原潤一が言霊と降魔によって変わったその鬼は、言わば獣に過ぎなかった。肉体的能力では優れているかも知れないが、言葉を解せず、本能のままに獲物を狙うだけの魔獣でしかないのだ。

餌である少年の隙を窺う鬼。それに警戒しながら一步一步、移動する当麻。

二人を結ぶ線。その直線上にうずくまる琴音に乗る。

彼女は意識を繋ぎ止めてはいたものの、腹部を押さえ、立ち上がることも出来ずにいた。必死に呼吸を整えダメージの回復を図る。

しかし、それは思いの外、深刻だった。

鬼の口から涎が流れる。極上の獲物を見つけ、歓喜を漏らすように唸る。

「……妹さんにご執着だったもんな、潤一……さぞ美味そうに見えるだろう？」

鬼のターゲットが自分から琴音に移ったことを感じると、当麻は嗤った。

「……妹さん。アンタの無残な死体。お兄さんはどんな気分で見

「んだらうね？」

残虐に顔を歪めると、独り言のように呟く。

鬼は雄叫びを上げた。少女を襲うべく突進する。琴音は恐怖した。当麻は満足げに笑った。

大型の霊長類のようなシルエットを躍動させて、鬼は跳ぶ。月のない暗い夜空に舞う。

諦めたくはない。

そうは思いながらも、目の前の現実を変える力は、今の自分にはないと琴音は理解していた。

死ぬのだ。

その恐怖は大きく彼女に押し掛かる。

生命の危機に際すると、人はその様を、まるで時間がゆっくりと進んでいるように感じるといふ。刹那であるはずの一瞬、一瞬を明確に捉え見ることが出来るという。

琴音が見ている世界は、今、正にその状態であった。

空間に跳躍し、自分に迫る鬼がゆっくりと近づいていた。赤みを帯びた肌が、異様に膨れた筋肉に耐え切れず、ぼろぼろに千切れた衣類から露わになっている。振り乱したざんばら髪の毛の一本一本の毛が窺える。そこには常に服装を、髪の毛の乱れを神経質に気にしていた友人の名残はない。

水滴と化した涎が、幾つ粒か飛ぶ。ぎろりとしたその眼に、自らが映る。

死をもたらす者の具現化した存在。

その鬼こそが、琴音にとつての死神なのだろうか。

その鬼の横に空を舞うように現れる、黒衣の美しい天使。

彼こそが彼女を天から迎えにきた使者なのだろうか。

「え？……」

琴音は呟く。

否。それは彼女を迎えに来た天使などではないのだ。人間だ。黒衣の少年なのだ。

そして、それは襲撃者 辰巳当麻ではない。服装は酷似している。その手には同じく日本刀をも携えている。

しかし、明らかに別人だ。

細身ながらも、鍛えられたしなやかな体のライン。美しく整った横顔。鬼を射抜くような鋭く、凛々しい眼差し。特別に手入れをしていないであろう髪も、さらさらと動きに生じた風に揺れている。

その手にした刀が、見事な軌道を描いた。

その軌道が無駄のない、理想的な太刀筋であることが琴音には理解出来る。

左手首にある小さな銀色の鈴が、微かな音色を奏でていた。

振られた少年の刃に首筋を裂かれ、鬼が苦痛の叫びを上げた中で、琴音は確かにその澄んだ音を耳にしていた。

そして、少女は知った。

この世には、本当に、白馬の王子が実在したのだ、と。

それが渡辺詩緒と源琴音の出会いであった。

「…………蒼司。僕はもう、君を許すことも、行かせることも出来ない

…………」
頭部を失った友人の亡骸をゆっくりと地面に寝かせると、ぼつりと柩希は言った。

確かに童子切の呪が未知のものであり、強大だったことは蒼司に

とつても誤算だったのかも知れない。

しかし、起こってしまった惨劇は、最早、彼が一人の滝口として見逃すことの出来ない事態を招いていた。

仲間を失った怒りを静かに秘めて、柁希は立ち上がる。その視線をゆっくりと無二の親友に向ける。

「……柁希。この事態は確かに私の望んだものではない。……だが

」

柁希と対峙する蒼司。

「遅かれ早かれ、訪れるべき事だったのだ……」

言いながら、再び童子切を構える。

「……君は本気だったんだね……」

寂しく笑顔を見せ、柁希はその刀を抜いた。

その刀の名は鬼切。

かつては彼の先祖である英雄、渡辺綱の愛刀。

元は髭切の号を冠してしたが、彼の英雄が一条戻橋で酒吞童子の

腹心、茨木童子の腕を一刀の元に切断したとされ、その際に名を鬼

切と改められた源氏の宝具。

その名もまた言霊を帯びていた。

鬼切の名は祝詞として『魔』を相手する際に、絶大の切れ味を誇る。

伝承は、歴史は、強力な力をその名刀に与えたのだ。

柁希は鬼切をゆっくりと左八相に構える。

「……四天王、渡辺柁希。……僕が君を討つ」

そして、悲しげに力なく呟くと、しかし、突風の如く、速く激しく駆けた。

剣光が閃く。一足にして放たれる四段突き。それは正に神技であった。蒼司はその突きを払おうなどとはしない。紙一重に身を逃がす。いつものようにゆとりを持ってそうした訳ではない。そこでかわすことが精一杯だっただけだ。

彼は知っている。剣速は相手が上手だということを。だから払う

などという行為は行わない。その直後に訪れる敗北が、死という結果が容易に予測出来るからだ。

逃げた蒼司を鬼切は追う。無拍子に放たれた追の斬撃。それとて神速。捨てて振られた刃ではない。

刃音が響く。

鬼切を止めたのは童子切安綱。鬼を斬ったという同じ経緯を持ちながら、対となる道を歩んだ神剣だった。

互いが互いを最強の剣士だと認める者同士の視線が交わる。

「枉希。私はいつかお前と命を懸けて立会いたいと思っていた……」
童子切に力を込め、蒼司が呟く。

力では童子切の剣士が勝る。じりじりとその刃は鬼切の剣士に迫る。だが、彼に恐れや迷いはない。

枉希は瞬間、力を緩めると、その身を半身ずらす。同時に、鬼切の刀身で童子切を流し、刀を返す。薙ぐ。

蒼司は地面を滑走するかのように低く短く移動すると、それをやり過ぎた。そして、片足を軸にし、身を捻り相手へと正面を向く。その勢いを乗せ、手にした妖刀を走らせる。

回避動作から反転、虚を付き、瞬時に放った反撃の一手。よもやあの姿勢から構え放ったとは思えぬ、剣速、太刀ゆき。それは確実に敵を断つことの叶うものだった。必殺の一手である。

しかし、蒼司の狙いは牽制に過ぎない。この一撃が勝負を決するものになるなど夢にも思いもしない。相手は唯一、自分と互角かそれ以上と認めた滝口なのだ。

彼の予想通りに、放つたれた一撃を枉希は舞うように避ける。それも紙一重に、返し手を放つ構えを作りながら。

だが、それを撃つことなく、稀代の滝口と謳われる少年は鬼切を正眼に構え直した。

不用意な一手は、自らの身を滅ぼす。

枉希とて、相手がいつでもその命を奪うに十分な斬り返しを放てる者だと理解しているのだ。

二人の剣士を包む、殺気の立ち込める、互いの友の血が臭う空間。
「……僕は今でも……今でも、君と真剣で斬り合うことなど、したくはないよ……」

柁希が零した言葉。

「……最早、信じる道が違うのだ。ならば……ならば争うより他になかるう……」

己の信念に従う道を選んだ少年も、釣られ寂しく微笑む。

「そして、私を止められるのは柁希。お前だけだ」

続けた言葉は本心。

両者、斬間は僅か先。

「……君は僕に残酷な決意をさせる……」

憂いの表情で柁希は返す。そして、その表情のままに、鬼切の剣士は仕掛けた。

「グアアツツ！」

後方へと大きく跳躍すると、首を裂かれた鬼は怒りを吼える。

「浅かったか……」

それでも冷静に、琴音の前に立つ詩緒は呟いた。

「お前、何者だよ？ 滝口か？」

嫌悪を隠そうともせず、当麻は少年に吐き付ける。

その問いかけを無視し、詩緒は刀を地面に突き立てると、背にしている竹刀袋を括る紐を解き降ろした。

「源琴音だな？」

続けて脱いだ黒いライダースジャケットを、名前を口にした少女へと差し出す。

「…………え？」

少年に告げられた自分の名前。それは少年に見惚れてしまっていた琴音を、我に帰した。状況や何もかもを忘却させ、琴音はただ少年を見つめていたのだ。

少女は慌てて露になっていた肌を隠すと、少年の差し出した上着を受け取った。

「あ、ありがとうございます……………」

琴音はお礼を口にしながらも、顔を真っ赤に染め、視線を反らす。「だから、お前は何者なんだよ!？」

無視をされていた当麻が怒鳴った。

「…………御託が必要なら、さっさと見え」

そこでようやく、詩緒は当麻の相手をした。ゆっくりと彼へと振り返える。

「なんだと!？」

八卦の剣士は眉間に皺を寄せ、怒りの双眸で睨む。

「…………お前が何者なのかなど、俺には関係ない。お前が何なのかは俺の中ではつきりとしている。だが、お前が俺を斬るのに理由付けが必要なら、さっさと見えと言っている」

その眼力に少年は動じることはない。ただ、鬼を斬ったときと同じ目を当麻へと向ける。

「…………会話にならないヤツだな…………イカレたヤツだか、アホなのか?」

蔑み、当麻は晒す。

周囲に鬼の雄叫びが響いた。それは反撃の狼煙となる。

「…………そうだった。お前の敵は俺の他にもう一匹いるよ? 防人^{さきもり}だか、遊撃^{ゆうげき}だか知らないけど…………雑兵^{おまえ}には無理な状況じゃないの?」

厭らしく八卦の滝口は語る。

鬼が強襲すべく、地面を駆けた。

「…………源琴音。それを使えるな?」

自らが突き立てた刀を一瞥し、詩緒は後方の少女に訊ねた。

こくり、と琴音は頷く。呼吸は整っていた。腹部に痛みは感じるが、動くことは出来る。

なにより、少年の足を引っ張ることが、琴音にはどうしても我慢出来なかった。その理由をなんとなく、彼女は感じていた。明確に意識しつつある好意。それがその正体だろう。

跳躍した鬼が、二人のいた場所に降り立つ。彼ら踏み潰すべく、巨軀を活かした攻撃。その一撃に地が震える。

二人は同時にそれぞれの方向に跳んでをそれ避けていた。

地に刺さっていた詩緒の刀を手に、鬼を少女は見据える。意識を集中させる。大会の時よりも数段上の意識の集中。かつて兄と修練した時のように、強く、しかし冷静に敵を捉える。

竹刀袋から新たな刀を抜き放ち、詩緒は当麻に迫っていた。

「……教えてやる」

八卦の剣士との距離を縮めながら、白馬の王子は口を開く。

「何をだよ？」

同じ滝口であるのならば、八卦衆たる自分が負けるはずはない。

根拠のない、それでも絶対的な自信を覗かせ当麻は刀を構えた。

しかし、知りえない。彼こそが自分を赤子のようにあしらった剣士が認めた滝口であることを。

そして、童子切すら知らなかった彼には気付けない。詩緒の持つ刀が、それに勝るとも劣らない見事な業物であることが。

だが、詩緒とて気付いていない。左手首で奏でる小さな銀色の鈴と同じく、その刀に柁希の想いが託されていることを。

柁希の愛刀。彼の形見。彼の遺志。鬼切それを詩緒は初めて構える。

「渡辺詩緒。お前を殺す人間の名だ」

新たに誕生した鬼切の剣士は、その名を『魔』と認識した相手に告げた。

第拾話：白馬の王子（後書き）

<用語解説>

さきもり防人：特定の地域を守護することを目的とした滝口のこと。

ゆうげき遊撃：日本各地を転々としながら『魔』を狩ることを目的とした滝

口のこと。作品主人公・詩緒はこの遊撃の滝口。

第拾壹話：奔流

少年は渡辺詩緒と名乗った。

琴音にはその名前に心当たりはない。そして、彼に対する面識もなかった。

それなのになぜ、あの人は私のことを知っているんだろう？
明確な答えはないが推測は出来る。それは見当違いの憶測では絶対にならないと思う。

当麻と同じく、彼も兄の動向を知っているのだ。
ならば当然のように次なる疑問が浮かぶ。

あの人とお兄ちゃんとの関係は、何？

襲撃者は兄を『魔』だと言った、だとしたら。

あの人も滝口だとか言う人？ お兄ちゃんの敵？

脳裏を過ぎるのは、認めたくはない想い。

鬼の攻撃を回避しながら、琴音は渡辺詩緒という少年について思考していた。

その魔獣の攻めは単調なものでしかない。若干のフェイントも存在しない稚攻だ。身体能力のみに頼った攻め手。すでに見切っていると云っても過言ではなかった。冷静に動きを読めば、十分に対処出来る。

琴音が避けた鬼の拳が、江戸彼岸の周りに配された縁石を砕く。
だが、その威力は錯誤を許しはしないものなのだ。

ダメ！ 今は目の前に集中しなくちゃ！

一瞬の油断は取り返しのつかない事態を招く。琴音は小さく頭を振ると、意識を変える。

大人が腰掛として利用出来るほどの大きな縁石。今し方の攻撃で、そこに埋まった腕を引き抜けず、琴音の斬間のすぐ先で鬼はもがく。絶好の好機が訪れながら、だが、琴音はその手にした少年の刀を振るえなかった。

少年に斬られた首筋の傷はすでに塞がっている。異常な回復能力をその鬼は誇っていたのだ。

仕留めるのならば、一刀の元に致命傷を与える必要がある。そう予測し、その必殺の一撃を斬り込むのに十分な隙を見つけないがらも、やはり踏み込めない。

その鬼は友人だったのだ。間違いなく、自分のことを好きだと言ってくれた河原潤一なのだ。

私、どうしたらいいの？ 渡辺くん！？

焦りに似た感情を抱き、琴音はその刀の本当の担い手を窺った。

「くそうつ！？」

癩しやへに障る。当麻はそういう感情を剥き出しに吐きつけた。自分の目の前にいる雑兵だと見下した滝口の動きに反応しきれないのだ。

一手、二手。僅かに刃を交えただけで、その差は歴然としている。剣の技量だけでは相手が圧倒的に上を行くのだ。

「拒絶はしないか」

自らが振るっていた刀。その刀身を瞥見し、詩緒は呟いた。その刀は鬼切。

鈴の剣士には一つ、危惧していることがあった。

それは自らの中に潜む、もう一つの自分に対してである。

詩緒は初めて滝口としての役目を全うした際に、大きな代償を支払っていた。

肉体的にも、精神的にも、その負債は未だ彼に影を落としている。

彼の中に喰食う、もう一人の彼は、その象徴たる存在なのだ。

それは『鬼切』という退魔の名刀にとって、正に仇敵である。即ち彼自身が、その手の刀にとって討つべき存在であるかも知れないのだ。

「行ける」

自らに言い聞かせるように、迷いを振り払うように発すると『魔』だと認識した敵を見据える。

詩緒がこの場に現れたのは、式神を降ろす際に生じた、魔力の波動を感知したからだ。

そして、その式神で少女を襲っていたのが、眼前の剣士である。この世ならざる力を以って、人の世に害を成す者。それこそが『魔』だ。

詩緒にとつて当麻という剣士は、例えどのような存在であれ、紛うことなき『魔』に過ぎない。

「……俺を相手に試しているだど!？」

不自然な太刀行き。勝負を決する一撃を放てながらも、それをしてない相手。そして、呟いた言葉。

当麻は怒りに震えていた。

三下だと見下した相手を軽くあしらうはずだった自分が、虚仮にされている。

「お前、許さない!」

下唇を強く噛む。血が滲む。

「死ねよ!」

当麻が吼えた。同時に彼はその力を全力で解放する。体中の力を搾り出す。全精神を魔力へと変換する。

八卦衆の剣士から生まれた魔力に呼応し、幾筋もの凶風が走った。

「木行の力か……」

詩緒は風の刃をかわす。

多方向に走った風は地面を覆う芝生を土ごと薙ぎ散らし、池に面した柵を破壊していた。

さらには、追って流れた新たな大気。この広場の主たる桜の老木はそれに枝々を揺らされ、切り刻まれ傷つき、悲痛の声を上げるようにざわめいた。

轟音と共に風はうなりを上げた。

そして、当麻を中心に巨大な竜巻が発生する。

「あははははっ！」

強大な魔力を発動させた八卦衆の一人は、風の大渦の中で嗤う。

「ウゴオオオツッ！」

「何！？」

鬼が痛みの咆哮を上げる。鎌鼬により体の至る部位に裂傷が開き、気流に従い血が舞い飛ぶ。

対して、疑問を口にしながらも、琴音はその感覚で迫り来る風の刃を次々と回避していた。

極限に集中したは意識は感覚的に不可視の刃を感知させている。知識としてそれを知らないだけで、兄との修練によって習得していた超常的な知覚能力は確かに働いているのだ。

常識の範疇から逸したレベルのその戦闘は、彼女が潜在的に内包していた能力を、飛躍的に覚醒させていた。

「ちっ！」

予想もしなかった敵の力に、詩緒は舌打ちする。

刀に対して自信がなかったとはいえ、勝負を急がなかった自身の落ち度を痛感していた。

「俺に本気を出させたんだ！ 誇れよ！ 雑兵！」

轟音に掻き消され、相手に聞き取られることのない言葉。だが、当麻は勝ち誇る。自身を中心とした風の激流は、さらに勢いを増しながら、その範囲を拡大していく。後は風に巻かれ、檻ほろくす褸屑のように命を散らす敵を、そこから晒うだけだ。

風の向こう側。詩緒は琴音を見た。

広場の奥側に位置する彼女に、満足な逃げ場はない。

「……斬るしかない、か……」

意を決し、詩緒は鬼切を構えた。

人の意思は力を秘めている。それも非常に強力な力を、である。

だからこそ、鬼を始めとするの『魔』という違う存在に人は変じることが叶うのだ。

だが、その力はなにも悪しき方向にのみ有効なものではない。

或いは、その力の行き着く先は『魔法』と呼ばれる領域にさえ届くのだ。

魔術とは理論、法則に則り行使される力。対して、魔法とは言わば『奇跡』そのものだ。そこには理論も、法則も存在しない。在り得ない結果を、ただ単純に導き出すだけの力。だからこそ、それは奇跡と言われる。

人はそれを潜在的には持っているのだ。ただ魔法というレベルで、意志の力を行使する術を、才覚を多くの人間が有していないだけだ。

斬鉄。達人がその技量を以って、刀で鉄を斬ることが叶うように万物とて、さらには魂体とて、斬れない道理はない。

風という、自然の力もまた然り。

意思の力の一端。斬る、という意味の力が働きさえすれば、それとて斬れる存在なのだ。

刀は斬る（その）ための武器ものなのだから。

何よりも滝口という武士にとって、それは『魂』と同義である。

象徴シンボルなのだ。『武士の魂』たる刀に、彼らはその意志の力を乗せ易い。逆説的には、大なり小なりその力を行使できる武人だからこそ、滝口を継げるのだ。

時代錯誤ではない。故に現代という科学社会においても、滝口は刀を振るうのだ。

百に一つでも。

その刃に完全と意志の力を乗せることが成功すれば、凡刀とて断てぬものはない。

そして、詩緒の手にある『鬼切』は退魔の名刀。並みの刀よりも、

遙かに担い手の意識の力に応じるはずである。

ならば、巨大な竜巻とて、斬れぬはずはない。後は自身の意志の力の問題。

少女を救うには、自らの信念 『魔』から人を護ることを、貫くには、最早、斬るより道はないのだ。

迷いなく。詩緒は心静かに巨大な風の奔流を読んだ。

唯、断つべき処を探す。

「竜巻を刀ごときで断つっていうの!? お前、バカだよ! 無理だね! そんなことが出来る人間がいるものかよ!」

その様を、風の渦の中央で当麻は嘲けた。

「また無茶をしようとするわね」

不意に、詩緒のすぐ背後で少女の声がある。

「確かにアンタならやれそうでもあるけど……リスクが高いのも事実よ。こういう時のために私が同行す(い)るんじゃないの?」

少女は寄り添うように、刀を構える少年に並んだ。

「……遅かったな」

声の主に視線を遣ること無く、詩緒は呟く。

「はい?」

それに少女の整った顔に浮かんだ表情が、凝固する。

「……どの口? どの口が、そんなフザケたことぬかしてるの!?

私の記憶が正常なら、アンタの方が丸一日の遅刻でしょうが!」

そして、引き攣った笑みを湛えながら、少女は早口に捲くし立てた。

「戯言は後で言え」

しかし、淡々と詩緒は応じる。後で一人で勝手にほざいている。

返しに放ったその一言は、そういう意志を孕んだ言葉であった。

状況が切羽詰まっていることも理解できる。

「……どうにもやりきれないわね……」

しかし、眉間を細い指で押さえ、少女は零した。

同時に、彼の発言の意も汲んでいた。

彼女は、少年が非難や苦情を受け付けられない性質であると、悲しい位に知っている。

「……そりゃ、事情は聞いたけどさ……でも、大体、それを説明したのが本人じゃなくて、敵対者だって、どういうことなのよ……」
何を言っても無駄なんだろう。そう思いながらも、続けて愚痴りはするものの、やはり、この一件は先の一言で詩緒の中では決着したのだと、瑞穂は悟った。

事実、そのぼやきに返ってくる言葉はない。
「急げ！」

それどころか、遅刻した張本人に急かされる始末。

「煩いわね！ 言われなくともやるわよ！」

喚くと、少女 賀茂瑞穂は右手人差し指と中指を空間に指し示した。その二つ指先で、そこに清明桔梗せいめいぎきようを描いて行く。

清明桔梗。それはセーマンと呼ばれることもある陰陽道の代表的呪術図形、五芒星である。これは陰陽五行の相生・相剋の理を示す図形なのだ。

彼の偉大なる陰陽師『安倍清明あべのせいめい』の家紋でもある、その五芒星。その頂点は、それぞれ五行の一つ一つを示しており、正に陰陽五行の象徴たる形象なのである。

多くの陰陽師はこれを魔力行使のスイッチとして利用する。
通常通常の感覚から五行の力を感知し、行使する状態に体を移行シフトする起点である。

しかし、加茂瑞穂という陰陽師にとっての清明桔梗はスイッチではない。

彼女が八卦衆から危険視される要因、そして、稀代の陰陽師と呼ばれる所以ゆえん。それは彼女が意識せずとも五行の力を感知し行使できる特異な陰陽師だからなのである。

瑞穂にとってのそれは、魔力増幅ブーストなのだ。

「金行を以つて木行を剋す！ 散！」

並みの陰陽師が束になるうとも練り出すことの出来ないほどの、強力な魔力の籠められた力ある言葉が宣言される。それは五行相剋の理に働きかける呪文。

木行の力の一つたる風の力は、辺りに存在する金行の力に相殺されて行く。

刹那として、風の奔流は完全に消滅していた。

唐突に訪れた静寂。凪いだ大気。

そこにはすでに、広場に君臨し荒ぶった暴君の姿はなく、地面や老木に痕跡を残すのみだ。

「！ 賀茂！ お前！」

その中央にいた当麻は、怒りを露に自らの力をもの見事に無力化させた瑞穂の姿を認めると、睨んだ。だが、言葉の勢いに反して、彼の体は悲鳴を上げている。

先ほどの風の力の行使は、彼の全魔力を利用したものなのだ。苦しそくに肩で息をしながらの姿には、威厳も何も無い。

「あら？ いつから呼び捨てに変わったのかしら？ ……無様ね…

…余程、余裕がないのね」

その様を見て取り、瑞穂は挑発する様に微笑んだ。

「……アンタには、お世話になったわね……お礼をしてあげるから、覚悟してなさい」

そして、婉然にはあるが、威圧的にそう続ける。

「瑞穂！？」

当麻を挟んだ向こうで、こちらを窺った琴音が驚きの声を上げた。直後、鬼が彼女を強襲するのだが、琴音はそれを鮮やかに回避する。

「琴音、ごめん！ 事情は後で説明するから！」

幼馴染に謝罪の言葉を送ると、詩緒にちらりと視線を遣った。

「標的がアンタを待ってるわ。河原邸だってよ……ここは私に任せ、行って」

真剣な面持ちで、昨夜出会った青年からの伝言を伝える。

「了解した」

詩緒は短く返答すると、陰陽師の少女に背を向けた。

「詩緒！」

直後、駆け出した少年を、慌てて瑞穂は声を張り、制止した。

顔だけで振り返った少年と目が合う。

「……死なないでよ」

源蒼司は最強の『魔』。それが彼女の結論だった。

あれだけの邪気を放つ童子切安綱を自在に操り、その剣術も無双と呼べるほどの達人なのだ。

彼の元に一人、少年を送り出すことは、彼を死地へと送り出すこととはほぼ同義であることを理解している。

だが、詩緒も、蒼司も、再びまみえる事を望んでいるのだ。

「……俺は役目を全うする。ただ、それだけだ」

告げると、鬼切を手に詩緒は目的の場所へと赴いた。ただ、正面を見据えながら。

瑞穂の耳から、間を置かず、彼の足音は消えた。

不意に風が走る。

それは対象を切り裂く鎌鼬であった。

木行の氣を感じし、その動きを読むと、瑞穂は風の刃の軌道を避けて艶やかに舞う。

「……相方にお別れの時間をやったんだ。感謝してよね？」

不可視の刃が流れ来た先。振った刀を構え直した当麻は、にやりと嗤った。

「冗談。体力の回復を図ってただけでしょうが。そっちが感謝なさい。その時間を与えてやったんだから 十分なハンデでしょ？」

回避動作に乱れた、長い茶色の髪を背中に流すと、陰陽師の少女は上着から呪符を取り出し構える。

「何を!？」

眉間に皺を寄せて、当麻は凄む。

「熱くなるとあっさりと終わらせるわよ? まあ、どう足掻いても、

術者としての格の違いを教えてあげるだけだけど
「
瑞穂は不敵に微笑んだ。その表情は妖しくも美しかった。

第拾弐話：道

銃声が響いた。

それも一つではない。立て続けに木霊する発砲音。

この広い敷地を持つ邸宅に在っても、恐らくは外部にも、その音は聞こえているはずだ。

しかし、この屋敷に面した住宅は、彼の息のかかった人間で占められている。

銃声を聞いたくらいでは、誰も警察などには通報しないだろう。

一般には知られていないが、彼らは知っているのだ。

この屋敷には、所謂、暴力団の構成員と呼ばれる輩や、憲法で違法とされる銃器類で武装した非合法の護衛兵が存在することを。

彼らが何らかの理由で、その館の主に命じられ発砲をすることがあったとしても、それは彼が何者かを制裁しているのか、始末しているだけだろうと思うはずだ。その館の主は、この国に於いて絶対的な位置に近い場所にいる権力者なのだ。

その彼が、まさか襲撃されているとは夢にも思わないだろう。

だから、それは結果として最大の不幸を招いていた。

彼を守護すべく、現れる増援は存在しないのだ。

「何をやっておるのだ！」

再び聞こえた銃声の直後、バスローブに身を包んだ小太りの初老の男は怒鳴った。

誰に我鳴ったわけではない。

その書齋にいるのは彼、河原剛三、一人なのだから。

何者かが、この屋敷に正面から侵入したとの報告が入ったのは、つい今し方のことだ。

風呂から上がり、この邸宅で困っている愛人の部屋にでも行くかとしていた矢先のことだった。

瞬く間に取り押さえられ、あるいは始末され、自分の元に事後報

告の一報が来るはずが、未だにそれは届いてはいない。

「辰巳はどうした！ そのために平井に大金を積んでいるんだろうが！」

見苦しくも、喚き散らかす。その名前の剣士は、昨夜を最後に、その姿を彼の前には見せていなかった。

「ええいつ！ 役立たず共が！」

続けて怒号し、背後を振り返る。そして、剛三は机上の書類を八つ当たりとばかりに撒き散らした。

そこには取材記者や、テレビカメラの前で見せる作り物の穏やかさや、雄弁な態度はない。

自分の思い通りにならないことに直面すると癩癩を起こす。幼児と等しい、歳不相応な幼稚な男。しかし、それこそが彼のありのままの姿だった。

「お？」

屋敷を支配していた騒然とした空気が、変わっていたことに気がつく。

こつこつと、静かに廊下を歩く足音が聞こえたからだ。

「……ようやく終わったか、愚図どもめ！ 給料の見直しを図らんとな……」

悪態をつきながらも安堵の表情を見せると、剛三はどっしりとした見るからに高価そうな革張りのソファ―に腰を下ろす。

足音が止むと、替わりに扉をノックする音が静かな書齋に響いた。

「遅かったな！ 入れ！」

剛三は命令口調で吐き付ける。早くも平常心を取り戻していた。椅子に踏ん反り返るその様は、それを物語っている。

ゆっくりと扉は開かれた。外気と共に、室内に入ってくる蹠音きょしおん。

「……遅かったか。それは済まない事をした」

その扉から、悠然と入室した青年は不敵に笑い呟いた。

現れた男の顔を見た剛三は、驚き固まる。

「き、き、貴様はっ!？」

どうにか唇を動かすと、喉から声を絞り出す。

「……一会、ではなかったな」

その通り名を自身に教えた本人に、悠々と青年は語る。

そこに立つ者の名は、撰津一会。世間には放浪の画家として認知される人物。

しかし、その手にあるのは絵筆ではない。

血に汚れた刀であった。

河原剛三が知らぬだけ。それこそが彼の本当の姿。

彼は単に画家などではない。血の滴るその妖刀『童子切安綱』を操る魔剣士、源蒼司なのだ。

「な、何をしに来た!？」

曲がりなりにも、政界という修羅の場でのし上がって来た人物なのだ。この状況にあっても、虚勢とも取れるが、だが、強気な態度は崩さない。その点はある意味、偉大なのかも知れない。

いや。見下げた愚か者だな。

そう言わんばかりに、来訪者は嘲笑う。

「……絵を売りに来た、とでも言うと思うか？」

蒼司は呟くと、柄を握った拳をこめかみの横に置いた。そして、童子切を右斜め前へと振り下ろす。

傘の水滴を払うように、刀身から朱が散る。^{あけ}

血振りをしたのだ。すでに幾人も人間の血を、今宵の妖刀は吸っていた。

「な、何だと!? わ、儂を脅す気か!? 童!」

侮蔑の笑みに、刀を振るう姿に剛三は激怒するも、腰は引けていた。

「だ、誰か居らぬのか!? ここに侵入者がおるぞ!」
続けて叫ぶ。

だが、反応はない。

「抵抗しなくば見逃した、が……残念だな。護衛は斬らせてもらった」

ゆつくりと、その身を剛三に近づかせながら、剣士は告げる。
がたり、と大型のソファーが大きな音を立ててフロアに倒れた。
尻餅をつき、権力者は襲撃者を見上げる。

「か、か、金ならいくらでもやる！　だ、誰だ！？　誰に頼まれたんだ！？　そ、そいつの倍は出そう！」

河原剛三の表情は、ついに恐怖に張り付いていた。

裸の王様は、自身の置かれた状況を、漸く把握出来たようだ。

この手の輩は最後は決まって、こう命乞いをする。命は金銭でやり取りの利くものだとして理解しているらしい。例え、自身のモノだとしても。

無様にも慄き、腰を抜かし、それでも必死に両手で体を後ろに逃がしながら剛三は懇願する。

「……お前によって『魔』に墮とされ、私が解放した人間に、だ……私はただ、その遺志を汲んだだけのこと……」

解放とは、その墮ちた苦しみからの解放を指していた。つまりは、彼が抹殺したのだ。

「……お前が振りかざす権力は、産まれるはずのない『魔』を次々と産み出す……」

剛三の目の前で足を止めると、襲撃者は彼を見下した。

冷淡な視線が、館の主を刺す。

「わ、儂が何をしたというのだ！？」

殺人示唆。昨夜、カメラマンを一人、始末させておきながら。さらには偽証、偽造、横領、強要、恐喝。数え上げれば切りがないほどの、自分のこれまでの悪行の数々を棚に上げ、厚かましくも糾合する。

「ごっん、と剛三の後頭部に衝撃が走った。

終には、壁へと到達したのだ。これで最早、逃げ場はない。

それでもその身を壁へとへばり付かせ、少しでも、襲撃者から逃れようとする。

「……お前こそが元凶。私に定義させれば」

言いながら、蒼司は逆手に柄を握り直す。それは凶刃を突き下ろすため。

「ひ、ひいつ!?!」

恐怖が極まる。剛三自身、これまで幾人のその表情を満足げに晒って来たことか。

因果応報。そして、それが自身に還って来ただけのこと。

「人の身でありながら、貴様は紛れもなく『魔』そのものだ……」

躊躇することなく。剛三の心臓を目掛け、蒼司は童子切を突き立てた。

断末魔の叫びが、室内に反響する。

その瞬間を、どれだけの人間が望んで来たのだろうか。

「……安らかに眠れ……」

呟いた言葉は彼に向けられたものではない。

蒼司はここにはいない何者かの冥福を、静かに祈っていた。

二人の鬼を斬った名刀を振るう剣士の死闘は、思いがけず訪れた。無二の親友の命を奪うこと。

その決意を胸に、斬り込んだ少年の体に異変が起こったのだ。

突如、苦しそくに咳き込むと、喀血とも吐血とも判別のつかない赤を、柁希は零した。

口から吐かれた、夥しい大量の血液が地面を濡らす。

「柁希!」

蒼司は叫ぶ。そして、駆けつけようとした彼を制したのは、他で

もなく柁希であった。

「来るな！」

「……柁希!？」

「来ないでくれ……君は僕の敵になったんだ。そうだろう？ 蒼司

……」

鬼切を杖代わりにその身を支え、倒れることを拒むと柁希は微笑んだ。

唯、寂しげに微笑み、蒼司を見詰める。

「……いつからだ？」

拒絶され、ただ立ち尽くすのみの少年は訊ねていた。

先刻までの殺気に満ちた空気は、辺りにはない。

「……いつから、だろうね……」

そこにいるのは単に二人の少年。

互いが、互いを心底、必要としたはずの友人。

否。互いにそれを過去のものとは認識していない。

今も。そして。

「……蒼司……君は僕に斬られるつもりだったんだろう?……」

血に汚れた顔を拭うこともせず、弱々しく柁希は呟いた。

封印されていた童子切安綱を奪ったことは、そのためのお膳立て

なのだ。柁希は確信している。

彼がその気になっただけなのならば、そんな一本の刀に頼ること

はしないだろう。

一人、奔出すれば良かっただけのはずである。

その意思を決するだけの精神力も、それを実行に移せる技量も、

彼が十分に有していることを誰よりも知っているのだ。

だから、解る。彼の真意が。

源蒼司という少年は、完全なる『魔』に堕ちる前に、誰かに止め

られることを望んだのだ。

「柁希……」

蒼司はただ、彼の名前を口にするこゝとしか出来なかった。

「……ごめん。見ての通り、僕は無力だ……君の力には、なれない
みたいなんだ……」

柩希は力なく項垂れる。

その足元。自らの血で地面を染めた赤。そこに無色の雫が跳ねた。
口にした言葉と共に、流れた涙。

今の柩希に叶うのは、ただ、それだけ。

想いを伝えることのみ。

想いに応えたくとも。悲壮の決意で戦いに望もうにも。肉体とい
う束縛は彼を抑圧し阻むのだ。

ひとつ。

ふたつ。

呼応したかの様に、空から落ち始めた雨粒。

それは誰の心模様。

雨の匂いが強くした。

血の臭いを消し、死の在るその空間を浄化するように。

静かに、静かに雨は降りしきる。

蒼司は天を仰いだ。

灰色の厚い雨雲がそこには広がる。

「……私は……」

おもむろ
徐に呟いた言葉。

「……私の道を往く」

それは新たな決意。ここで終わらせるはずだった道を、先まで歩
んで往く覚悟。

雨に打たれながら。蒼司は童子切を鞘へと納刀する。

その瞬間、それは確かに、彼の愛刀となった。

「だから、柩希。お前はいつか、私を止めに来い」

そして、続けて力強く、語りかける。

童子切安綱。それは今、二人を繋ぐ絆となる。

「……蒼司」

柩希は顔を上げ、親友を見上げた。

「私を止められるのは、お前しかいない」

その視線の先の親友は頷き、薄っすらと笑う。

「……君は厳しいな……」

雨が濡らす微笑み。

そこには体に反し、弱さや脆さはない。

それはいつもの柁希が湛える、やさしく他者を包み込むような笑顔だった。

「また会おう。その時こそ、雌雄を決する時だ」

微笑みに返し、そして、蒼司はゆっくりと親友に背を向ける。

彼には、それが今生の別れになるとは思わず。思えず。

荆棘の道の果て。その場所に、いつか、この親友が立ち塞がると確信して疑わずに。

しかし、その背を見送りながら柁希は自分の体のことを悟っていた。

「蒼司！ 聞いて欲しい……もし」

だから、気がつけば、友人が踏み出した足を制していた。

降り出した雨は、当分、止みそうになかった。

「あれから四年、か……」

窓から見える空は、厚い雲に覆われていた。

あの日の雲に似ている。

言葉を独りごちた青年は、そんな錯覚さえ感じていた。

「もし……僕が無理だったとしても、君を止める者は確かにいるよ」……だったな……」

最後に聞いた、親友の声を反芻する。

今まさに、この場に迫っているであろう、柁希の言葉が示した人物。

確証はないが、確信している。

あの少年こそがそうなのだ。

「……………『僕の意味を継ぐ者。僕を超える者』か。……………柁希。果たして、それが真実か……………今宵こそ、見極めさせてもらおう」

蒼司は凶行の舞台に一人、残っていた。

渡辺詩緒。

その待ち人は、未だ現れてはいなかった。

第拾参話：律法者

「ほざけよ！ 誰がお前に劣るっていうんだよ！」

瑞穂の挑発じみた発言を受け、当麻は刀を袈裟に走らせた。刀身に宿る魔力。それに切断されるのは大気。その軌道に生じた真空は刃と成る。

剣士の眼前の空間から疾行する颯風。それは標的を斬り裂くべく閃く。

斬間を遠く離れた敵にも、彼の凶刃は優に届くのだ。

魔力を帯びた当麻の刀は、詠唱などを必要とはしない。瞬間に、彼の思いのままに、風の力を発現させる。

八卦の一門、風。その力を司る剣士。

八卦衆。当麻はその集団を構成するのはエリートだと言った。

その能力は、決してその言葉に恥じるものではない。

風を操るといふ超常的な力。事実、その一卦に関しては、当麻は目の前の陰陽師の少女の上を行くのだ。

彼女はその力を行使するのに、五行の理に従っての手順を踏まねばならないのだから。

その上、その陰陽師は十把一絡げな陰陽師ではない。

こと、五行秘術の行使者としては、稀代の、と謳われる者なのだ。「散！」

手にした呪符を自分の前に放ると、その陰陽師はそこに封じた力を発動させた。

その力に、周囲の木行の氣は強制的に拡散させられる。当然、当麻の不可視の刃とて例外ではなかった。

その符に籠められていたのは木行を剋す秘術。

刃と化した風は凩ぎ、やさしいそよぎへと変わる。

ふん、と当麻は鼻で一つ、笑う。

自らが放った魔力を帯びた風を無力化されながらも、何ら不利な

ものは感じさせる素振りはない。

「バカが！ 一日がかりで何を用意したかと思えば！」

吼えつつ、刀を薙ぐ。再び生じる真空の刃。

「そんな紙切れ用意したところで、いつまで俺の風が防げる！」

言つが早いか八卦の剣士は駆けた。先行する不可視の刃に続き、陰陽師との間合いを詰める。

「すぐに打ち止めにしてやるよ！」

その言葉は自信。そして、真理。

瑞穂の呪符は有限のもの。どれほど準備したかは判らぬが、高が知っているのだ。

対して当麻の風を操る力には制限はない。竜巻を繰る様な大技さえ使わなければ、無際限に行使出来る。

少女へと迫り来る二つの凶刃。

瑞穂は流れ来る風の氣を読みつつ、敵の動きを洞察する。

彼女は近接戦闘にも精通していた。それは事実、逃げ出したこともあるほど、幾度となく繰り返した模擬戦の賜物である。相手が剣士であるのならば殊更、その経験は活きる。

瑞穂が幼い頃から戦闘訓練を繰り返してきた相手は、彼よりも剣術では何枚も上手を行く者だからだ。

数年前にはそいつが見せていた体捌き、剣速。

それ単体では、瑞穂にとってさして脅威ではない。

「……甘いわね」

凶風をやり過ごし、敵の凶刃を往なすと、陰陽師は跳躍した。

そして、空中に身を躍らせながら、新たに取り出した二枚の呪符に素早く晴明桔梗を描く。それぞれ放つ。

だが、当麻はそれを悠々と回避した。

「大事な呪符が無駄になったな！」

「どうかしら？」

しかし、少女は不敵に微笑む。

「ふん。いつまでその余裕が続くか見物だね！」

言葉に続けて一太刀、二太刀と連撃を見舞う。それは刀で直接、敵を斬るために振るわれたわけではない。着地点を狙い、風の刃を陰陽師に走らせたのだ。

「散！」

無防備な着地の瞬間。それを護るのは、またも風を無力化する呪符だった。

「後、何枚あるんだ？」

声とは裏腹に。しかしながら、そこに焦りはない。余裕をもって八卦衆は動く。

そのゆとりは、魔術戦的な優位性だけから来るものではなかった。この戦闘は現状、総てにおいて有利に進めていると確信しているのだ。

魔力による風を単に自然現象のそれに還す障壁。その霊的な境界を超え、侵攻する当麻。手する刀の斬間へと入る。

実刀と虚構の刃。その連携こそが風の剣士の真骨頂。彼とて基本は剣士。その距離こそが、当麻の最も活きる距離^{レンジ}。

「これはどうだよ！？」

至近距離で振る刀身に、同時に風を纏わせる。

薙かれた刀。それを回避されるも、直後、纏われた旋風は伸びを上げた。

「甘いのはどっちだろうね？」

標的の回避動作に、したり顔で晒う。

「っ！？」

つじ風は乱流を生んでいた。その乱れ風は無作為に舞う。その風もまた、真空の刃を宿しているのだ。鋭利な小型の刃は次々と周囲を襲う。刈られた芝が宙を流れる。

威力は高くはない。しかし、それは人の身を裂くには十分な切れ味を持っていた。

瑞穂が痛みを漏らしたのはそのためだ。

白い肌^に幾筋か裂傷が生まれる。

「陰陽師！ 命乞いをして、もう遅いよ！」

「この程度で！ 誰が！？」

強気で返すも、現状の不利を瑞穂は理解していた。

剣士と魔術師。この距離では後者が圧倒的に不利なのだ。敵を仕留めるべく魔術の詠唱をしようにも、それを行うことが出来ないのだから。

瑞穂は間合いを作るべく逃げるも、当麻とてそれを許すはずもない。

「逃がすかよ！」

台詞通りに追撃する。間合いからは逃さない。

「終わりだ」

にやけ面で宣告する。

勝利を信じて疑わず。当麻は優越感に恍惚とした表情を見せた。

「……おメデタイ奴ね」

少女は、その様を嘲笑した。

中空を何かが疾走する。

「ぐうっ！？」

直後、背中に感じた痛みを当麻は漏らした。

剣士と交錯し、暗闇を舞った一羽の隼。

その鍵爪に身を裂かれたのだ。

それはこの場に現れる前に、陰陽師の放った布石。瑞穂の式神であつた。

「発！」

好機を見逃す瑞穂ではない。構えていた符を敵の眼前で爆発させる。続け、清明桔梗を手早く描いた呪符を三枚目、四枚目と投じた。当麻から遠く離れた場所へと。

それらの狙いは辰巳当麻本人ではないのだ。

火行の呪符による爆撃は、その後に投じた符の存在を晦ませるためのもの。十分な殺傷能力を持ちながらも、あくまで最終目的のための捨て札でしかない。

風が猛ける。

強烈な気流が天へと、うねりを上げる。

その風で直前に爆ぜた火行の力を上昇させ、障壁とし当麻は直撃を避けたのだ。

「賀茂！ お前いつの間に！」

負傷した痛みにも、剣士は怒号した。激しい風が二人の着衣を、髪を靡かせる。

「ずっといたわよ？ 式神の気配に気付けないなんて……余程、鈍感なのね」

少女は挑発するように、薄っすらと微笑んだ。真の目的を看破されないように、自身に注意を惹きつけるために。

「なめるなっ！」

効果は十分だった。当麻は熱り立ち、続け様に、その風で形成された障壁を爆散させる。

轟音が響いた。

火気のない爆発。純粹で強烈な大気の波が辺りに走る。

否。挑発の効果は十分過ぎたのだ。

「っ！ しまっ！？」

言葉を放ちきる前に、瑞穂の体が吹き飛んだ。

それ程の威力の風まで、八卦の剣士が瞬時に発動出来ること。それは陰陽師の少女の予測を遙かに凌駕していたのだ。

術者と同時に、低空を飛んでいた隼は弾かれていた。舞い飛ぶために必要な風。しかし、その風は制御することができず、隼は地面に酷烈に叩きつけられる。甲高く痛みの声で式は鳴く。しかし、不意に鳴き声がぴたりと消える。受けた損傷は、現し世に存在を維持する許容を楽に超えていたのだ。式神は一枚の呪符へと還り、風に巻かれ散り飛んでいた。

「えっ？」

ぼつりと琴音は零した。

彼女に踊りかかる鬼。その背後の強大な何かを感じ取ったのだ。それは刹那の直感。

感じた瞬間に、その力の種類を感じ取った体は動いていた。

手にした刀を深々と地に突き立てる。身を地面に伏せる。

魔獣からの攻撃から身を避けるには、正に真逆の行動。

だが。

直後、そこを衝撃波が駆ける。

空に在った鬼は、それに直撃し煽られる。巨軀は木の葉のさながらに風に翻弄され飛ばされていた。

その体が勢い良く、池に面した柵を破る。そして、やたらと大きな飛沫と音を立てて水中へと没した。

地面に二度、三度、瑞穂はその華奢な体を打ちつけながら、しかし、その勢いは止まらない。

終には、派手な音を立て江戸彼岸に激突した。

その衝撃に枝々が揺らされ、青葉が散る。

自らの見積もりの甘さを精算させた。そう割り切るには厳しいダメージが少女に課せられる。

「瑞穂！」

腹這いになったままの、琴音が彼女の名前を叫ぶ。

当麻は大声で笑っていた。

腹を抱え、心底愉快そうに。

琴音は立ち上がると駆けた。地に刺さっていた刀を引き抜き、桜の古木の下に。少女の元へと。

「……誰が術者の格の違いを教えるって？」

ふらり、ふらりと。一頻り笑うと、まるで泥酔してるかのように、足元をふら付かせ当麻は二人の少女へと歩み寄る。

「……女の子を何だと思ってるのよ……」

悪態付きながら、瑞穂は自らがぶつかった樹木の幹に寄りかかり、無理やりに体を動かすと立ち上がった。

「瑞穂!?!」

彼女の前に立った琴音が、抱き支えるべく手を差し伸べる。

「……まだ大丈夫、よ……少し、効いたけど……」

口から流れ出る血を拭くと、瑞穂は言葉でその手を制した。

「ははっ! いい様だよ! 賀茂!」

背後に響く、下衆な声。

その声に、琴音は後ろを振り返る。

その視線に宿るは殺気。

「……貴方、許さない……」

呟いた言葉。小さな小さな声。しかし、その幼い顔立ちには、不似合いな冷たい、強い感情が浮かぶ。

「……運はあつたみたいね。ここに辿り着けたんだもの……」

呼吸を整えながら、瑞穂は呟いた。

「え?」

その声に、琴音は視線を戻す。

「準備は整ったわ……その後は任せるわよ……アイツを止めて」
敵を見据えながら、彼女の幼馴染は囁く。

「でも」

琴音は不安を露わにした。

任されても自信がないのだ。少女には、辰巳当麻の不可解な力に
対抗するには経験も、知識もないのだから。

「大丈夫……私を信じて」

陰陽師はやさしく微笑んだ。それは術者としての確固たる自負の
表れ。

上着のポケットから一枚の呪符を取り出すと、清明桔梗を記し足
元に落とした。それが準備に必要な最後の一枚。

瑞穂以外に気付き様もない。その一枚で、この広場に呪符による
五芒星が完成していることに。それは結界であった。

「我、陰陽五行の理を律する者也……」

囁く様に詠唱を開始する。結界内部を、彼女の理が支配する世界に塗り替えるがために。

「木行、火行を生み、その力を減じよ」

ゆっくりとその手を空間に差し出す。

力在于る言葉。

相生。木行の氣を急激に火行へと変換させるべく。

「水行、澱みて木行を生み出す事無かれ」

その細い白い指先が、またも描くのは清明桔梗。しかし、それは呪符に記したものと違ふ。あれは儀式的な意味合いが強い。札に効力を持たせるための符号に過ぎない。

これは魔力増幅^{ブースト}。魔力を集約し強力な束縛を、五行、言わば森羅万象に命じるためのもの。

その小節が律するのは相生の禁止。木行へと流れる水行の働きを封じる呪。

「金行、その全てを以って木行を滅せ」

相剋。つまりは。

「何かしようたって、問屋が卸すかよ！」

琴音の背後の術者の動きを感知し、当麻は斬り込んだ。

突如、大気が震える。

それは彼の剣士の力によるものではなかった。

純粹で単純な。それは音による振動。水中から現れた鬼が咆哮を上げたのだ。

その鬼が猛烈な速度で突進し、側面から当麻を襲う。

「潤ー！？」

寸でのところで、それを回避すると当麻は鬼を睨み付けながら怒鳴る。

彼がここで当麻を襲ったのはその意思によるものか、偶然か。

しかし、それは少女たちには光明となっていた。

もう一度、吼え、潤ーだった鬼は、獲物を襲うべく跳躍した。

そのぎよろりとした眼まなこに映る標的は、辰巳当麻。

「三行を以って、此の地の木行を封ず……」

与えられた時間。陰陽師が継続する秘術の詠唱。それは発生させる事象の宣言。

「どこまでも邪魔だな！ お前！ いい加減！」

宙にある鬼に振られた刀。

「死ねよ！」

風が走る。

断末魔の叫びが、走り去った風を追った。

鬼の巨躯が、縦に割れる。

凶風は命を刈り運んだのだ。

「潤一くん!？」

琴音は走っていた。

「妹！ お前から死ぬか!？」

それを睨み、当麻が口端を歪める。酷く残忍な表情を浮かべる。

鬼は芥あくたと散り逝く。その様は桜の華の様に。

季節外れの、梅雨雲の下。華は舞い散る。

その散り逝く命の元。

「許さない!！」

滝口としての能力を、少女は完全に覚醒させていた。

「禁!！」

陰陽師の少女は、秘術を完成させた。

「アハハハッ!！」

狂ったように笑いながら。当麻は風で少女らを切り裂くために、刀身を閃かせる。己の力を誇示するべく。憎き男の血族を血祭りに上げるべく。

しかし。

風は応じない。

剣風は生じるものの、ただ、それだけだった。

当麻の表情が、驚愕のそれに変わる。

五行の理を自在に律することが叶う者　瑞穂の複合五行秘術。

「……アンタの負けよ。辰巳当麻。この地の木行は封じたの。貴方はこの結界の中では、その一切の力を使えない」

それはその術式の効果。

力を発動させるためのプロセス。瑞穂は確かにそこでは当麻に譲った。だが、森羅万象、五行の支配力に於いては、彼女が圧倒的に上を行くのだ。

目の前の現象。八卦衆の風を司る者の力。それを封じた事実こそ、その証明。

魔術戦の優位性。つい先程まで、当麻の思っていたそれは過信でしかなかった。

「そして、私は知っている。アンタより優れた剣士を少なくともも四人……」

続け、陰陽師の少女が、誰にとなく呟く言葉。

瑞穂の知る、四人の剣士。

一人は、ここから移動した滝口の少年。渡辺詩緒。

一人は、その滝口と対峙することを待ちわびる魔剣士。源蒼司。

一人は、名刀『蜘蛛切』くもぎりを担う現四天王の一人。瑞穂と詩緒の友人。

そして、最後の一人は。

「……優秀選手グッドプレイヤーそこの能力じゃ、最優秀選手バロンドールには勝てないわよ」

瑞穂の視界に存在する、その少女の背中。陰陽師は勝利を確信して微笑んだ。

第拾四話：問答

河原邸。

兄の愛刀を持つことを決意させた少年の敵は、ここで待つと少女を介して告げて来た。

海を一望できる閑静な住宅地。高級住宅地として名を馳せ始めている、その土地の一角に、それは在った。堀越しにも解る、広い敷地を持つ邸宅である。

江戸彼岸の広場を後にしてから、それほど時間は経過してはいなかった。

ここに到着するのに、少年が迷うことがなかったからだ。

ご丁寧にも敵は、指標にしるとばかりに邪気を発生させ続けているのだから。

今にも振り出しそうな、厚い雨雲が夜空を覆う。

正門は、少年を誘うように開け放たれていた。

左手に握られた刀を、小さな銀色の鈴を少年は見遣る。そして、躊躇することなく、その大きな木製の門をくぐり、内部へと侵入した。

静まり返った敷地内。そこに広がる手入れの行き届いた和風の庭園。その中道を黒衣の滝口は玄関へと向かい、一步一步、進む。

道すがら、数人の遺体が転がる。それは斬殺された護衛の人間。

その全てが見事に、一刀の下に斬り捨てられていた。

「……遅かったか」

少年は無表情にぼつりと零す。

この国では違法とされる兵装。しかし、それに身を包む者、例えばそれが犯罪者であろうとも。少年にとっては、その相手が『魔』と呼ばれる敵である以上、護るべき対象でしかないのだ。

ぴたりと、足を止める。

少年の、その鋭い視線の先。玄関を照らす門灯の下に、一人の青

年が立つ。

手にしているのは、少年と同じく一振りの刀であった。

その刀の鏝元に飾られた、古ぼけた木製の桃華がゆらり揺らめく。その華は単に装飾物ではない。

封印の証。そして、それは刀禍だけを抑制したものではないのだ。まだ見ぬ、その青年の本気。

それを抑止している枷でもあるのだと少年は、理解していた。

青年自身が邪気を発することは在りえないからだ。

滝口たちの言うそれは、この世ならざるものたちの気配のことである。青年はあくまで、純粋な人間でしかないのだから。

青年は先日ナレゲイトの接触において、その刀の力を解放していない。しかし、邪気を生じさせる、つまりは少年をこの場所に案内するのナレゲイトに、その力を行使して見せたのだ。

敵は、その刀に封じられた鬼の王の呪さえ自在に操れる。

それは、その証明。

「ちっ……」

少年は舌打ちをする。計り知れない青年の底を知り、そして、その力を使わずに尚、翻弄された自分の不甲斐なさを漏らす。

桃華の吊られた刀。それこそが妖刀と成り果てた、退魔の名刀。

その銘は童子切安綱。

「……遅かった、か？ 安心するがいい。そいつらは死んで当然の者たちだ。詩緒。お前が悔いることはない」

童子切を持つ青年が、静かに口を開いた。

「……お前が決める事じゃない……」

詩緒はゆっくりと、手にした刀を抜き放つ。鮮やかに光を反射する、その刀身。

この地に現れた目的は、明瞭としている。

滝口としての役目を果たすこと。目の前の『魔』を排すること。それだけのはずだ。

最早、会話は必要ない。その動作は少年の返答。

「ほう」

その刀を見て、蒼司は満足げに微笑んだ。

「鬼切、だな……」

それは詩緒の持つ刀。かつて彼の無二の親友が、少年の兄が振るった愛刀の銘。

「……ならば、私も本気であなたの相手をする刻ときが来た、ということか……」

言いながら、童子切を抜刀する。

「来い」

殺気などなく。そして、ただ冷静に蒼司は告げた。

「……後悔するなよ」

詩緒は蒼司を射抜くように見据え、駆ける。斬り込む。

鈴は小さく音色を奏でていた。

血の跡が水面へと続く。

風の痕跡が地面に痛々しく描かれている。

いつもの夜の静けさを取り戻した広場。

少女は二人、その広場の主の下にいた。

「……そう。鬼アシは、潤一くんだったの……」

「……うん」

瑞穂の声に、琴音はこくと頷いた。

「瑞穂？ 潤一くんは、もう」

問い。琴音の台詞が完全な意味を成す前に、瑞穂は小さく首を振って、それを止めた。

「……この世成らざるモノは、死して何も残さず、唯、塵に消える……」

そして、陰陽師の少女は口を開く。その言葉通りに鬼の姿は、跡

形もなく消え失せていた。

鬼を始めとするあやかし、妖怪、怪物、魔物。

古今東西を問わず、それら闇の住人たちは、死して軀などの痕跡を残すことはない。

それはこの世界自体が、彼らの存在を忌み嫌い、排除しようとしているからなのか。それとも、彼らの体が在るべき世界に還るからなのか。

真相は解明はされてはいない。

だが、それは覆すことの出来ない事実であった。

河原潤一が、この世界に存在した証明。

それはすでに、少女たち、彼に関わった人間の思い出にしか残されていかないのだ。

「そんな……」

涙目で琴音は呟いた。

「……私たちの存在する世界は、そういう世界……琴音。優しすぎる貴方には、厳しすぎる世界なのよ」

アイツと同じで。そう続けそうになり、瑞穂は口を噤んだ。

悲しい出来事の多い世界。

死という耐え難い決別が、いつも隣にある世界。

滝口は、陰陽師はそういう世界に生きている。

そして、何もそれは、その世界に生きる自分たちだけに起こりうる事態ではない。

否。むしろ、自分たち以外に発生することの方が、多いくらいなのかも知れない。

憎しみは連鎖する。

復讐という名の下に、彼らに親しい無力な者に、その世界から魔の手が伸びることも多いのだ。

アイツはそれが嫌で、一人でいる。

一人ならば、復讐の標的は自分でしかありえない。

だから、孤独と向き合い、抗い、耐える。
それがアイツの選んだやさしさの形。

孤高の剣士。そういう風に彼を評する仲間もいた。
でもそれは違つと、瑞穂は確信している。
良く言えばそういうこと。

しかし、瑞穂に言わせれば、詩緒は逃げているだけなのだと思う。
それは幼馴染という自分との関係でさえ、任務だけの繋がりではないという事実が物語っている。

いつかは。

瑞穂は自分の頭を過ぎつた想いを途切らせ、琴音を見た。

彼女の兄は、少女をよく理解しているのだと思う。そして、深く愛しているのだと思う。

彼は琴音に、この世界に踏み入る一切を封じていたのだ。

「…………ごめん…………」

気が付けば瑞穂は呟いていた。

世界の裏には、とても似つかわしくない少女。彼女がそこに引き込まれることを、防ぎきれなかったこと。そのために自身は、ここに現れたはずなのに。

「瑞穂が謝ることじゃないよ」

そのやさしい微笑みが、瑞穂の悔恨を溶かす。

「うつん……………琴音には、いろいろ黙つてたし……………」

「……………私のため、なんでしょ？ ………………解ってるよ」

その笑みに、一片の翳かげりも無かった。

「やっぱり琴音はやさしすぎるよ……………」

「そうかな？」

「うつん」

彼女は敵でさえ許したのだ。

琴音は当麻を殺めはしなかったのだ。

あの後。瑞穂が風の力を封じた直後。二人の勝負は一瞬で決した。僅か数手の攻防。その攻防で、琴音は当麻の両腕を負傷させ、八卦衆の剣士を無力化させたのだ。

実戦。確かにその経験は琴音にはなかった。しかし、真剣を用いた訓練なら幾度となく行なっていただろう。

そして、その相手こそ、瑞穂の知る最強の剣士なのだ。

少女の剣の師は、その剣士、源蒼司に他ならない。

負け惜しみとしか聞こえない捨て台詞を残し、逃走した当麻を、琴音は追いはしなかった。憐れむように彼を見送るだけで。

もつとも、当麻は広場に面した大池へと飛び込んだわけだ。

瑞穂でさえも、その気を失くしたわけなのだが。

「……瑞穂。教えて。もう隠す必要もないでしょ？」

不意に琴音は、真剣な表情で訊ねた。

「私、もう知ってるよ。滝口のこと、『魔』のことも。今、お兄ちゃんは瑞穂たちの敵なのよね？ どうしてなの？ 理由を教えてください。そうしてくれないと、私はどうしていいのか、解らないよ……」

儚げに。そこに八卦衆の剣士を撃退て見せた、強さは皆無で。琴音は、ただ真つ直ぐに瑞穂の目を見詰めていた。

「……ええ。そうね……分かったわ」

瑞穂は頷くと、彼女が知る源蒼司の情報を語り始めた。

「蒼司。お前は何故、獅子王を捨てた？」

その理由を詩緒は、瑞穂は知らない。

いや。その真相を知る者は、今や当人以外、誰一人と存命してはいないのだ。

鬼切を走らせ、詩緒は動く。

戦況はまだ、大きくは動いてはいない。

やや後手に回りながらも、詩緒は蒼司と殺陣を繰り広げていた。

「鬼切、か……少々、厄介な獲物ものを薦めたか？」

しかし、童子切の剣士は笑っていた。

「……いや。迷いを捨てただけか？」

満足げに独りごちる。昨日とは異なる青年の内面。余裕があるわけではない。この攻防は単に、渡辺詩緒という滝口の真なる実力がもたらした結果。

蒼司が認識した通りに、今の少年には気負いや、力みはないのだ。兄、柁希。その人物や過去の柁しがらみはなく、ただ本当に一人の剣士として立ち合っているだけのこと。

「……昨日の台詞は虚言か？」

雨に身を濡らしながら。兄とは関係なしに、ただ滝口として、自分の前に立ち塞がったと告げた少年。

しかし。

「かもな」

口元を、ほんの一瞬だけ歪め、少年は呟く。その声を掻き消すかのように、刃音が響いた。

蒼司の降るう白刃を、詩緒は鬼切の刀身で止めたのだ。

直後、滝口は全身の力を緩めると、その身を半身ずらした。同時に、鬼切の刀身で童子切を流す。刹那、刀を返し、薙ぎ払う。

その一撃を蒼司は地面を滑走するかのよう到低く短く移動し、回避していた。続け様、片足を軸にし身を捻る。その勢いを生かし、手にした妖刀を走らせる。

詩緒は最小限の動作で後方へと逃れ、その凶刃を避けていた。再現。

それは唯一、蒼司と柁希が命を賭して争った、あの日の流れと酷似レシミュレしていた。

既視感ではない。その拳動は。その太刀筋は。

「……なるほど……」

青年は悟る。親友が残した言葉に偽りはなかったのだ、と。

正眼に童子切を構え直すと、蒼司は薄く笑っていた。
意識した笑みではない。

自然と。ただ、自然と。

「……詩緒。お前にとつての『魔』とはなんだ？」

それは現れたのだ。蒼司が待ち侘びた相手。親友と。渡辺証希と同じ感覚を感じさせる相手。それはこの少年以外に在りえない。

「……資格を得たということか？」

その少年は言葉を返す。

「……どうだろうな」

浮かんでいる笑みは、しかし、肯定でしかない。

「……私が斬るのは『魔』を産み出す者、それを含む『魔』。例えばそれが、滝口の定義するものに反しようとも」

ただ無表情に戦っていた詩緒の眉が、蒼司の言葉に、ぴくりと動いた。

「例えば、この館の主がそうだ。その者が振りかざした権力という力は、魔性の力となんら変わりはない。その力に、どれだけの人間が犠牲になったと思う？」

独白のように。蒼司は言葉を紡いだ。

「それが理由か？」

知りたかった答。それは彼の兄が、最後の戦いを決意した想いに繋がるもの。

しかし、それを知った詩緒に表情はない。

「……私が力を振るえば、救われる人間がいる。……滝口の定義では救えない人間。お前も感じているはずだ。嘆いているはずだ」

それこそが、棟梁であったところに蒼司が感じていた葛藤の正体。

「とんだ偽善だな。だったら警察か、裁判官にでもなればいい」

だが、冷たく放つと詩緒は地面を蹴った。

「そういう者こそ、それを楯にする。ならば誰が彼らから人々を守る……」

言葉に応じた青年との間合いを詰めると、黒衣の少年は鋭く突き

を穿つ。一つ、二つ、三つ。そして、四つ。それは一足にして繰り出される四段突き。

「滝口おれたちにそんな権利などあるものか」

その一手は、その思想の拒絶。その意思表示。

「……お前にも、その力は十分あるはずだぞ？ 詩緒！」

蒼司は言葉を残し、攻撃をかわすべく後方へ跳躍する。

「そんな力は持ち合わせていない！」

詩緒は逃がさず。距離を作らせないように動いていた。

「……理解出来ぬようだ。その様な輩を生かせば、際限なく『魔』は産まれる。排除すべきなのだ！ 奴らは！ 何故、解らん！？」

童子切が閃く。その担い手の感情の昂ぶり。それは詩緒の得意とする戦術を容易にしていた。

読み取れなかった殺気、気配をそれは露にしているのだ。

「一つ、はつきりした」

その刃を易々と往なし、滝口は下段から鬼切を跳ね上げた。刃風が走り、蒼司の身を裂く。

「……源蒼司。やはり、お前は『魔』だ」

続ける言葉。しかし、先の一撃は踏み込みが甘かった。いや、外されたのだ。避けた者こそ褒めるべき攻防だったに過ぎない。

「偽善を振りかざし、滝口の、童子切の力を使う『魔』に過ぎない」

僅かに裂かれた蒼司の左胸部。和服が斬られ、血が流れる。しかし、浅い。戦闘になんら支障はない。

「……ならばどうする？」

その傷を戒めとし、冷静さを取り戻すと、蒼司は突きを放っていた。

それは無拍子に、動作を悟らせることをさせぬような神速の一撃。

「お前を殺すまでだ」

首の皮一枚を斬られつつも、その刃を流した詩緒は返答する。

月が。星が見えない夜空。

そこは今だ、厚い雲に覆われて。

しかし、まだ。雨は降り始めてはいなかった。

第拾五話：慟哭

「……お兄ちゃんが人を……」
開かれた琴音の瞳。驚きと、決して認めたくはない事実がそこにあったのだ。

「ごめんなさい……でも本当のことなの……」

事実を伝えはした。しかし、それが本当に良かったことなのか。語り部には正解は判らない。だから、なのだろう。それを語り終えた時、瑞穂の口をついたのは謝罪の言葉だった。

「でもね……私も『魔』に堕ちた人間を殺めたことはあるわ……殺人者という意味では、蒼司さんと同じよ……」

しかし、続ける。それは弁解でも、正当化でもない。それとて単に事実なのだ。

「『魔』の力を行使する者は、私たちがじゃないと止められない。もちろん、無力化させるだけで済むのなら、それに越したことはない。絶対に殺すワケじゃないわ……でも あるのよ……」

震えを見て取れる、目の前に座る少女の細い体。そこまでの距離は、手を伸ばしきらずとも届く程。

だが、瑞穂にはそれが絶対的な距離を持つものだと感じられた。

その身震いの真意が解らない。

怯え、恐怖。

不安、拒絶。

否定的な言葉が頭の中をぐるぐると回る。

琴音はその震えを止めることが出来ないままに、幼馴染だったはずの少女を凝視している。

「聞かせて」

私は逃げない。

私はアイツと一緒にじゃない。

同じじゃダメなのよ……！

「それを知っても、今までみたいに私を信用出来る？ 私との関係を続けることが出来る？」

意を決すると、その視線を避けることなく、真っ直ぐに受け止め、瑞穂は訊ねていた。

暫しの沈黙。

そして、琴音はゆっくりと頷く。

「……瑞穂は瑞穂だもの……私にとって、貴方はかけがえのない人。それは変わらないよ。瑞穂の言葉は信じられる」

開いた口から送られた言葉。

「ありがとう」

感謝と共に、世界の裏に生きる少女は微笑んだ。

それは何物にも変えられない宝物のような言葉だった。

一つ、息を飲むと、感激に震えていた陰陽師は語り出す。

「だったら」

「だったら？」

瑞穂の言葉を反芻して、幼さの残る可憐な少女は次の言葉を待った。

「お兄さんは信じられない？」

返事の声はない。しかし、琴音は大きく頭を振った。

「私もよ。……私も蒼司さんが理由もなく、『魔』ではない人間を殺めるとは思わないわ」

信用に足る人間。事実、青年は自身の窮地を救ったのだ。

自分が敵対する勢力 陰陽寮に属する退魔術師だと知りながら。

そして、その戦いの後に、彼は瑞穂に言った。

「……『滝口や、陰陽寮の掟では護ることの出来ない人々がいる。ならば、私は『魔』に堕ちようとも彼らを救いたいのだ』……」

その言葉を、そのままに。瑞穂はその妹である少女に伝える。

「貴方のお兄さんは、単に人殺しじゃないわ……」

瑞穂は続ける。それにもう一度、琴音は頷いた。気が付けば、彼女の震えは止まっている。

「でも……」

しかし、その口から漏れた否定へと続く言葉。

「間違ってるよ……」

そうとだけぽつりと零し、琴音はゆっくりと立ち上がった。

「琴音？」

少女を見上げると、瑞穂は彼の人物の妹の名前を口にする。

「……『魔』なんていう普通の力じゃないものに立ち向かうのは解る。でも、間違ってると思う。人に人を裁く権利なんてない」

「琴音……」

「教えて。お兄ちゃんのいる場所を知っているんでしょ？」

力強く少女は言った。

「知ってどうするの？」

「止めるの。私がお兄ちゃんを止める」

瑞穂の問いに、間髪入れずに琴音は答えてみせる。

「……そうよね……詩緒じゃ役不足なのよ……」

「瑞穂？」

視線を背け、囁いた瑞穂の声は琴音には届かなかった。

「河原くんの屋敷よ。私は大丈夫だから。気をつけて行ってきなさい」

そして、再び少女を見上げると、陰陽師は彼女の欲した答えを提示する。

「ありがとう」

その答えに微笑みで返すと、琴音は一目散に駆け出した。

その背中に迷いは見えない。

前を。ただ前を見据えながら、走り行く琴音の姿は、瑞穂の視界からすぐに消えた。

「ちっ！」

小さく漏らす、焦り。

詩緒は童子切の鋭い刃を、ぎりぎりに回避することで必死だった。読めないのだ。

童子切から発せられる邪気が、その担い手の気配を隠す。

その邪気に紛れ、敵は動き、斬撃を仕掛ける。

否。それだけではない。

その邪気は蒼司へと少しづつ、少しづつ取り込まれていくのだ。

それに応じて、魔剣士の動きが変わって行く。剣速が、その身のこなしが徐々に加速して行く。

今は、詩緒の対応できる、ぎりぎりの動き。

しかし、それが明らかに上限ではないことを推して知れる。

白刃が閃く。

それこそが、正しく閃くという形容。

滝口の反応は、終に追いつかない。

「ぐっ！」

詩緒の口から痛みが漏れる。

当然の如く、それを少年は避けきれなかった。その刃に黒いシャツが袈裟に裂かれる。

それでも、どうにか致命傷は回避させていた。

しかし、左肩には深い裂傷が生じている。だらりと力なくぶら下がる左腕を、血が流れ落ちる。

「……強くなり過ぎたのかも知れんな……」

不意に蒼司の声が前方で起こった。

「何!？」

驚愕。

言葉と共に、詩緒の顔にそれが浮かぶ。

気が付けば、敵は少年の目の前に立っていたのだ。

易々と斬間に、詩緒の占有していたはずの空間に侵入を許していた。

その体に負傷を負わせた太刀筋は見えてはいた。来る事が解っていた。だからこそ、死という最悪の事態は免れた。

だが。その男がそこに現れたこと。それは完全に虚を付かれていた。

反応の限界の向こう。敵がその領域に足を踏み込んだということ。それが示すのは、ただその事実だった。

「私とお前とでは、すでに次元が違う……そういうことなのだろう……」

蒼司が寂しげに笑った。それは錯覚だったのだろうか。

直後、詩緒の体が弾ける。

何をされたのかを理解するのに、一瞬のラグが詩緒には生じていた。

打撃に生じた衝撃。それが彼を襲ったものの正体。鈍い痛みが走り、少年が状況を把握した時には、その体は宙を舞っていた。

黒衣の滝口が勢い良く、後方へと飛ぶ。地面に数回、全身を叩き付けながら転がる。

童子切の刀禍が与えたのはスピードだけではない。パワーとて然り。

それは担い手の身体に、人の次元を軽く凌駕させる力を与えているのだ。

そこに居るのは人間『源蒼司』でありながら、刀禍の主『鬼の王』に限りなく近い存在。

「……不思議だが……柩希が生きていたのなら、今の私とでも互角に戦えそうな気がするのだ……」

薄く微笑み、それは呟く。その目は、激しく地べたを転がる詩緒へは向けられてはいない。虚空を、ただ映す。

遠く離れた先。そこでようやく勢いを殺した少年。

彼が求めた人物の弟は、血を吐き捨て、ふらりと立ち上がる。

「……同感だな……」

そして、同意してみせる。

詩緒にも予想出来ないことだった。兄が戦いに於いて、遅れをとる姿など想像も出来ない。

「お前の限界はそこか？ 私はまだ、本気を出し終えてはいないぞ？」

ゆっくりと視線を、自身が過去に統率していた組織の、決別した組織に属する少年に戻す。

「……どうだろうな……」

詩緒は自身のことながら、訝しげに返した。

しかし、そうは言いながらも、剣術の、自身の戦闘能力という点では、すでに現状の限界に達していることを詩緒は感じている。それどころか、この僅かな命の遣り取りで、驚くほどそれが伸びたと自覚さえ出来ていた。

後に残された要素は。

「……そうか……」

不意に、詩緒は自嘲して見せる。

「……お前に限界はあるのか？」

そして、敵へと向けて問う。

「ない……と言えは嘘になるな。童子切に籠もった怨念は深い。無限なのかも知れん。……それを力に変換し、受け入れるには、人の器では限界があるさ」

嘘偽りなく、蒼司は答えた。それを伝えて不利になることは、何らないのだ。

「……そうか」

呟き、滝口は力が入り辛くなっている体に、無理やりに戦闘態勢を取らせる。痛みを殺し、満足に動かない左手さえも柄へと添えさせる。

「……死んでも後悔しないよう……お前の持てる全力で来い……その上でお前を殺してやる」

それ自体にも、その魔力がある様に。殺伐とした視線を詩緒は見せた。

「……退け。勇敢と無謀は違う」

少年の台詞の真意を、蒼司は悟った気がしていた。

相手は自身を追い込み、持てる力の総てをかける気なのだ、と。

互いの状況が全てを物語っていた。誰が判別しようとも、同じ判断を下すはずである。

圧倒的優位に立つ者と、絶対的窮地に立たされた者。

二人の関係は、それでしかない。

「再戦の機会をやる。その時こそ、お前の最終判断をさせてもらおう……少なくとも、枉希に変わる可能性は見出せた……」

静かに。自身の希望とさえ言える言葉を蒼司は続けた。

「……可能性？ 何の戯言だ？ 俺には貴様の酔狂な趣味に付き合う気はさらさらない……死んで兄と戯れろ」

しかし、返された答えは、当然の如くの否定、拒否。吐き付ける台詞は、いつもの少年のものだった。

だからだと流血をさせながらも。負傷による影響や両者の有利、不利などの力関係はそこにはない。

滝口として。武士として。少年は敵に立ち塞がるのみ。

空が光を放った。

それは稲光。遅れて轟く雷音。

騒音。落ち始めた激しい雨が、辺りを、二人の剣士を打つ。

それすらも聞こえていない様に。詩緒はその刀を正眼に構え、その集中を維持し続ける。蒼司の思惑通り、次の一手に総てをかけるべく。

蒼司は童子切をゆっくりと構えた。

理解したのだ。

この少年を止める手は、自分にはそれしかないのだと。

「……そうか。……ならば、ここで幕を引くだけのこと」
悟りのように、蒼司は呟く。

直後、魔剣士は動いた。先に放った言葉が殺すべき相手に届くよりも速く。そう思われる瞬間にその身は距離を詰め、詩緒を童子切の斬間へと捕捉している。

童子切が命を消失させるべく閃く。

「何!？」

妖刀を閃かせながら、蒼司は異変に気付いた。

詩緒はただ意識を集中し、それを斬るべく動いていたのだ。

虚空を裂いた刃。

童子切の太刀行きの前に、輝きを放ったのは鬼切だった。

それは証希が使いこなした退魔の名刀。その冠する銘により『魔』を断つことに特化した聖刀。

形ないものでさえ、その意志の力が働けば断てる。

刀はそのための武器^{もの}。

証希^{あに}に出来ていて、詩緒^{おとつと}に出来ていなかったこと。

それは鬼切^{それ}を使いこなしているか、いないか。

蒼司の感じた異変の正体。それは自分の体の変化。刀禍に強化させた身体能力が失せていたのだ。

いや。失せたのではない。

斬られていた。

鬼切という刀の特性を活かし、意志の力を完璧に制し。

渡辺詩緒という剣士は、数多の術者が被えなかった鬼の王の呪を断ち斬って見せたのだ。

だが。その滝口が斬ったのはそれだけだった。

それを切り裂くことにのみ、集中させていた少年。それに総てを捨てた剣士。

童子切の刀身は、詩緒の体に深々と埋まっていた。
背中を抜け、雨に混じり、刀身を朱が流れる。

蒼司は、その身に纏っていた『魔』の力を斬られただけ。
詩緒の放った先の斬撃に、その身には一切の傷はない。

少年を殺すべく突き出した童子切はそのままに。

狙いは寸分違わずに、黒衣の少年の左胸を刺し貫いていた。

「……見事」

蒼司がぼつり、賞賛する。

先の詩緒の一手。

それは何れは到達したいと彼さえが想う、極めの一手であった。

ただ心底、感服し、その域に達した少年を称え、敬する。

そこで潰えようとする剣士を。

確かに、刹那、少年は剣の頂に至り、青年を凌駕して見せたのだ。
折り重なった二人の影。稲光がそれを雨に濡れた地面に落とした。

「……私は私の道を歩み続けねばならん。そういう宿命か……」

大粒の雨を降らす天を仰ぎ、蒼司は呟いた。

最終話：始点

闇。果てのない一面の暗黒。
そこには何も無い。

虚無。

それこそが、命が最後に行き着く処。

「……終わった、か……」

それは声ではない。少年の思念である。

この黒こそが、彼の死が在る場所なのだ。音というものさえ存在し得ないのだ。

不安と恐怖。その象徴たる闇に在って、不思議とその意識は穏やかだった。

そこは、自身に出せる総てを出しきって至った暗闇なのだ。

死に至る直前の行動が、どのような結果に辿り着いたのか。

少年にそれ知る術はないが、それは必要のないこと。

彼にとっては省みることなど、何も無いのだ。

不意に。

トクン。

闇が揺れる。闇が蠢く。

トクン。

闇が、騒ぐ。

「……くっ！」

痛覚などないはずなのに。

音などないはずなのに。

ただ、虚無であるはずの世界なのに。

確かに、その意識は感覚を、知覚を、存在しているものと認識していた。

それをもたらすものは、鼓動だった。

「……何を悟っている？」

思念が割り込む。別の意識のものではない。同一人格の意識に、同一人格の意識が反応しているのだ。

それは普段、故意に押し殺された少年の意識なのだろうか。それとも深層心理というものだろうか。或いは、死の淵に潜む人を誑かす存在なのか。

「黙れ」

不機嫌そうに、一つは返す。

「黙れないさ。俺なんだから」

それは、酷く彼じみて伝える。

「ふざけるな！」

「ふざけてないさ。認める。お前は恐怖している。このまま果てることを拒絶している」

「黙れと言っている！」

それはその意識を取り繕うように怒鳴った。

「……怖いんじゃないな。真の孤独を避けたいだけだ」

だが、それはただ、蔑み嗤う。

鼓動は益々、闇に激しく響いた。それに呼応して、世界そのものが、一面の黒そのものが、激しく揺れ蠢く。

「俺は」

足掻けよ。無様だろうが。

縋れよ。忌み嫌う力だろうが！

交わる思念。統合される意識。どちらともなく。

「鈴が必要な限りは……俺は死ねないだろう？」

「どこまでも俺を縛る……厄介な鈴だな！……」

鼓動は。虚無の闇に光を産んでいた。

降り頻る雨の中。

傘も差さずに、それに打たれ。歩み始めた青年の足が止まる。

「なんだと!？」

あり得ない感覚を覚え、蒼司は驚きを漏らした。

その感覚の正体は邪気。

人ならざる『魔』の撒き散らす瘴気だった。

彼の愛刀。邪気の源は、少年の体から引き抜かれた童子切の発するものでは、決して違う。

地べたに横たわらせた、黒衣の滝口を振り返る。

「お前か……」

その言葉を呟いたときには、蒼司は薄く笑っていた。

確かに。人であるはずの少年から、その邪気は産まれていたのだ。青年の視線の先。少年を死へと至らしめた、童子切で刺し貫いたはずの、左胸が驚くべき速度で復元、再生されていく。

「……なるほど、な……詩緒。私とお前とは、ここまで対極にあるのだな……」

人の姿のまま、邪気を発する少年。

蒼司は解する。

自分は外部から『魔』の力を取り込み、力として利用した。対して、少年は内に秘めたその力を、人のまま使う可能性を秘めていたのだと。

渡辺詩緒という人間が『魔』に堕ちるとすれば。少年のよく知る、その成れの果て。鬼へと変じるはずである。

青年の感じる瘴気は、正にその魔性の発するものであった。しかし、少年はその姿を人ならざるモノに変える気配はない。

「……恐ろしい男だな。この場は私の負け……そういうことか」

ふっ、と一つ笑う。

戦闘能力の増強たる力を、文字通り断たれた青年と。それを未だ秘めていた少年と。

この後、再戦を行ったところで、結果は明白である。

加えて、純粹な剣術という戦いに於いても、少年は瞬間的にはいえ、青年を遙かに凌駕して見せたのだ。

「……その力を完璧に使いこなす、お前を待たせてもらおう……」

蒼司は止めていた足を、再び先へと向けた。

荆棘けいぎよくの道の果て。死という結末を以って。止められることを望んでいた、かつての滝口には、新たな道が開かれていた。

それは唯一無二であった親友の代わりとなることに近い。

敵対者として、ではあるが、青年は少年にとって、明確な標となるだろう。超えるべき壁となるだろう。

そして、青年にとっても。

限界を感じつつあった自身に、少年は未来未来を垣間見せたのだ。

そして、何よりも。

「……共に高め合う、か。悪くないだろう？ 詩緒……何れ、私と

お前の力は必要となるはずだ……」

振り返ることなく。蒼司は呟いた。

断ち斬られたはずの。消失したはずの童子切の刀禍。

だが、その青年の手にある鞘へと納刀された妖刀は、薄くではあるがそれを再び発生させていた。

徐々に、徐々に。

呪は明瞭なものへと変じている。

それが示すのは、ただ一つの凶事。

伝説にある、その名刀で首を刎ねられ、滅したとされる鬼の王。

その鬼の王は未だ存命し存在している。その事実。

死した者の怨念であるのならば、こうして再び、刀禍が生じるはずはないのだ。

生霊。元凶はまだ、その刀を生きながらに怨み続けている。だから

からこそ、呪は再生される。

「また、相見えよう」

何時か。青年の歩む先に、再び少年と相対することを確信して。青年の姿は雨の中、夜闇の中に消え失せた。

少女は直向きひたむに走る。

鍛えられていたはずの体力も、実戦 命のやり取りを初めて行ったということに、予想以上に消耗していた。

いつもよりもその足が重い。

思うように距離を縮められない。

それでも懸命に走り抜くも、少女が目的地に辿り着いた時には、すでに雨は上がっていた。

スコールのように激しい雨を降らせた分厚い雲は流れ、空には薄雲の幕の上に、月がその輪郭を朧に浮かび上がらせていた。

大きな屋敷の並ぶ住宅地。

深夜と呼べる時間帯に達していたその場所は、ただ静まり返っていた。

その中でも一際大きな、少女の眼前の屋敷。それは内部に生在るモノの気配を感じさせず、まるで異界への入口の様に大きな門を開け放っていた。

琴音は息を呑む。

呼吸を整える時間を使い、覚悟を決める。

この中には探し続けた兄がいるはずなのだ。

しかし、それは感動の再会には程遠いものになる算段が極めて高い。

なによりも。この門をくぐるといふことは、日常との決別を意味することになるのかも知れないのだ。兄は世界の裏に生きる人間な

のだから。

それでも。

深呼吸を大きく一つ行くと、琴音は敷地へと足を踏み入れた。直後、緊張がその身を支配する。

「何!？」

自身の存在を悟られぬようにと思いつつも、しかし、小さく声を漏らしていた。

前方から近付いて来る足音が、その耳に聞こえたのだ。

雲間から覗いた月が迫り来る者、その姿を鮮明に映し出す。

「……え？」

歩み来ていた人影。差し込んだ月光が照らしたのは、一人の少年であった。

酷く汚れ、あちこちを裂かれ原型をほぼ止めていない衣類に反して、少年の体には傷一つない。

優しい輝きが照らすのは、その美しい顔立ち。

幻想的にさえ、少年は少女の目に映る。

「……渡辺、くん？」

少女は、彼の名を呟いていた。

「……源琴音……」

無表情に。詩緒は少女の名前を口にす。

少しづつ、縮まる二人の距離。

「あ、あの！ お、お兄ちゃんは？」

頬を染め、少ししどろもどろ気に琴音は訊ねた。

「ここには、もういない」

詩緒の歩みを止めずに、端的に答えだけを返す。

「そ、そう……そう、なんだ……」

消え入るように小さく語尾を呟くと、少女の表情は曇った。

安堵と落胆と。複雑な心境だと本人は思っていたのだろうが、その実、後者の感情が明らかに強いことが見て取れる。

俯いた少女と、歩みを止めなかった少年が擦れ違う。

限りなく近い距離。

だが、日常と非日常の果てしなく遠い隔たりが、そこに在る。

「渡辺くん。お兄ちゃんと……戦ったの？」

顔を上げ、振り向き様に琴音は口を開いた。そんなことが聞きたかったわけではない。

ただ。

ここで何の約束もなく、この少年と別れてしまうと、二度と逢えない気がしていたのだ。

何でもいいから。そう思って、口から出た言葉がそれだったに過ぎない。

そこに在る隔たりを超えて。

また逢いたい。

琴音には、確かにその感情が芽生えていた。

「……お前には関係ない」

琴音の耳に、微かに鳴った鈴の音と。その音に混じり、少年の冷く突き放す声が聞こえた。

少年は他人との交わりを極端に嫌う。

誰も巻き込まないようにするために。

例え、どんなに優れた人間でも。例え、どんなに強い人間でも。

世界の裏を知る者は、それに吞まれ、死に行く可能性が極めて高い。

自身に眠る、忌むべき『魔』の鼓動も。

そして、柁希の最後も然り。

兄は親友を救えず、止められず。その悲しみに囚われ、鬼に墮ちて詩緒に斬られたのだから。

「この鈴は笑顔のカタチ。……君が護った笑顔でもあるんだ」

近い人間を世界の裏に巻き込むことを嫌い、孤独を通した弟に、兄はこれを託した。

だから。
誰も近づけさせない。

兄の真意は決して他者を拒絶しろというものではない。
弟が孤独でないことを教えただけだったはずだ。
詩緒もそれは悟っている。

だが。

自身が孤独を貫くことで、護れた笑顔がそこにあるのなら。

それが、少年の選択した答。

鈴は戒め。

鈴は心の結界を形成する核。

「ま、また……また逢えるかな？ 上着！ 返さなきゃいけないでしょ！？」

会話を取り繕うように。少年の足を止められるように。それでも、少女は言葉を送る。

「……それはやる。そして、忘れる。俺のことも……源蒼司のことも」

だが、少年の足は止まらず。

「それでお前の悪夢は終わる」
去り際に、鈴の剣士が残した言葉。

「……それが私のためになるのかな？」
それに問う、少女の言葉に返事はなく。

少年を視線に追う少女と。振り返ることのない少年と。

そして、琴音と詩緒の距離は、ゆっくりと、確実に、開いて行く。
「……忘れないよ……」

一週間も経過した今では、誰も話題として取り立てずにいる。窮地に陥った琴音の前に、颯爽と現れた黒衣の滝口。クラスメイトたちの中の潤一という少年と同じように、あの少年もいつかは自分の中で色あせ、風化していくのだろうか。

「ごめんなさい。占いに関して、嘘はつきたくないから……正直に言っわよ？」

そう一言、断りを入れて。

「……その人と琴音が再び出会う可能性はないみたい……」

幼馴染の少女はそう答えた。

生まれて初めて出会った、気になる異性。その相手との恋愛運を診てもらった結果である。

単に最近、出会った相手だと偽り。全ての情報を伏せて、占ってもらった結果がそれだった。

彼女と彼は知り合いらしかった。

だから。という訳でもなかったが、琴音は占い師にそれを告げることが出来なかったのだ。

それも隔たり、なのだろう、と琴音は思う。

世界の裏と表と。

琴音が吐いた大きな溜息は、教室内のざわめきに掻き消された。そのざわめきに、ようやく琴音は自分の世界から呼び戻される。当たり前のこととして、何が起こったのか理解できてはいない。原因を探るべく、教壇の方に視線を送る。

「あ」

呟いた言葉と共に、状況を把握する。

そのざわめきは、そこにいる人物が起こしたのだと。

そういえば噂に聞いていた。

今日、転入生が一人、新しくクラスメイトになるのだと。

その生徒がそこに立っていたのだ。

それは美しい少年だった。

「渡辺詩緒です。よろしく」

担任の教師に促され、少年は挨拶をする。

無表情に。ただの決まり文句として。

世界の裏に生きる少年と、世界の裏に踏み入る決意をした少女。

不意に交わる二人の視線。

気がつくくと、琴音はあの夜と同じ微笑を向けていた。

戯言・挨拶（前書き）

本文ではございません。

よろしければ、お付き合いた下さい。

戯言・挨拶

どうも。世木維生です。

始めに、ご報告とお詫びを。

今作、執筆・投稿中にPNを『K』から現在のものに変更させて頂きました。混乱させてしまい、申し訳ありません。…いや、あちこちで自分で自分の新しいPNを間違ってしまった、アンタが一番混乱してるんじゃないの？なんて、野暮なツツコミはどうぞ、ご勘弁を（汗）

ここでは作品や、設定の裏話や、暴露をさせて頂きます。

え〜：今回はノンプロットで行き当たりばったりで書かせて頂きました。本当、ヤバくてキツかった…。こんなことするものじゃないですね。蓋を開けてみたら、戦闘ばかりで…（汗）

え〜そんな今作の一番の被害者が、隠そうにも隠せない八卦衆の面々です（笑）

今回は頭に、詩緒vs蒼司と琴音のカラミって物語の大筋はあったのですが、如何せんそれ以外が白紙の状態だったわけで…3話を書いた後、苦悶しました…投稿した後、4話をどうしよう？と、のたうちまわりましたね…琴音をこの先、どう物語に関わらせよう？どう詩緒と運命的と思えるような遭遇をさせよう…って（汗）

それで敵対組織を登場させ、琴音とバトることを思いつき、仕事の合間に友人に電話を。開口一番の僕の台詞はこうです。

「なんかいい呪術的な意味合いのある組織のアイデアねえ？」
いや。寝てたんですよ。彼（笑）仕事の合間っていつても『早朝』
ですもん。本当にイイ迷惑ですね〜。僕だったらキレて速攻電話を切ってます（笑）

しかし！しかし！彼は人がイイ！もとい！人が出来ている！それで彼がくれたのが八卦衆という組織でした。いや〜、本当に凄いや。

君！

「数字をからませた方がよくない？」

って台詞から、寝起きでよくそんな魔術系の知識を引き出し、考案したもんだ（笑）

八卦。

作中でも触れています。陰陽五行の内の4つを細分化したものです。風水や占いでいう、それです。

それと、護法で知られる八部衆とを合わせたものなんですが。

…しかし、付け焼刃。

僕自身がその一員を、今回スポットを当てた辰巳を良く把握出来てないって（汗）設定を煮詰めてなかったせいです…（涙）途中でコイツの一人称の選択をミスったなあ…とか、性格がすっかりと一致してなくない？…とか、ぼやいたのは内緒です…。

そして、刀につきまして。

今回、名前を記した刀は全て、その名前が歴史や伝承に残るものです。

西洋は英雄は優れた武器を持つ、って認識があり、いやさ、むしろ、英雄だからこそ、持たなきゃダメ！って風潮があるようで。数限りなく有名な名前のある武器が多いのですが…

どうでしょ？読まれて知ってた刀ってありました？…日本は美德として一步引くところがあり、また英雄はその人物自身が優れている、武器は関係ない！…ってのが風潮のようで、所謂、聖剣・魔剣の類が極めて少ないんですよ…。

ちなみに、ですが。作中で一度名前だけ出た「蜘蛛切」って刀、別名を「薄緑」といっています。実は源義経の愛刀だったって説もある刀なんです。…さらには詩緒の手にした「鬼切」は頼朝の刀だったって話もあるんですが…普通は知らないですよ…周りじゃ、知ってる僕が変人ですもん（笑）

でも、僕は刀が大好きだー！武器で一番美しく、魅力があるのは

刀なんだー！そして、日本の美しい武器Love！と豪語させてください（汗）

自分で物語を書くなら、絶対にそんな名前の知られていない日本の武器にスポットを当ててやるんだ！って思っていました（笑）

今後出しますよ！某漫画のチーム名で有名になった「小烏丸」を始め、「小狐丸」「雷切」「大通連」「小通連」「そはや丸」、もちろん他の天下五剣（これも本当にそう呼ばれてるんですよ！）「数珠丸恒次」「大典太光世」「鬼丸国綱」（鬼切と混同されがちですが別物です）「三日月宗近」、そうそう、槍も忘れちゃダメですよ！「蜻蛉切」や「日本号」。神話に目をあれば「天之尾羽張」「布都御魂」だの「天叢雲剣」（これは有名ですね。三種の神器！）「村雨」は曲亭馬琴先生の創作物ですから書けないかなあ。あ。伝説的な物じゃなくても瓶割、虎鉄、陸奥守、菊一文字、備前長船、和泉守とかそういう普通の（失礼。どれも名刀です！さて、誰の刀か解ります？ってメジャーどこばかりですね。底が知れる。）刀も好きですよ。物語に織り込むかは別として……さて……僕は書き続けることが出来るのでしょうか？（汗）

すみません。今回、本当に悩んだんですよ……作品は僕の趣味の色が強く出始めてまして……読んでくださる方が本当にいるんだろうか……？と。

本当にありがとうございます。こんな最後の駄文まで読んでくださる貴方様は、そんな僕を受け入れて（？）下さったんですね……（涙）

そんなこんなでくだらない戯言、今回の分は終了です。
本題に入ります。ご挨拶を。

4 & 4 K 先生。作品同様、ブログの更新も非常に楽しみで仕方ありません！いつもくんだりない書き込みコメントを返していただき、感謝です。そして何より、更新ごとのコメント。もう、感激も感謝もして足りません。僕が妹だったら、何をされてもいいのに（照）：「ごめんなさい。引かないください。僕、ノーマルです（笑）」本当にありがとうございます。

沙堂瑠々亞先生。美しい文章、見事な作品構成、面白い内容。どれをとっても、もう、ただただ、貴方様には感嘆するばかりです。本当に目標とさせて頂いています！：その割にはぜんぜん巧くなつてないなんて言わないでくださいね：「へこみますから（涙）」さらには、ありがたい後押しのお言葉を寄せて頂き。あの一言で作品を書き続けられました。先の悩みを解決してくれたのは間違いなく沙堂先生です。本当にありがとうございます。

かなえ様。素敵なイラストを本当にありがとうございました。

Sin様。同じく素敵なイラストを本当にありがとうございました。

本当にお二人とも巧いですよ！僕の拙い文章なんかで、よくあそこまで：（感涙）お二人のイラストに、様々なインスピレーションを頂きました。いずれ作品でそれを表現出来れば：と心から思います。大切に大切に保管させて頂き、作品で苦しむことがあれば心の支えにさせて頂きます！本当にありがとうございます。

ちよつと文章崩れて、友人T・K。今回のネタにもさせてもらったが、君がいたから「現代滝口譚」の世界はしっかりと構成されているんだいつも思うよ。存在してくれて、ありがとうございます。僕と出会うてくれてありがとう。「俺はT・Kに感謝している。T・Kに出会わなければ猟奇的殺人者になっていたから」って某漫画の帯の煽りじゃないけど、それぐらい君には感謝しているよ。就職しろよ！あと、頼むからコレ読んでくれ（涙）

月城柚先生。一読者として、同じ現代ファンタジーを書いている者として、氏の世界感・知識は、深く深く感嘆し、驚愕し、そして

何よりも楽しませて頂いています。「現代滝口譚」も、氏の作品に近づけるようにしたいですよ。本当に。こんな稚拙な物を書く僕と親交を持って頂き、本当にありがとうございます。もう、やりとりが楽しくて楽しくて仕方ありません。…仕事を放り出すくらいに（事実・そして、汗）そして、こんな作品をFF化して頂き、もう感謝感激です！今作の13話、14話部分を先生が作品化されています！まだ読まれてない方！ぜひ一読を！面白いですよ！あ、でも月城先生のが戦闘が凄い緊迫感あって、キャラが生き生きしてる！なんて思っちゃダメですよ（涙）脱線しましたね（汗）作品執筆中も、色々と相談に乗って頂き、本当にありがとうございます。

そして、こんなところまで読んで頂いた読者の皆様。皆様のお力があり、こうして今作も無事に終了を迎えることが出来ました。日別アクセスランキングの上位にさせて頂いたことも数度。もう、感謝感激です。モニターの前で、心より感謝のお礼をさせて頂きたく思います。本当にありがとうございます。もし、少しでも何か感じる場所がありましたら、感想・指摘・要望・苦情、なんでもお寄せ下さい。メッセージや、作品評価には感謝の土下座の後に、読ませて頂きたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。もう一度、本当にありがとうございますと、心よりのお礼を述べさせて下さい。

最後に、このような素敵な場所と機会を提供して頂いた、サイト管理人ウメ様に感謝しつつ、ではまた。

2006年 11月某日

世木維生

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7546a/>

神剣、慟哭する ~現代滝口譚2~

2010年10月8日14時51分発行